



JAPANESE THEATER
MIRAI PROJECT 2023

CONTENTS

目次

挨拶	01
概要	02
巻頭対談「ともに考えていくために～業界ネットワークという土壌ができること～」 吉田智誉樹 & シャーロット・セントマーティン	04
公演事業 参加団体プロデューサーによるインタビュー	09
● 阪急電鉄株式会社	10
● 株式会社博多座	12
● 株式会社バルコ	14
● 株式会社明治座	16
● 東宝株式会社	18
● エイベックス・ライブ・クリエイティヴ株式会社	20
● 劇団四季(四季株式会社)	22
● 株式会社シーエイティプロデュース	24
● 株式会社キョードーファクトリー	26
● 株式会社アミューズ	28
● 松竹株式会社	30
● シス・カンパニー	32
● 株式会社御園座	34
● 株式会社梅田芸術劇場	36
● 株式会社新歌舞伎座	38
● 株式会社東急文化村	40
● 株式会社ネルケプランニング	42
● 株式会社ホリプロ	44
● 株式会社サンライズプロモーション大阪	46
● 株式会社キューブ	48
● 株式会社ヴィレッチ	50
● 株式会社こまつ座	52
ポータルサイト特集企画「劇場のホスピタリティ」	54
関連事業	
アートキャラバン・サテライト	55
ポータルサイト	68
シン・つながりプロジェクト / MIRAI Letter Project	69
年次シンポジウム2023	70
舞台芸術おしごとナビ2023	72
舞台・ライブエンタテインメント産業に係る業界横断定点調査・分析	74

GREETINGS

新型コロナウイルスの感染症法上の分類が「5類」に変わり、長い間、舞台芸術界を苦しめたコロナ禍は、新しいフェーズに入ったように思います。ですが、コロナ以前の状況を完全に取り戻せたかという点、必ずしもそうとは言いきれない。生活様式やお客様の考え方が変化した影響は依然として残っており、完全な回復の為の努力は、まだまだ必要なのだと思います。そのような中、「日本の演劇」未来プロジェクト 2023”が果たすべき役割と意義はとても大きいように思います。

特に本プロジェクトが、首都圏だけでなく、全国各地の舞台芸術の振興に目を向けていることの意義は、文化の東京一極集中の是正という観点からも大切なことです。また、今回新たに加わった施策にも、こうした地域間の連携の強化を目的としたものが含まれると伺っており、大変心強く思います。

成長著しかったコロナ前の舞台芸術界の活況を取り戻すためには、本プロジェクトは必ず成功させねばなりません。精一杯の努力で取り組んで参りたいと思います。

劇団四季
吉田智誉樹

『寄ってたかって、光りましょう』

一昔前の韓流ドラマに続き、韓国エンタメによって、もはや巷間の若い人は、カフェで

「韓国人みたいで格好いいね」

と言っている(まさに今私は、真横で聞いている)し、うちの娘は、韓国語で韓国アイドルの歌を口ずさんでいる。

大昔、故某都知事が「三国人」などと差別語を連発して、優越感に浸っていた時代とはもはや隔世の感がある。どんなに内側から「日本は美しい、美しい」と叫んでも、美しさを決めるのは、外からであり、それを内から光って見せるのが、文化なのだ。文化は外から見える。共同体の外から文化が透けて見える。今、日本は韓国のように光っているだろうか？ そんなことばかりも言っていない。

文化で発光してみせる日本でありたい。コロナ禍で、奇しくも繋がることのできた、このネットワークが、あの時、コロナ禍を乗り越えたように、日本の文化をこうした姿にするために、次なるステージへ向かうべく尽力できたら、どんなにか素敵だろう。素敵だろう、などと他人事でなく、私もその一員として、力を尽くしていきたい。みんな、寄ってたかって、「光りましょう」

NODA・MAP
野田秀樹

この度のコロナ禍で、皆さんが強く感じられたのは、「人と人との繋がりの大切さ」だったのではないのでしょうか。リアルな環境でのコミュニケーションもなかなか取れず、実際に会えたにしてもマスク越しで表情もよく見えない、お互いの気持ちが通いにくい不自由な生活が本当に長い間続いてきました。

演劇に携わる私たちは、こうした厳しい環境の中、皆さまに「心の糧」となる作品をお届けして豊かな感性に触れていただき、その潤いを取り戻していただくために、ともに手を携えて、これまでも様々な取り組みに挑んで参りました。その中でも、この「日本の演劇」未来プロジェクトは、世の中は回復過程にはありながら、未だ都市部と地方ではその進み方に違いがある中で、質の高い文化芸術活動を支援し、全国各地での観劇機会を更に高めるために活動する大きな意義を持つものです。

その名の通り、「日本の演劇の未来」をしっかりと見据え、人々のもとに優れた作品をお届けして楽しんでいただくとともに、お客様とともに世界に誇る文化を築いていくこの大きな取り組みに、皆さまのご参加を心からお待ちしております。

東宝株式会社
池田篤郎

「日本の演劇」 未来プロジェクト

集い、つながり、生まれる力

「日本の演劇」未来プロジェクトは、
新型コロナウイルスの世界的流行という緊急事態に直面し生まれた、

舞台芸術業界の新たな連携・連帯を象徴する事業です。

日本の演劇の未来を見据えて結集した

緊急事態舞台芸術ネットワークの各団体が、

全国各地を舞台に各々の力を最大限発揮することで、

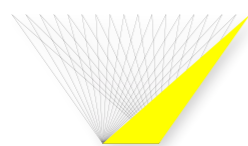
舞台芸術の持つ唯一無二の価値を社会へと広く発信していきます。

コロナ禍において、未だかつてない逆境を経験した今だからこそ

わかること、できること。

人と人が集い、つながることで生まれる力。

その無限の可能性と、演劇界の未来を信じて――



「日本の演劇」
未来プロジェクト

JAPANESE THEATER MIRAI PROJECT 2023

プロジェクトが目指す「未来」

新型コロナウイルス感染症により、世の中が大きく変わってから3年余り。大打撃を受けた文化芸術の活動基盤は、未だコロナ禍以前の水準には戻っていません。劇場での鑑賞を制限された舞台芸術の分野においては、イベント開催制限緩和後しばらく経った今も尚、低迷が続いていると言わざるを得ません。本プロジェクトではこのような現状を打開すべく、「公演事業」「広報事業」「連携事業」「調査・研究事業」を通じて、緊急事態舞台芸術ネットワークに所属する団体の文化芸術活動に対して、積極的な支援を行っています。全国各地で人や作品が活発に行き交うことで、未来に向けた「創客」と、演劇業界の活性化、社会における舞台芸術の価値がより一層広がっていくことを願い、多角的に事業を展開していきます。日本の演劇が常に進化を続け、人々に色鮮やかな感動と豊かさを届けていけるよう、これからも演劇が持つ力と可能性を信じて、未来へと歩み続けます。

事業概要

事業期間	2023年4月1日～2024年1月31日
公演数	71作品／374公演
上演地域	全国28地域 北海道、秋田県、宮城県、山形県、茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、新潟県、石川県、岐阜県、愛知県、三重県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、岡山県、広島県、山口県、高知県、福岡県、佐賀県、熊本県、沖縄県
動員数	304,670名
公演団体 (五十音順)	アミューズ、ヴィレッチ、梅田芸術劇場、エイベックス・ライブ・クリエイティブ、キューブ、キョードーファクトリー、劇団四季、こまつ座、サンライズプロモーション大阪、シーエイティブロデュース、シス・カンパニー、松竹、新歌舞伎座、宝塚歌劇、東急文化村、東宝、ネルケプランニング、博多座、パルコ、ホリプロ、御園座、明治座
協力団体 (五十音順)	アーツシード京都、アイオン、石井光三オフィス、INDEPENDENT、江原河畔劇場、王子小劇場、オフィス鹿、オフィスプロジェクトM、柿喰う客、CAT-A-TAC、くちびるの会、劇団あおきりみかん、劇団あはひ、劇団かかし座、劇団 短距離男道ミサイル、劇団 山の手事情社、青年団／アゴラ企画、ダンスハウス黄金4422、ネリム、precog、山本能楽堂、吉本興業、ラボチ、リコモーション、Level19
事務局(五十音順)	ゴーチ・ブラザーズ、ネビュラエンタープライズ、Booster、boxes

事業内容

- ◎ **公演事業**
新型コロナウイルス感染症で大きく萎縮した鑑賞環境を元に戻すとともに、日本を代表する22団体と全国28地域で行われる質の高い文化芸術活動を重点的に支援することで、人・作品・場などの流動性を高め、事業者の活動の安定化と実施地域の活性化を目指します。また、文化芸術の重要性や魅力を発信することにより、需要喚起を図ります。
- ◎ **広報事業**
舞台芸術の裾野を広げる未来にむけた様々な取り組みを実施します。活動報告書「みらいジャーナル」やリクルートイベント「舞台芸術おしごとナビ」、現在の課題を共有するための「年次シンポジウム」など、各種イベントを通じて広くお伝えしていきます。
- ◎ **調査・研究事業**
「業界横断定点調査」では、昨年度に引き続き舞台芸術界を産業として捉えて、客観的な指標データ収集を目指します。「舞台芸術業界強靱化のための研究・調査」では、舞台芸術界の未来のために、業界全体で取り組むべき課題をテーマに海外事例などの研究・調査を行います。
- ◎ **連携事業**
会員間の連携を目的に、地域、規模、ジャンル、世代を超えたつながりづくりに取り組みます。「シン・つながりプロジェクト」では、次世代を担う若手制作者によるネットワーク構築を推進。「アートキャラバン・サテライト」では、協力団体と地元の施設・演劇人によるプロジェクトを展開します。

SPECIAL TALK

CHIYOKI + CHARLOTTE
YOSHIDA + ST. MARTIN

緊急事態舞台芸術ネットワーク 代表理事



ブロードウェイ・リーグ 会長



ともに考えていくために～業界ネットワークという土壌ができること～

あらゆる規模と業種におよぶ団体が一致団結して、業界共通の問題に継続的に取り組むためには何が重要なのか。2020年に産声を上げた緊急事態舞台芸術ネットワークが、1930年から同様の活動を続けているブロードウェイ・リーグから学ぶことは、少なくないはずだ。このほど国際メンバーとしてブロードウェイ・リーグの会員となった吉田智誉樹理事が、同リーグのシャーロット・セントマーティン会長と、共通の問題について語り合った。

シャーロット・セントマーティン(以下セントマーティン) コロナは、ブロードウェイ・リーグが為すべきことの優先順位を変えました。実は約12年前に、私たちはアメリカ全土からのメンバーで構成される、立法審議会を設立していました。目的は、国内200以上の都市でブロードウェイ作品が上演されている状況に鑑み、市議会、州議会、連邦議会レベルで選出された議員たちと、ブロードウェイや劇場が、地域社会にもたらす価値や経済効果について話し合うこと。これにより、アメリカ政府が主導する形で、アメリカ全土の劇場を支援するための長期的な体制を構築することができたのです。

コロナ禍になり劇場が閉鎖された際も、この審議会を通じて

ブロードウェイの経済効果について理解してくれている政治家がいたため、ワシントンD.C.の多くの議員・政治家と連携し、連邦政府から「Save Our Stages(SOS)」という総額150億ドル(2020年当時のレートで約1兆6500億円)の助成金を獲得することができました(後に「Shuttered Venue Operator Grant(SVOG)」と名称変更)。受領対象には、ナイトクラブやコンベンション・センター、その他の舞台芸術や集会場、コンサート運営などの業種も含まれますが、この助成金がブロードウェイ業界に大きな影響と変化をもたらしたのは確かで、劇場閉鎖となった際に公演していた作品のほとんどを再開させ、新しい作品についても、間接的に支援することができた

と思います。この助成金がなかったら、ブロードウェイは再開後、一年もつかもたないかの瀬戸際に立たされていたことでしょう。そしてこの助成金が、各議員、ひいては政府とコミュニケーションを取るための、他の多くの方法への扉を開いてくれました。ニューヨーク州から、ニューヨーク市での上演作品に対する多額の税制優遇措置を初めて得ることができたのも、その成果のひとつです。これまで、商業演劇であるブロードウェイは、連邦政府、州政府、市政府からは、いかなる財政援助も受けたことがありませんでしたからね。

吉田智誉樹(以下吉田) 伺っていて、さすがアメリカだなと思いました。成熟した、ライブパフォーマンスについてのプロフェッショナルな組織があるということですね。ほんとうに素晴らしいと思いますし、羨ましい限りです。それに比べて日本では、コロナの危機に陥って初めて業界全体が手を組もうとするというバタバタぶりでございまして、そもそも業界の組織化がなされていなかったことが、日本においてコロナ禍をさらに深刻なものにした原因だと、改めて思いました。印象に残る出来事をひとつ思い出したのですが、2020年当時の日本の首相に、私たちの業界の危機を救ってもらおうと交渉に赴いた際、こう言われたんです。「あなた方の業界は、誰と話をすればいいかわからない。どんな危機に陥っているのかを定量化したデータもない。これでは、救いようがありませんよ」と。

セントマーティン データは重要です。私たちはコロナ禍以前の約12年間、ブロードウェイがニューヨーク市に与えた絶大な経済効果に関する、重要なデータを持っていたんです。その額は、年間148億ドル。そして私たちの業界が支払っている地方税(ニューヨーク市・州)は、年間10億ドル以上。さらに従業員など雇用に関する人口統計情報も持っていました。これらが非常に強力なメッセージになったのです。

吉田 お話を伺えば伺うほど、日本では業界の組織化や政府折衝など、あらゆることが足りていないことを、改めて痛感します。コロナの危機を通して、今お話くださったことをやっとなり理解したところなんです。緊急事態舞台芸術ネットワークを通して、定量化されたデータや、この業界が社会にどんな経済効果やインパクトを与えているかということを、きちんと数字で把握し、政府や自治体、社会一般の方々にアピールしていく。

今ようやく、それに取りかかっているところです。

セントマーティン たいへん素晴らしい取り組みだと思います。

吉田 緊急事態舞台芸術ネットワークには、いろいろな規模と業種の、ライブパフォーマンスで生計を立てている人たちの団体が参加してしまっていて、現在の日本において、業界を代表する組織になってきたのかなという思いがあります。そしてこれから、やっと本格的な調査を始めるという、ほんとうに第一歩を踏み出したところなんです。

セントマーティン ブロードウェイ・リーグも、さまざまな業種のメンバーにより構成されていますが、私が約18年前に雇用された理由のひとつが、メンバーたちの協力関係をより強固にし、さまざまな問題についてコンセンサスを築くことを学ぶ、そのサポートをすることでした。ブロードウェイ・ミュージカル『オクラホマ!』に「農夫と牧童は友だちにはなれない」という内容の歌(「The Farmer and the Cowman(農夫と牧童)」)がありますが、私は18年間、プロデューサーと劇場主を同じテーブルに着かせ、互いの問題を話し合い、理解し合ってもらいながら、業界を発展させることに尽力してきました。その努力が実を結んだのは、私が主要な委員会を形成する活動を始めた時だと思っています。現在、ブロードウェイ・リーグには25の委員会と28のタスクフォースがあり、300人以上のメンバーが、それぞれの問題に取り組んでいます。コスト削減、マーケティング、ブランディング、新しいチケットング・システム、人種差別撤廃についてのイニシアティブetc.と問題は多岐にわたりますが、何より重要なのは、人々がテーブルを囲み、業界の問題を解決するために協力し合うこと。それぞれの違い、たとえば、劇場の賃貸料はいくらであるべきか……といったレベルの問題はいったん脇に置いておいて、より強固な関係を築くことだと思っています。

吉田 まさに我々が今、進もうとしていることを先にされているわけですね。緊急事態舞台芸術ネットワークも、現代劇からミュージカル、小劇場に大劇場、さまざまな舞台技術スタッフ等、たいへん幅広い規模と業種の人たちが参加しているので、今おっしゃったように、全員の目線合わせ

をするのは、非常にたいへんです。そこで、お互いが本業でしていることについては、あまり干渉し合わないという方針のもと、業界全体で共有して考えるべき問題について一緒に考えようというスタンスをとっています。現在、2つの部会と、6つのプロジェクトチームと5つのワーキンググループがあります。私たちは、知らない間にブロードウェイ・リーグのみなさんの背中を追いかけているようです。

セントマーティン グッドラック！（幸運をお祈りしております）

私たちの25ある委員会のうち、いくつかをご紹介しますと、たとえば「労使関係委員会」には、13のユニオン（組合）との間で計17種類の契約を交わすための交渉を行う役割があります。ブロードウェイは、すべての業種がユニオンの

もとで動いていますのでね。「ガバメント・リレーションズ委員会」は、行政との関係構築を担当しており、立法審議会や選出された各議員に、ブロードウェイに関する教育を行いながら、さまざまな方法で支援してもらうための、あらゆる努力を重ねています。「マーケティング関係委員会」は、チケット販売や、ニューヨークだけでなく全米において「ブロードウェイ」のブランド認知度を高めるためのプログラムを開発しています。

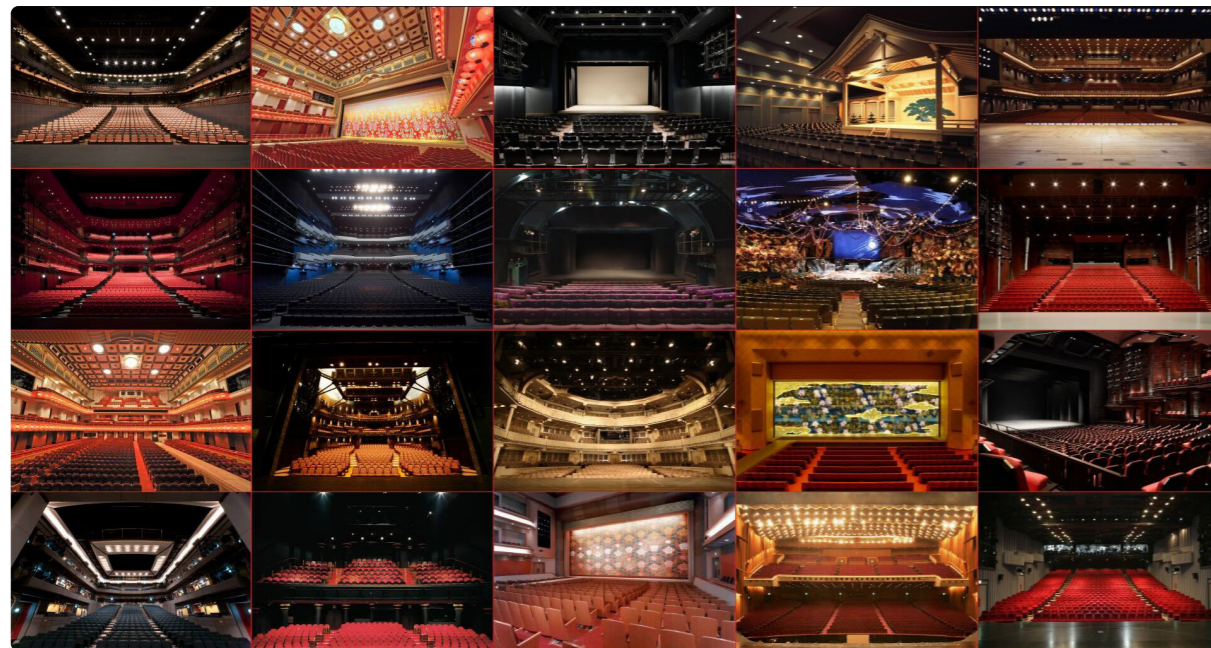
ほかに、新しい観客を増やすことに注力した委員会もあります。パンデミックで失った観客の中には、同じ観劇ペースでは戻ってこない人たちも少なくありません。それにリモートワークの影響で、市内で遅くまで仕事をしてから劇場やレストランに出かける人の数は、確実に減少しています。そこで私たちは、従来の客層を広げ、新しい観客を獲得

することに取り組み始めました。たとえば若い客層を獲得する作品や、黒人系、ラテン系、アジアおよび環太平洋系の客層に響く作品の開発に、プロデューサーたちは力を入れています。もちろん、以前からこうした観客層を想定してはいましたが、より積極的にアプローチするようになってきました。また、EDI (Equity = 公平性, Diversity = 多様性, Inclusion = 包摂性) への取り組みについても、コロナによる劇場閉鎖中に強化を行い、業界内で意識改革のための新しいプログラムを開始しました。以前から多くの取り組みはしていたのですが、ジョージ・フロイド氏の殺害を機にBLM (Black Lives Matter) 運動が高まった直後から、リーグ内に19のEDI関係の問題提起を主導する取り組みを立ち上げ、それぞれのイニシアティブに対して100%フォーカスできる専門家を、新たに雇用しました。このほかコロ

ナ禍においては、18か月の全劇場閉鎖中に、再開に重点を置いた44のタスクフォースを立ち上げました。再開とともにそのほとんどを終了させましたが、そこからまた新たなタスクフォースを立ち上げ、1トピックにつき6人~8人の専門家をつけて、問題解決に集中できるようにしています。この件については話し出すとキリがないのですが、最も重要なことは、解決したい重要な問題にはしっかり目を向け、その分野の専門家を集めて一緒に取り組んでもらう、ということだと思います。

吉田 まったくおっしゃる通りだと思います。ほんとうにブロードウェイ・リーグには、私たちが参考にしなければならぬことがたくさんあると思いましたし、同時に、やはり国情に合わせて異なることもあると気づきました。

JAPAN PERFORMING ARTS SOLIDARITY NETWORK



 Japan Performing Arts Solidarity Network
一般社団法人 緊急事態舞台芸術ネットワーク

緊急事態舞台芸術ネットワークとは

2020年2月26日に政府による突然の自粛要請を受けて以来、公演の中止延期が相次いだ舞台芸術界の損害の実態を把握するため損害額調査を実施。その結果を受けて、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) による危機的状況であるとの認識のもと緊急的に形成され、規模やジャンルを問わず多種多様な250団体が参加。政府提言、労働環境改善、ハラスメント対策、海外展開、チケットティング、調査研究など、政策部会と開催部会それに紐づく6のPTで業界横断的に取組み、舞台芸術の持続かつ発展的な未来を創造することをミッションにしている。

THE BROADWAY LEAGUE



 THE BROADWAY LEAGUE

ブロードウェイ・リーグとは

設立は1930年。ニューヨークのブロードウェイ関係者のみならず、北米250都市以上の劇場主やプロデューサー、舞台技術者、関連事業者ら約700人によって構成される業界団体。ロビー活動やユニオンとの交渉、チケットティング、観客育成、調査研究、興行収入ほか各統計データの提供、トニー賞 (アメリカン・シアター・ウイングとの共同運営) etc. と多数のタスクを担い、コロナ禍では44のタスクフォースを設けて未曾有の危機に対応。18か月間の全劇場閉鎖期間を乗り越えて、無事再開にこぎ着けた。

それぞれ国の現状を見据えながら、課題の抽出をしていくことが重要です。良い機会をいただいたので、シャーロットさんに質問したいのですが、ブロードウェイ・リーグの運営をされている方々にとって、日本の市場はどのように映っているのでしょうか。日本のパフォーマンス・アーツについて、みなさんはどんな印象をお持ちなのかを教えてください。

セントマーティン ブロードウェイ・リーグのメンバーで、日本の市場を理解しているプロデューサーはそう多くはないのですが、少なくとも「ブロードウェイ」に対する認識においては、日本はたいへん洗練されていて、「ブロードウェイ・ブランド」を、他とは異なる、アメリカ発の舞台作品の「豊かな土壌」ととらえてくださっているのを感じます。リーグ内の海外市場に詳しいプロデューサーたちは、日本は私たちの作品を上演するだけでなく、相互協力するための素晴らしい市場として、非常に高く評価しています。なおブロードウェイ・リーグには、国際部門の委員会もありまして、海外でも活動しているメンバーが、世界の市場においてブロードウェイへの理解度を高め、広めていく活動をしています。

吉田 たいへんうれしい評価ですね。最後に、業界団体の先輩、しかもたいへん長い歴史と伝統をお持ちの先輩として、日本にできたばかりの緊急事態舞台芸術ネットワークが、この後どうすればしっかりと機能してゆくことができるか、ご教示

いただけたらうれしいです。

セントマーティン 貴ネットワークが、現時点で私たちほどまで進展していないのは当然です。なにせ私たちには、100年近い歴史があるわけですからね。でも実は、私たちの組織が劇的な変化を遂げたのは、ここ18年ほどなんです。それが実現したのは、メンバーや、メンバーになってほしい人たちに、戦略的プランを策定して一緒に取り組んでもらうようになったことが大きいと思っています。私に取り組んでいる戦略プランは、3年先の目標を設定し、毎年更新するというもので、メンバーが望むすべてのことに目を向け、その目標を達成するためのイニシアティブを、メンバーやスタッフとともに形成しています。プランのすべてを達成できるわけではありませんが、全力で取り組んでいますし、うまくいかない場合は、別の方法を見つけます。いちばん大切なのは、まずメンバーの参加を得ること。次に、メンバーが何を望んでいるのかを理解すること。そして、それを達成するためにメンバーに協力してもらうこと。それに尽きると思います。

吉田 お話のすべてが、たいへん参考になりました。ありがとうございました。実は私も、このたびブロードウェイ・リーグのメンバーにさせていただきましたので、実際にいろいろ勉強させていただきたいと思っています。

セントマーティン ウェルカム！ お待ちしています。

[対談日:2024年1月25日 進行・文:伊達なつめ]

吉田智誉樹

CHIYOKI YOSHIDA

PROFILE 1964年、神奈川県横浜市生まれ。1987年に慶應義塾大学文学部を卒業後、劇団四季(四季株式会社)に入社。おもに広報営業関連セクションを担当し、東京、札幌、名古屋、大阪、福岡にて勤務。2002年3月に制作部広報・ネットグループ長に就任して以降、執行役員広報部長、取締役広報宣伝担当を経て、2014年より代表取締役社長に就任。緊急事態舞台芸術ネットワーク(JPASN)代表理事。

シャーロット・セントマーティン

CHARLOTTE ST. MARTIN

PROFILE 2006年ブロードウェイ・リーグの会長に就任(～2024年2月末)。以前は30年近くロウズ・ホテルにてオペレーション・マーケティング担当EVP、ロウズ・アナトール・ホテルの社長兼CEO等、様々な役職を歴任。最近ではCity & State誌のマンハッタンで最も政治に影響のある人リスト「Manhattan Power 100」に選出された他、Crain's Business New York Magazine誌の「2019 Hall of Fame」に選出。ブロードウェイやホスピタリティ関連の複数の非営利団体の理事の他、タイムズスクエア・アライアンスの執行委員も務めている。

INTERVIEW

阪急電鉄株式会社

株式会社博多座

株式会社パルコ

株式会社明治座

東宝株式会社

エイベックス・ライヴ・クリエイティヴ株式会社

劇団四季(四季株式会社)

株式会社シーエイティプロデュース

株式会社キョードーファクトリー

株式会社アミューズ

松竹株式会社

シス・カンパニー

株式会社御園座

株式会社梅田芸術劇場

株式会社新歌舞伎座

株式会社東急文化村

株式会社ネルケプランニング

株式会社ホリプロ

株式会社サンライズプロモーション大阪

株式会社キューブ

株式会社ヴィレッチ

株式会社こまつ座

(初日順)

INTERVIEW

阪急電鉄株式会社(宝塚歌劇)

2024年に創立110周年を迎える宝塚歌劇団。本拠地・宝塚市には宝塚大劇場と宝塚バウホール、都内に東京宝塚劇場を有し、全国ツアーを含む各公演では海外ミュージカルやオリジナル作品、レビュー・ショーなど華やかな舞台の上演で多くのファンに支えられている。入社当時はIT関連部門でシステム開発を行っていたという歌劇事業部・竹内淳宝塚総支配人に話を伺った。



- 対象公演
- 宝塚歌劇 星組公演『バレンシアの熱い花』『パッション・ダムール・アゲイン!』
2023年4月1日～2日 千葉県市川市 市川市文化会館／2023年4月8日～11日 福岡市中央区 福岡市民会館
 - 宝塚歌劇 花組公演『舞姫』
2023年5月3日～14日 兵庫県宝塚市 宝塚バウホール
 - 宝塚歌劇 花組公演『二人だけの戦場』
2023年5月13日～19日 東京都豊島区 東京建物 Brillia HALL (豊島区立芸術文化劇場)
 - 宝塚歌劇 月組公演『月の燈影(ほかげ)』
2023年6月14日～25日 兵庫県宝塚市 宝塚バウホール
 - 宝塚歌劇 宙組公演『大逆転裁判』
2023年8月1日～8日 神奈川県横浜市 KAAT 神奈川芸術劇場
 - 宝塚歌劇 雪組公演『愛するには短すぎる』『ジュエル・ド・パリ!!』
2023年8月31日～9月3日 神奈川県横浜市 神奈川県民ホール
 - 宝塚歌劇 星組公演『My Last Joke ー虚構に生きるー』
2023年10月18日～10月29日 兵庫県宝塚市 宝塚バウホール

異なる分野から舞台芸術業界へ

——竹内さんは入社当時、まったく違うお仕事をなさっていたそうですね。

当時、世の中にインターネットの存在が知られ始めた頃で、入社後は約10年間、ネットショッピングやホテル予約などの自社システムを開発する部署にいました。大学でIT関連分野を学んでいましたので、その配属になったのだと思います。そこから別部門や関連企業である梅田芸術劇場への異動、宝塚歌劇団プロデューサー職などを経て、2023年4月より今の役職に就いた次第です。

——異なる分野から舞台芸術関連の現場に就かれていかがでしたか？

20代の頃に新入社員研修の一環で宝塚歌劇を観劇しましたが、入社後も仕事として舞台芸術と向き合うまではほとんど演劇やミュージカルに触れることなく過ごしていました。システム開発の分野に加え、一時期は書店などの小売り関係の管理部門にいたこともありますので、たとえば予算の組み方や損益分岐の考え方など、小売りとエンターテインメントの世界では事業においても異なる点が多く、驚くことも多かったです。

5類移行で少しだけ気持ちが楽に

——4月から12月まで宝塚歌劇団の各対象公演が実施されましたが、5月にコロナの扱いが2類から5類に切り替わりました。それに伴う現場の変化など教えてください。現在、私は表方(おもてかた)として劇場でお客様をお迎えしてい

ますが、5月の時点ではご来場くださる方の多くがマスク着用でしたので、すぐにコロナの扱いが5類になったと感じることはありませんでした。出演者やスタッフに関しては、濃厚接触者の自宅待機や定期的なPCR検査がなくなったことは大きいと思います。また、自社の劇場ではコロナ5類移行後に、幕間の客席やホワイエでのお食事や大きな声での会話は控えさせていただくというお願いのもと解禁させていただきました。

——コロナが2類から5類に切り替わったことでのご自身の実感などもぜひ。

宝塚歌劇団の仕事をするようになったのが2020年4月からで、まさに緊急事態宣言により、日本中の劇場の幕が開けられない時期でした。公演再開後は仕事で出演者と接する機会も多かったため、万が一、自分から公演関係者に感染を拡げるようなことがあってはならないと、私生活でもかなり気を付けながら日々を送っておりました。例えば人混みには出ず、外食も同居の家族とだけで、友人知人との飲み会や、それまで好きで見えていたアーティストのコンサートに足を運ぶことも控えていた3年間でした。コロナが5類になり、少しだけ気持ちが楽になったように思います。

——舞台芸術と社会の関わりについて、お仕事のなかでどう意識なさっていますか？

現実世界とは少し異なる夢の世界をお届けすることで、お客様に日々を生きるエネルギーを受け取っていただければと思います。今の仕事をしております。舞台は虚構の世界でもありますが、生身の人間がステージ上で発するパワーは本物です。そのパワーを体感し、夢の世界で紡がれる時間と空間とをお楽しみいただけるよう、劇場でお客様をお迎えする側の人間として、ホスピタリティの面で出来る限り力を尽くしたいと思っています。

デジタル技術の進歩を生かす

——舞台芸術業界が横の繋がりを持つことの利点などお感じになっていますか？

コロナ禍に緊急事態舞台芸術ネットワークが立ち上がり、策定されたガイドラインを基準に公演が実施できるようになった時は非常に心強かったです。ただ、宝塚歌劇の場合、銀橋や舞台に掛かった階段を使用する演出も多いため、ガイドラインに沿って出演者の立ち位置と客席との距離が2メートルを超えないよう意識しながら作品を立ち上げていくのはなかなか大変でもありました。しかし、コロナ禍での公演実施において、自社だけで判断しなくて良い横の繋がりが出来た状況はとてもありがたいですし、大きな安心感を得られたと思います。

——コロナ禍により舞台のオンライン配信が非常に増えました。宝塚歌劇は以前より映画館で生配信をご覧いただくライブビューイングを実施していましたが、ご自宅で視聴可能な舞台のオンライン配信についてはコロナ禍にスタートさせました。舞台映像のストックやある程度のノウハウもありますので、一から配信を始めたというよりは、持っている技術をカスタマイズしてお届けするモードだったと思います。また、大きなホールでのコンサート

を8Kカメラで撮影し、お手持ちのスマートフォンを操作して自由に映像を寄りや引きでご覧いただいたり、カメラのスイッチングができるタイプの配信や、国内だけでなく全世界に向けてのオンライン配信などもトライアルとしておこなっています。

——AIなど、デジタル技術の進歩が舞台芸術にもたらす展望などお聞かせください。

自分がIT関連の勉強をしていた30年前と今とは想像もできなかったレベルでデジタル技術が進歩しています。ということは、30年後には舞台芸術も今と異なる形でご覧いただくことになるかもしれません。たとえば、本やCDがデータに移行してきたように、実際に劇場に行かなくても、まるで目の前に俳優がいるような演劇体験ができる日が来る可能性もあるわけです。もちろん、紀元前からある演劇や劇場文化が完全に廃れることはないと思いますが、時代や世代の移り変わりをキャッチアップし、AIなどデジタル技術を含めた最新のテクノロジーも取り入れていくことが、舞台芸術を事業として捉える上で、必要なことだと感じています。



歌劇事業部 宝塚総支配人 竹内 淳 ATSUSHI TAKEUCHI

1992年阪急電鉄株式会社に入社。入社から約10年間はシステム開発やインターネットビジネス等のIT関連業務を担当。その後、約10年間、駅ナカ店舗等を統括する部門で経営計画やIT関連の業務、書店事業の管理部門での業務に従事。2014年4月宝塚歌劇100周年のタイミングで宝塚歌劇団に異動、その後、梅田芸術劇場、宝塚歌劇団でのプロデューサー業務に従事した後、2023年4月から現職。写真は宝塚歌劇110周年のポスタービジュアル。100周年後の公演ポスターを並べたものですが、自身が宝塚歌劇に関わるようになった期間そのもので時の流れを感じます。

[取材日:2023年11月27日 取材・文:上村由紀子]

株 式 会 社 博 多 座

経済界・興行界・行政が一体となり演劇公演をおこなう日本初の企業・株式会社博多座。

1999年のこけら落とし以来、客席数約1500席の劇場では歌舞伎、ミュージカル、ストレートプレイなど多彩な作品が上演され、九州地方における文化芸術活動を牽引してきた。

博多座・演劇部の西中治朗氏に昨年に引き続きご登場いただき、演劇制作や広報戦略、各地の劇場との連携について伺った。



© 原泰久/集英社 写真提供/東宝演劇部

対象公演

舞台『キングダム』

2023年4月2日～27日 福岡市博多区 博多座

若年層の観客に向けた作戦

——対象公演の舞台『キングダム』はコロナが2類に分類されていた4月に上演されました。その後、コロナの扱いは5類になりましたが、現場での変化などいかがでしたか？

コロナの扱いが5類になっても、7月公演の『泣いたらあかん』の千鶴楽壇までは、現場も2類の時に近いレベルで感染症対策を行っていたと思います。博多座の公演においては、8月以降、少しずつその空気が緩和されたとの印象です。また、5類移行後の5月からはPCRなどのコロナ陽性検査費用が高額負担になったため、発熱等の症状が出た方にはまず抗原検査を受けてもらい、そこで陽性の判定が出た場合に病院で精密な検査を受けていただく方向にシフトしました。

——舞台『キングダム』は若手の出演者が多く、大掛かりな立ち回りやアクションシーンなども多数ある作品でした。

それまでのツアー公演に準じ、博多座でも出演者の身体のケアをするトレーナーの方に常駐していただきました。2月に開幕した帝国劇場で本作を観劇した際に、舞台と客席の距離が

近い博多座にぴったりで、パルクール等の特殊なアクションも生かされると興奮したのを覚えています。大変人気のある原作で映画も大ヒット、キャストの皆さんも若い方が多く、当地の公演では若年層のお客様にも多数ご来場いただきました。

——若い観客が多い状況をご覧になり、その世代にリーチする作戦をとられたそうですね。

原作者の原泰久先生が福岡で執筆なさっていることもあり、当初は地元をあげて応援するモード、さらに観劇にはなじみが薄いものの、原作ファンである男性にもご来場いただけるような広報戦略を想定していました。ですが、東京公演で若い女性客の多さを目の当たりにし、博多に戻ってすぐに宣伝担当と作戦変更の策を練った次第です。その宣伝の具体的な例がお客様のSNS拡散を狙った「アクスタ作戦」でした。アクリルスタンド(アクスタ)を手にしたお客様が劇場の正面で普通に撮影をなさると、小さなアクスタにピントが合い、劇場の看板やポスターなどがぼやけてしまいます。そこで、博多座正面を映した小型の写真パネルを作成し、場内に数カ所掲示しました。このパネルの前でアクスタを持ち撮影すると、

博多座の写真もアクスタも双方ぼやけずにSNS投稿用の写真撮影が可能になりますので、お客様からは大変好評をいただきましたし、SNSでの情報拡散にも大きな効果があったと思います。

——博多座が発信するSNSは全国の演劇ファンの間でもよく話題になる印象です。

そこは担当者がある程度意識していると思います(笑)。本年度の他アイデアでいえば『最高のオバハン 中島ハルコ』上演時に、作品のキャラクターに合わせ「大地真央さん演じる中島ハルコに見下される3mの巨大パネル」を設置しました。こちらSNSへの投稿などが大変多かったです。

市民に愛される劇場を目指す

——舞台芸術と社会との関わりについて、お仕事のなかでどんなことを意識なさっていますか？

博多座は福岡市が文化芸術の振興を目的に作った劇場ということもあり、市民の皆様にごだけ楽しんでいただけるか、常に意識するようにしています。そのためにはまず劇場にご来場いただき、生の舞台を楽しんでいただくことが大切ですから、なるべく多くの方に作品の情報等をお届けできるよう、日々の広報・宣伝を含め試行錯誤を続けています。市民の皆様「福岡にとって博多座は財産」と思っていたらよい今後とも努力していきます。

——舞台芸術業界の横の繋がりについてどうお考えでしょう。

コロナという未曾有の危機に襲われるなか、緊急事態舞台芸術ネットワークができたことで、様々な局面で情報共有を行うことも可能になり、非常に助けられたと感じています。

もし、こういった団体が立ち上がらなかったら、業界が一枚岩となって国や政府に声を届けることもできず、事業の継続が不可能になる会社や団体もあったのではないのでしょうか。日々の業務でいえば、例えば東宝製作の作品を各地方の劇場で上演する場合、舞台装置や衣裳等を積んだトラックが地方公演終了後に毎回東京に戻らなくてもすむよう、公演先である梅田芸術劇場や御園座などと連携を取り、公演期間の打ち合わせを密に行うようにもしています。これは新たな法律が施行され、トラックでの物流環境が厳しくなる2024年に向けての対策にもなっていると思います。業界に地域を越えた横の繋がりが生まれたことで、気軽に他地方の劇場と相談ができるようになったり、励まし合う絆が生まれたことはとてもありがたいです。

東日本大震災とコロナ禍

——西中さんの心に残る舞台について教えてください。

舞台に関わる者としては2011年の『桜壽博多座大歌舞伎』のことが強く心に残っています。初日は3月2日で、公演期間中に3月11日の東日本大震災が起きました。博多は地震や津波の被害を受けることはありませんでしたが、日本の多くの地域が大変なことになっているなか、本当に舞台を続けていものか関係者一同、非常に悩みました。結果、「今、自分たちにやれるのは幕を開けてお客様に元気をお届けすること」という出演者やスタッフの思いが強く、公演は続行されました。この時の「本当に演劇は不要不急であるのか、それとも人生に必要なものなのか」という世の中の空気は、コロナ禍でのそれと非常に近いものだったと思います。今、私は「ライブエンターテインメントは人間にとって必要だ」との思いを持ってこの仕事に携わっています。



演劇部長 西中治朗
JIRO NISHINAKA

2003年株式会社博多座入社。前職の人材派遣・イベント運営会社で博多座の案内係、チケット係の管理、運営業務を請け負い、劇場の開場に携わる。博多座入社後は、場内サービス、チケット管理、会員担当、宣伝、舞台管理、制作の部署を経て現在演劇部長。

[取材日:2023年11月21日 取材・文:上村由紀子]

株式会社パルコ

2023年に開場50周年を迎えたPARCO劇場ほか、全国の劇場でプロデュース公演を上演している株式会社パルコ。国内外の様々な劇作家、演出家、俳優陣とタッグを組んで多彩な作品を世に送り続けている。パルコの演劇事業において30年以上舞台制作の現場で活躍する祖父江友秀ゼネラルプロデューサーに対象公演『橋からの眺め』や今も心に残る言葉についてお話を伺った。



『橋からの眺め』 撮影:御堂義乗

対象公演

- 『笑の大学』
2023年4月20日～21日 沖縄県那覇市 那覇文化芸術劇場なは一と 大劇場
- 『新ハムレット～太宰治、シェイクスピアを乗っ取る!?～』
2023年7月6日 福岡県久留米市 久留米シティプラザ ザ・グランドホール
- 『東京ゲゲゲイ歌劇団 vol.VI』
2023年8月13日 青森県青森市 リンクモア平安閣市民ホール(青森市民ホール)
- 『桜の園』
2023年9月6日 広島県広島市 上野学園ホール/2023年9月20日 高知県高知市 高知県立県民文化ホール オレンジホール
- 『橋からの眺め』
2023年10月1日 福岡県北九州市 J:COM北九州芸術劇場 大ホール/2023年10月4日 広島市中区 JMSアステールプラザ 大ホール
- 『海をゆく者』
2024年1月17日 岡山県岡山市北区 岡山芸術創造劇場ハレノワ 中劇場
2024年1月24日 広島市中区 JMSアステールプラザ 大ホール

心に残る美輪明宏さんの言葉

——舞台制作のお仕事の中での忘れられない出会いについて教えてください。

たくさんあるのですが、『毛皮のマリー』(1994年)で初めて一緒にさせていただいた美輪明宏さんとの仕事は舞台制作者として非常に大きな経験でした。美輪さんの稽古場での真剣勝負ともいえる居方に強い感銘を受けましたし、「劇場は異空間であるべき」とのお言葉は自分が舞台芸術に関わっていく上でのひとつの指針となっています。

——ご担当の対象作品『橋からの眺め』は1950年代にアメリカで初演されていますが、“父権”や“男性性”など今の日本の社会にも通ずる内容だと感じました。

男性として生きることの難しさや、そこに起因する権力の暴走なども物語に織り込まれており、多くのお客様から「共感した」

とのご感想をいただきました。海外ではこの“男性性”について以前から語られていますが、日本では最近やっと意識され始めたテーマのように感じます。ただ、今回の上演では衣装なども含め、古い時代性をことさら前面に押し出すのではなく、2023年の今観てもフィットする普遍的な物語としてご覧いただけるような演出で上演しました。悪意を持った人物は劇中にひとりも出てこないのに、結果的に全員が悲劇に向かってしまうという展開も非常に今日の^{こんにち}だったと思っています。

——5月にコロナの扱いが2類から5類に移行しました。稽古場での変化などがございましたか？

コロナが2類だった時は稽古場に入る皆さんに不織布マスク着用をお願いし、現場で定期的なPCR検査もおこなっていましたが、5類移行後、マスクの着用は出演者、スタッフともに個々の判断にお任せする形をとりました。また、抗原検査キットを常備し、不安がある方にはそちらをお渡しできるように

もしておりました。『橋からの眺め』は東京公演を皮切りに各地方公演がありましたが、全公演完走でき、本当に良かったと思っています。

ライブ体験は人が生きる糧

——舞台芸術と社会との関わりについてどんなお考えをお持ちでしょう。

コロナ禍という前代未聞の危機の中で、エンターテインメントは不要不急ではないのだとあらためて実感しています。制作側にいる私が語ると少しおこがましい表現にもなっていますが、目の前で人間が放つエネルギーに直接触れ、パワーを受け取れるライブ体験は人が生きていく上での小さな幸せであり、ひとつの糧です。また、演劇は大変な変化が起きているこの時代、社会に対してメッセージを送ることもできる表現なのだと信じ、舞台制作の現場に立っております。

——舞台芸術業界が横の繋がりを持つことについての利点や今後のご要望などあれば教えてください。

私は緊急事態舞台芸術ネットワークの会合に直接出席したことはまだないのですが、コロナ禍のような不測の事態が起きた時に、横の繋がりを活かして諸問題に対応できたのは非常にありがたかったです。たとえば、稽古中や公演実施の際のガイドラインが作成されたおかげで、現場での感染症対策において何が必要でどう用意すればいいのか具体的にイメージすることもできました。これまで大きな組織として横の繋がりを活用する機会があまり多くなかった演劇界ですが、こういう形で様々な団体が情報共有できるようになったのはとても良いことだと感じますし、それぞれの主催会社や劇団、制作会社などが持つ個性が尊重され、多様性が大事にされるなかで今後も緊急事態舞台芸術ネットワークが運営されていけば素晴らしいと思っています。

デジタル技術と演劇の化学反応



エンタテインメント事業部 演劇事業担当
制作チーム ゼネラルプロデューサー
祖父江友秀 TOMOHIDE SOBUE

1965年、愛知県出身。早稲田大学第一文学部文芸専修卒。在学中、演劇集団「てあとろ50'」に所属。1989年、株式会社パルコ入社。約2年間、広告部・宣伝部に所属。1991年劇場部(現・演劇事業担当)に転属。以後、PARCO劇場の企画・制作を中心に、他会場でのパルコ企画・製作公演もプロデュース。演劇事業担当制作チーム課長・業務部長、および運営チーム業務部長を経て、2022年よりゼネラルプロデューサー。

[取材日:2023年11月20日 取材・文:上村由紀子]

株 式 会 社 明 治 座

2023年に創業150周年を迎えた明治座は、約1,300席の劇場にて歌手による座長公演を中心に

歌舞伎、時代劇、歌謡ショー、ミュージカルなど様々な作品を上演。

食堂やお土産なども人気が高く、昔ながらのハレの場としての楽しみが詰まっている。

明治座で数多くの公演を制作してきた高木潤プロデューサーに、本年度の感触などについて伺った。



撮影:taro

対象公演

梅沢富美男劇団 梅沢富美男・研ナオコ特別公演 三山ひろし特別出演

2023年6月23日～7月23日 東京都中央区 明治座

「食えない男」の真意を考える

——高木さんの演劇人生に影響を与えた舞台は何ですか？

明治座に入社してすぐに携わった、蛭川幸雄さん演出の『近松心中物語』（1996年）です。明治座での初演で、私は2ヶ月間、客席に降り積もった紙吹雪の掃除をしていました。完全暗転の中、雪が降り出す。観客がざわつき、主役の忠兵衛と梅川が歩いてくる……という演出が大好きで、雪が降り出す直前に3階席に飛び込んで、何度もそのシーンを観ました。「劇場という空間でこんなことが起こるのか」と感動しましたし、あの光景が私にとっての一つのベンチマークとなっています。あの感動があるから、ここまで舞台の制作を続けてこられた気がします。

——舞台の仕事をするうえで転機となった出会いは？

心に残るのは、なかにし先生との出会いです。先生とは、石川さゆりさん特別公演『長崎ぶらぶら節』（2006年、2010年）や『貞奴世界を翔る』（2012年）といった作品でご一緒してきました。作家としても作詞家としても素晴らしい才能をお持ち

ちだったので、先生が0から1を生み出す瞬間を近くで見ることができたのは貴重な経験でしたね。

ある時、先生から「高木くん、君は食えない男だね」と言われたことがありました。当初は意味がよく分からなかったのですが、経験を積むことで段々とその言葉の真意を理解してきました。つまり、お客様はお金を払って舞台を観にきているので、我々は舞台の中でしっかりお金をかけるべきところを作らないといけません。目指すところが非常に高い先生の世界観を実現させたいと思っているのですが、やはり予算という制約がある以上、できることとできないことが出てきてしまう。そのバランスをどう取るかが、プロデューサーの腕の見せ所。そうなかにし先生は伝えてくださったのかな、少しはプロデューサーとしての自分を認めてくださったのかなと解釈しつつ、自分自身はどうあるべきか、「食えない男」だけでいいのかということも考えさせられます。

緊張感や警戒感は今なお続く

——対象公演について、観客の反応や実施した感染予防対策

などを教えてください。

『梅沢富美男劇団 梅沢富美男・研ナオコ特別公演 三山ひろし特別出演』は明るい内容でお客様からの反応も絶えないような公演でしたし、団体のお客様も復調したこともあり、コロナ禍以前の活気が本格的に戻ってきたと感じました。舞台上と客席とのコミュニケーションが感じづらかった数年間から本来の明治座の空間としての有り様が戻ってきたことが何より嬉しかったですね。

感染対策としては、新型コロナウイルスの感染法上の分類が5類になって以降も、弊社は楽屋の入場制限のほか、楽屋でも劇場でもマスクの着用を「推奨」しています。依然コロナに感染するリスクも公演中止のリスクもあるわけですから、緊張感や警戒感は引き続きあります。

デジタル化は止められない

——横の繋がりを持つことについて期待することはありますか？

警視庁、日本演劇興行協会、東宝、松竹、そして我々明治座がチケットの不正転売防止に関する協定を締結しました。個社での対応ではなく、業界としてまとめて社会に問題をアピールする場を持たせたこと、そして具体的に行動に移していこうと決めたことは意義あることでしょう。

弊社も含め、これまで日本の演劇界は、チケットのシステムにしても制作環境にしても、ガラバガスと言いますか、スタンドアロンな状況でした。しかし、小劇場を主戦場としてきた40～50代のスタッフが商業演劇で手腕を発揮するなど、演劇界のボーダーレス化が進んできていると感じます。私自身は会社員としてそれほど先がない世代ですが、今後横の繋がりが強化されて、特に若い世代が働きやすい環境が整うといいですね。

——AIやNFTなど、新しいデジタル技術が舞台芸術にどのような影響をもたらすと思われますか？

明治座はあまり組織が大きいので、機動力が強みです。例えば、2017年に『SAKURA-JAPAN IN THE BOX-』という多言語字幕解説やAR演出を取り入れた公演を実施したことがありました。少し時代を先取りしすぎたのか、技術的にも興行的にもベストとは言えませんが、新しい技術を取り入れようとする気概は感じていただけたと思います。そのほか、teamLab★とのコラボレーションで、デジタルで描かれた緞帳を2019年に取り入れるなど、積極的にデジタル技術の導入をしています。

編集ができる人材不足やエコの観点も相まって、公演プログラムは紙からデジタルになっていくでしょう。チケット販売に関しても、明治座としては電話予約が主流となっていますが、AIやNFTといった技術を応用しようという動きも出てくるかもしれません。演劇にまつわる全てをデジタル化するのは難しいかもしれませんが、デジタル化へシフトする流れは止められないと思います。

——これから舞台芸術業界を担っていく方への思いを聞かせてください。

「奥役十訓」という、江戸時代の興行師、いわばプロデューサーたちの掟があります。その掟が言わんとしていることを私なりに解釈すると、演劇は人と人が集まってつくるものなので、どうしても意見や感情の対立が起こりますよね。それを仲裁して解決する人間が絶対に必要で、それがプロデューサーなんです。デジタルがどんなに進もうと人間の心というものに向き合う以上、プロデューサーの重要性や必要性は変わらない。全員が同じ方向に突き進むのが難しいからこそ、それができた時の感動は大きいはずですから、どうぞ頑張ってください。



興行事業本部 興行2部 副部長 高木潤

JUN TAKAGI

1972年生まれ。1996年4月株式会社明治座入社後、営業部配属。1997年6月より制作部に移動。制作業務のほか、稽古場（明治座森下スタジオ）のオープンに係る。2023年9月より興行事業本部興行2部所属。主な担当作品は「川中美幸特別公演」「石川さゆり特別公演」「コント55号公演」、「大奥」『大奥第一章』、舞台『サザエさん』、る・ひまわり共催公演など。

[取材日:2023年11月6日 取材・文:五月女菜穂]

東宝株式会社

東宝株式会社は海外ミュージカル、せりふ劇、オリジナルミュージカルといった多ジャンルの舞台作品を数多く手がけ、幅広い層の観客から多大な支持を得ている。5月に新型コロナウイルス感染症が5類に移行した後も、一部公演中止などを経て舞台の幕を開け続けた。日本版初演となるミュージカル『ラグタイム』は全公演を完走。本作品を担当した小嶋麻倫子プロデューサーにお話を伺った。



『ラ・マンチャの男』

『ラグタイム』

『天使にラブソングを〜シスター・アクト〜』 写真提供:東宝演劇部

対象公演 『ラ・マンチャの男』 2023年4月14日～24日 神奈川県横須賀市 よこすか芸術劇場
『ラグタイム』 2023年9月9日～30日 東京都千代田区 日生劇場
『天使にラブソングを〜シスター・アクト〜』 2023年11月5日～29日 東京都渋谷区 東急シアターオーブ

『RENT』の熱は今も胸に

—小嶋さんのお仕事について教えてください。

1998年から2005年までニューヨークにおりまして、帰国後は東宝に入社し1年間の演出部勤務を経たのちにプロデューサー職に就きました。現在はおもに帝国劇場やシアタークリエなどで上演する舞台作品のプロデュースをしています。

—ご自身の人生を大きく変えた作品ってなんでしょう？

アメリカ在住時に観た『RENT』に大変感動し衝撃を受けました。東宝入社後、この作品を自社の製作で上演することを知り、東宝のような商業的な会社が『RENT』を上演するなんて許せないと思い、まだプロデューサー職について仕事の流れや現場での立ち位置などすべてを把握しきれていないのに、絶対に自分がやるべきだと社内で手を挙げたことを覚えています。

—小嶋さんが入社なさった当時、演劇部で女性のプロデューサーは珍しかったそうですね。

私が入社した頃の東宝演劇部は男性社員の数が圧倒的に多く、

特に女性が帝劇公演のプロデュースをやるなんて無理、という空気がありました。今はガラッと状況も変わり、部署によっては女性の数の方が多いくらいです。

ミュージカルと社会のかかわり

—ミュージカル『ラグタイム』は今回が日本初演でした。観客の反応などお聞かせいただけますか？

『ラグタイム』は20世紀初頭のアメリカを描いた作品で、白人、黒人、ユダヤ系移民と3つそれぞれにルーツを持つ人々の物語が展開します。私自身がこの作品を今の日本で上演することに対して変な気負いがなかったため、お客様から「異なる人種の表現など非常にわかりやすい演出だった」「今の日本で上演する意味がある」とのお言葉をいただき、あらためてこの公演がある種の挑戦だったのだと教えられました。

—『ラグタイム』はコロナの扱いが2類から5類に移行した後の上演でしたが、稽古場での感染症対策などいかがでしたか？

5類に移行したことでコロナが消えたわけではないけれど、極

度に意識することはやめようという共通認識がカンパニー内にあったと思いますし、定期的なPCR検査や、それまで毎日必ず行っていた体温の報告なども特にお願いしませんでした。もちろん、発熱等の体調不良があった場合は無理して稽古に参加するのではなく、病院に行き適切な治療を受けて療養するということが、代役や振付助手の方のサポートもあり、東京公演と各地の公演、ともに完走できて本当に良かったです。

—舞台芸術と社会の関わりについてどうお考えでしょう。

ミュージカルは社会的なメッセージの発信や、人間がいかに生きるべきかといったテーマを表現することに非常に長けた分野だと思っています。『ラグタイム』でも人種間の分断や差別が描かれており、ブラックフェイス問題などがある中、異なる人種を日本版のキャストでどう表すのか、作品の著作権元とも繊細なディスカッションを重ね、出演者が意図的に肌の色を変えるようなことは絶対にしないという条件のもとでの上演となりました。確かにミュージカルも娯楽のひとつではあるのですが、社会に対し何を投げかけたいのかということを製作者としてつねに明確にしながら舞台を創っていきたくて。

デジタル技術とスタッフワーク

—業界の横の繋がり・ネットワークを持つことについてどう思われますか？

アメリカから帰国して東宝に入社した当時、日本の舞台芸術業界の横の繋がり希薄さに驚き、何年か悶々としていたのですが(笑)、日々の仕事に向き合う中でいつの間にかその悶々とした気持ちも薄まってきました。ですがコロナ禍をきっかけに他社とさまざまな情報共有ができたことは心強かったですし、今後もそういったご縁を活かしていければと思います。

—同業他社や他団体と将来的にどんな協働ができればいいとお考えでしょう。

たとえばアメリカですと会社や団体の垣根を飛び越えて募金活動を行ったり、健康保険組合を立ち上げたりといったこともありますし、ブロードウェイを盛り上げようと劇場の枠を超えてコンサートが催されたりもします。日本でも主催企業の垣根にとられないコンサートやイベントに加え、舞台芸術業界で働く人が幸せになれるようなシステム構築のアピールなど、横の繋がりを活かしてやれたらいいですね。

—コロナ禍を機に舞台作品の配信が増えました。

オンラインでの配信は劇場へのご来場が難しい方にも作品を観ていただけるという点で、観劇の入り口としてとても良いと思います。ただやはり長時間集中して物語を追うような作品ですと、劇場に実際にいらしていただくのと同じ集中力で見ていただくのは難しいですし、海外で製作されたものは権利の関係等で多くの制約があります。そういった意味で、配信に向いている作品とそうでないものがより明確になってきている気がします。東宝でいえば『SPY x FAMILY』や『千と千尋の神隠し』は原作が多くの方に馴染みがあり、観劇の入り口として幅広いお客様に見ていただけたと思います。

—AIやNFTなどデジタル技術の進歩が舞台芸術にどんな影響をもたらすとお考えでしょう。

NFTに関してはチケット高額転売への対策としても活用できる技術ですので、今後の普及に期待しています。また、デジタル技術全体が舞台の裏側、スタッフワークとの融合により、作業の効率化に繋がるのは素晴らしいことです。

—舞台芸術業界で働くことを目指す人へのメッセージやエールをお願いします。

この世界が好きで働きたいと思ってくださる方は大歓迎です。むしろ、そういう人材をお迎えする私たちの方が、来てくださった方が長く働けるような環境の整備を意識的に行う必要があると実感しています。もし、興味がありましたらぜひ門を叩いてみていただきたいです。



エンタテインメントユニット 演劇本部 演劇部
企画製作グループ プロデューサー室 チーフプロデューサー 小嶋麻倫子
MARIKO KOJIMA

東宝株式会社演劇部チーフプロデューサー。国際基督教大学、コロンビア大学大学院演劇科卒業。『RENT』を100回観劇し、聖地New York Theater Workshopで働く。ブロードウェイやオフ・ブロードウェイでドラマタッグとして活動後、東宝に就職。『ガイズ&ドールズ』『ムーラン・ルージュ！ザ・ミュージカル』『Piaf』等を手掛ける。ミュージカルを通してより良い世界を創るべく2019年にMarimelo株式会社を設立。教育と社会貢献に邁進中。https://www.marimelo.co.jp/

[取材日:2023年10月24日 取材・文:上村由紀子]

インタビュー

エイベックス・ライブ・クリエイティブ株式会社

2008年にエイベックスグループ内に本格的なシアター事業が立ち上がって以降、数々の舞台作品を手掛けてきた。近年はコロナ禍でライブ公演には制限があったが、2023年に子どもも楽しめるミュージカルとして全国で上演された『DADDY』は、公式サイトに振付講座の動画を公開したりと、様々な形でエンターテインメントを楽しめる試みがされている。『DADDY』の三浦沙奈弓プロデューサーに、今、舞台に関わる思いを伺った。



『DADDY』 ©エイベックス・ライブ・クリエイティブ

ミュージカル『DADDY』
2023年4月19日 石川県金沢市 本多の森ホール
2023年4月29日 宮城県仙台市 電力ホール

対象公演

タクフェス第11弾『晚餐』
2023年10月14日 宮城県仙台市 電力ホール

演劇の原体験、海外で得た学び

——舞台芸術業界を志した経緯をお聞かせください。

幼少期から母に連れられて劇場に行くことも多く、舞台芸術を身近に感じる環境で育ちました。漠然ながらも進路を意識したのは中学生の頃。シアターコクーンで観た蜷川幸雄さん演出の『真情あふるる軽薄さ2001』(作:清水邦夫)がきっかけでした。ラストに舞台奥の扉が開き、フィクションの世界に現実の渋谷の街が現れた瞬間の鮮烈な感動は今でもよく覚えています。冷たい外の風を受けながら、舞台と現実の社会が繋がっていることを感じて「私もこの世界で走り回ってみたい」と意識するようになりました。

学生時代は美術の勉強もしていたのですが、演劇を学ぶために留学。イギリスの王立演劇学校で小道具に始まり、音響、照明など一通りのセクションで実践を積み、最終的にステージマネージメントを学んだことが今の仕事に就くターニングポイントになりました。その後も仕事で韓国の作品やラスベガスのサーカスカンパニーの作品を招聘したり、ルーマニアの

演劇祭に行ったり、多くの海外演劇に触れました。「国が違って通じる何か」が演劇にはある。そんな言語を越えた力に触れられたことは貴重な経験でした。

新たに見えてきた課題と希望

——コロナ禍を通して舞台芸術の状況には数々の変化がありました。5類になるにあたって、現場で感じていることは？

『DADDY』は5類に移行する前の上演だったので、完走できたことに胸を撫で下ろすような気持ちでした。その後の公演では「マスク着用推奨」という形は取っていたのですが、小さなお子様をはじめ、以前より所要所でお客様の顔が見られることも増え、表情からいただくもの大きさを改めて実感しました。2020年に上演予定だった『ファッション・フリーク・ショー』というヨーロッパからの招聘公演を3年越しに開幕できた喜びも大きかったです。一時の緊迫した状況に比べると、客席からも解放的で楽しいムードが伝わってきました。カンパニーの方は「日本の観客は静か」という印象をお持ちでした

が、それを覆すようなエネルギーな反応で……(笑)。お客様が入って初めてエンターテインメントは完成する。最近はその現場でもそんな喜びを再確認しています。一方でコロナ禍で守られてきたルールやガイダンスをどう捉えるか。その向き合い方においては課題もあると考えています。

——業界全体における横の繋がりを感ずるのはどんな時ですか？

以前はそれぞれのカンパニーが単一で考えていたことが、業界全体で共有されるようになったことは大きな変化だと思います。全てが一度止まったことで、エンタメ産業を根本から見直す契機にもなりました。同じ方向を向いて、同じ情報をシェアして舞台を創出すること。そんな繋がりが動きができたことは今後においても強みになっていくのではないのでしょうか。昨年度のこの冊子(「みらいジャーナル」2022年度版)も読ませていただいたのですが、様々なカンパニーさんの取り組みや思いを知ることができ、とても勉強になりました。そう思うと、長く厳しい時間も悪いことではなかった。横の繋がりが生まれたことで「日本のエンタメ産業をどうしていきたいか」という展望も今まで以上に明確に持てる気がしています。業界にとって心強い変化を今後も活かしていけたらと願っています。

未来に繋がる創客を目指して

——オンライン配信などのデジタル技術によって舞台の届け方や集客にも変化がありました。そういった技術の導入についてはどのように感じていますか？

客席が千鳥配置になり、50%のキャパシティで興行を打つ事態となった時は非常に厳しい局面を迎えたと感じました。そんな状況下で配信という道が拓けたことは業界全体にとっ

て意義深く、前進と呼べる変化だったと思います。例えば『ナショナル・シアター・ライブ(NTLive)』は海を越えて演劇を届けるツールであり、貴重な記録でもあり、そこには大きなマーケットが存在していると感じます。演劇は「劇場で観て終わり」ではなく、その先にも命がある。そういった意味でも配信はお客様が舞台と繋がる新たな選択肢なので、劇場を飛び越えるツールとして今後も活用できたら……。

一方で、劇場に足を運んで下さるお客様のマーケットを動かし続ける努力も必要。公演中止などの不安定な時期が続いたことでお客様の心理状態としてもチケットを取る選択がしづらい現状もあります。ライブの動員回復とデジタル活用の両輪でいかにエンタメ産業を拡張していけるか。それは、今、業界全体が共通して直面している課題であり、乗り越えなくてはならない試練でもあります。

——今後の舞台芸術業界全体にはどんな期待や展望をお持ちですか？

『DADDY』は「お子様が制限なく観られる公演に」という思いから、「0歳から入れるファミリーミュージカル」として全国を回りました。結果的に全観客の3割にのぼる子どもたちが来場してくれて、素直な歓声や反応の数々に「この声を未来にも繋げていきたい」と強く思いました。劇中歌の『にじ』には「きっと明日はいい天気」という詞が何度も出てくるのですが、その度私も励まされるような気持ちでした……。興行としては新たな挑戦でもあり、お子様を迎えるにあたって必要なことを一つひとつ学ぶ日々でした。これから生きる子どもたちに演劇を観てもらうことは、舞台芸術の未来における光。少子化によってその牌が小さくなっていく予想もされますが、だからこそ長い目で見て、一人でも多くの子どもが演劇に触れる機会を作っていきたいです。「きっと明日はいい天気」と希望を信じるような思いです。



制作事業本部 シアター制作グループ
第2プロデュースユニット マネージャー 三浦沙奈弓

SANAE MIURA

英国王立演劇学校卒業後、ナショナルシアター、セルマホルトLtd.で研鑽を経て帰国。さいたま芸術劇場でゴールドシアター、ダンス公演の制作に携わる。2009年エイベックス・ライブ・クリエイティブ(株)制作事業本部に着任。『不機嫌な女神たちプラス1』『パークビューライフ』『二次会のひとたち』(作 岡田恵和・演出 田村孝裕)『オリエント急行殺人事件』ミュージカル『DADDY』(演出 河原雅彦)『欲望という名の電車』(演出 鄭義信)等をプロデュース。『Jean Paul GAULTIER's FASHION FREAK SHOW』ではインターナショナルプロデューサーとして世界ツアーをブッキング中。

[取材日:2023年11月20日 取材・文:丘田ミイ子]

INTERVIEW

劇団四季(四季株式会社)

2023年7月14日に創立70周年を迎えた劇団四季。複数の専用劇場に加え全国の劇場にてストレートプレイ、オリジナルミュージカル、海外ミュージカル、ファミリーミュージカルなど多彩なレパートリーを上演し、幅広い世代から支持を得ている。また公共的活動として大型招待事業「こころの劇場」も実施。現場の指揮を執る安藤義宣専務取締役は舞台芸術に携わる思いを伺った。



『キャッツ』撮影:堀 勝志古



『オペラ座の怪人』撮影:野田正明

対象公演

『ライオンキング』東京公演

2023年5月1日～31日 東京都江東区 有明四季劇場

『美女と野獣』舞浜公演

2023年6月1日～30日 千葉県浦安市 舞浜アンフィシアター

『オペラ座の怪人』大阪公演

2023年7月1日～30日 大阪市北区 大阪四季劇場

『リトルマーメイド』札幌公演

2023年8月1日～31日 北海道札幌市 東1丁目劇場施設

『キャッツ』名古屋公演

2023年9月1日～30日 愛知県名古屋市中村区 名古屋四季劇場

演劇が人に与える力の大きさ

——人生で記憶に残る舞台について教えてください。

新潟の中学生だった頃に学内の演劇部が上演した舞台を観たのですが、その日のことが今も鮮明に胸に刻まれています。ふだんは机を並べて共に勉強している同級生が、まるで別人のようにキラキラした様子で舞台上に立っている姿を見て、違う場所に連れていかれるような、何ともいえないエネルギーを受け取りました。あれが私にとって最初の演劇体験だったのだと思います。その舞台に立っていた同級生はクラスの男子にからかわれたことに傷つき、それがもって演劇をやめてしまったらしいのですが、時が経ち開催された同窓会の席で「あの日の舞台が忘れられない体験になった」と伝えたらとても喜んでくれました。その後、その人はもう一度舞台に立ってみようと地元の市民劇

に参加し、私も案内をいただき拝見したのですが、中学生の頃と同じように舞台上で輝く姿と歳を重ねてからの挑戦に強い感動を覚えるとともに、演劇という表現が人に与える力の大きさとその魅力をあらためて実感した次第です。

子どもたちが演劇を観る機会を

——5月にコロナの扱いが2類から5類に移行しました。現場で指揮を執られている安藤さんのご実感など伺えればと思います。

私は制作という立場で約2年半、コロナと対峙してきました。コロナがまだ2類だった頃に、俳優が濃厚接触者となった時などは深夜でもPCR検査ができる病院に行ってもらったこともありましたし、カンパニー内に陽性者が出てしまい、急

遽公演を中止にせざるを得ない事態も経験しました。公演が中止になりますと、劇場に立つ表方(おもてかた)のスタッフは、事情を知らずにご来場くださったお客様にご説明するのですが、時にお叱りを受けたり、小さなお子さんが楽しみにしていた舞台を観られず悲しくて泣いてしまうという場面を間近で見たりして、身を切られるようにつらかったと思います。5月にコロナは5類の扱いになり、2類のころと比べれば現場の負荷は少し軽減されたとの実感もありますが、インフルエンザの流行などもあり、まだまだ気が抜けない状況は続いています。

——舞台芸術と社会との関わりについての取り組みなどお聞かせいただけますか。

劇団四季では「こころの劇場」と銘打った小学生の招待公演をおこなっていますが、2020年度は感染症拡大により活動が中止となり、2021～22年度は動画配信版で子どもたちに舞台映像をお届けしていました。今年度からやっと劇場や地元の市民ホールなどで子どもたちに生の舞台を体験してもらえるようになり、ようやくまた一歩進めたと思っています。先日、埼玉でおこなわれた公演を観に行きましたが、開演前から小学生のポジティブな熱気が会場中を包み、舞台が始まってからはせりふのひとつひとつや歌の歌詞すべてを全身で受け取ってくれる彼らのリアクションに胸が熱くなりましたし、脚本を書いた作家も「自分が書いたものに小学生がここまで反応してくれたのは初めて」と感動していました。現場での子どもたちの熱量を体感し、彼らもコロナ禍で我慢が続き、ライブ体験に飢えていたのだとあらためて教えられた気がします。「こころの劇場」では、ふだん生の演劇に触れる機会の少ない沖縄から北海道までカンパニーが作品を持ってうかがいますが、そこでの小さなおお客様のピュアな反応に俳優や私たちスタッフもたくさんの気づきをもらい、勉強させていただいていますし、長く続くこの取り組みに対し、さまざまな企業にご協賛いただいていることも大変ありがたいです。

業界がまとまるのが力になる

——舞台芸術業界の横の繋がりについてはどうお考えでしょう。複数の専用劇場を有する劇団という特性上、劇団四季はこれまで独自の的方法論で公演を実施してきた面もあります。ですが、コロナ禍で多大なダメージを受け岐路に立たされる中、緊急事態舞台芸術ネットワークの会合に参加させていただくようになり、業界として結束することの重要性を再認識しております。我々がコロナによって受けた傷や舞台芸術の社会における価値など、国や社会に声を届けるためには業界全体がひとつとなり組織としてアピールすることも大切です。また、今後このような人間がコントロールできない事態が起きた時のための保険を作れないかといったご提案など、ネットワーク会員の皆様のアイデアをうかがえる機会があることも非常に貴重だと思っています。

——今後の舞台芸術への期待や目標などありましたらぜひ。

今後、日本の少子高齢化が進む中で新たな観客の掘り起こしはますます重要になると考えています。海外のお客様に日本の舞台を観ていただくインバウンドに加え、国内の舞台作品を海外に持っていくアウトバウンドなどにも積極的に取り組む必要があるのかもしれません。また、才能あふれる作り手の発掘及び育成をおこなうことが業界の活性化にとって絶対に必要だとも感じています。そのために、たとえば舞台芸術に仕事として関わることの素晴らしさをアピールするフェスティバルのようなことができたら良いのかもしれませんが、若い世代が働きやすいと思える環境の整備も我々先を歩く者がやるべき仕事だと思っています。舞台芸術業界は音楽業界に比べ、これまでまとまって何かをやる機会が少なかったという状況もありますが、コロナ禍というピンチの中で生まれた結束を生かし、今後の発展に繋げていければと思いますし、舞台芸術業界がまとまって未来に向かっていくことは絶望の中で生まれたひとつの希望だと感じています。



専務取締役 安藤義宣
YOSHINOBU ANDO

東京大学文学部を卒業後、1988年四季株式会社入社。マーケティングセンター部長、第二制作部第一課ジェネラルマネージャー、予算管理部ジェネラルマネージャーを経て、2002年3月取締役(経営統括室長)に就任。その後、取締役として国際グループ・欧米担当となり、2004年6月に常務取締役、2012年3月に営業企画部取締役待遇、2015年12月に常務執行役員に就任。2018年4月からは専務取締役(制作・国際・経営企画・企画開発担当)に就任。現在は、制作・国際・経営企画・企画開発・演出を担当。

[取材日:2023年11月10日 取材・文:上村由紀子]

株式会社シーエイティプロデュース

翻訳劇やオリジナルミュージカルなど、小劇場から大劇場と幅広く、全国ツアーまで舞台作品の企画・製作を手掛ける株式会社シーエイティプロデュース。アシスタントプロデューサーである薄田晶子氏はコロナ禍に同社へ転職し、今や数々の公演の現場を支えている。別業種から転職された目線から、舞台芸術業界への期待や課題を率直に語っていただいた。



対象公演 『BACKBEAT』
2023年5月6日～7日 熊本県熊本市 市民会館 シアーズホーム夢ホール
『アウト・オブ・オーダー』
2023年11月11日～12日 佐賀県鳥栖市 鳥栖市民文化会館 大ホール
ミュージカル『スライス・オブ・サタデーナイト』
2023年11月28日～29日 宮城県仙台市 電力ホール

コロナ禍に別業種から転職

——薄田さんはまったくの別業界からこの世界に入ったそうですね。

転職前は食品関係で営業の仕事をしていました。コロナ禍にオンラインでの業務が増えたこともあり、自宅で先が見えない時間を過ごす中、このまま自分の人生が終わるのは嫌だなと感じ、興味がある分野に挑戦してみようと今の会社の門を叩きました。

——コロナ禍で舞台芸術の世界から他業種に転職した方のお話は聞きますが、逆のパターンは初めてです。

面接の際に弊社代表からも「泥船かもしれないよ」と言われました(笑)。当初は事務作業を担うデスクとして採用されたの

ですが、人手が足りないこともあり、入社半年頃から現場にも出ています。

——もともと演劇やミュージカルは好きだった？

子どものころから鑑賞したり習ったりしていたこともあり、一番好きでよく観ていたのはクラシックバレエです。ですが、自分が本当に好きなバレエ関連の仕事をしよとはあまり思わず、興味はあったものの、さほど深くは触れてこなかった演劇やミュージカルの世界に関わってみたいと考えました。

スウィングの重要性を再認識

——コロナ禍で実際に舞台芸術の世界に飛び込まれていかがでしたか？

まず、制作側として何千人、何万人ものお客様がチケットを買ってくださっているという重みを強く実感しました。ですので、やむを得ない事情で公演を止めなければならない時のお客様の落胆を想像すると非常につらかったです。今はその責任の大きさを意識しながら、舞台の幕を開けることの喜びややりがいも少しずつ感じられるようになりました。

もしコロナ禍で良かった点があるとしたら、スウィングの重要性を世の中全体が認識し始めたことかと思います。もちろんそれまでもスウィングを置くカンパニーはありましたが、その存在や詳細な役割がオープンになることは少なかった気がします。ですが、コロナ禍を経て担う役割の重要性が認知され、スウィングとして公演に参加する俳優さんのお名前が公演パンフレットや作品の公式サイトでクレジットされることも増えました。これは非常に良い変化だと感じます。彼らがいってくれたからこそ、幕を開けられた作品も多いですから。

——5月にコロナが2類から5類に移行しました。稽古場の変化など教えてください。

まず、コロナが2類だった時は稽古場の人数を極力減らすという会社の方針もあり、私自身はあまり中に入ることができませんでした。その後、アシスタントプロデューサーとして担当した『ロジャース/ハート』(再演)は5類移行後の開幕でしたが、なるべく全員が安心できるようにとお守りの意味も込めて初日直前にPCR検査も実施しております。マスクに関しては任意ではありますが、今も俳優さんを含めた関係者にはなるべく着用のご協力をお願いするようにしている状況です。

——コロナの扱いが5類になり観客との距離の変化を実感なさることはありますか？

5類になったことで、演出の変化とともにお客様との距離が近くなった実感はあります。俳優さんの客席降りやお客様と

の小道具の受け渡しなども普通にできるようになりました。これは私個人の感覚ですが、コロナ禍ではお客様との小道具のやり取りの際に消毒をおこなっていたので、今、その過程がないことにドキドキする瞬間もあります(笑)。そんなふうに、現場での考え方や物の見方がコロナ禍を経験したことで大きく変わったと感じる事例は多いです。

社会問題と舞台芸術とのリンク

——舞台芸術と社会の関わりについて意識なさることなどあればぜひ。

オリジナルミュージカルの『りんご』(2022年)に制作として関わったことをきっかけに、農作物の無農薬栽培やSDGsについて深く考える機会も増えました。『りんご』はテーマのひとつが農業でしたから、お客様へのリーチの方向性が少し難しく、公演のPRなどで苦心することも多かったのですが、ミュージカルという形態を使って環境問題などを演劇作品に取り込む方法もあるのだと新たな手ごたえもありました。今後、子どもたちが楽しみながら社会の問題に触れられる作品の創作にも挑戦し、それを全国で上演するような企画も実施できればと思っています。

——今後の舞台芸術への期待や目標など語っていただけますか。

私自身が一般企業からの転職組ということもあり、定時退社や残業代、深夜手当など、一般の会社では当たり前なのが舞台芸術の現場では普通でないのだと身をもって実感してきました。そこに対して自分が何をやるのかはこれから探っていくことですが、AI技術などが活用され労働環境が変わっていけば、もっと多くの人により良い状態で働けると思いますし、若い世代が希望を持って舞台の仕事が続けていけると感じます。



薄田晶子
AKIKO SUSUKIDA

2021年シーエイティプロデュース入社。
携わった主な作品に、『検察側の証人』(2021)、『ハウ・トゥー・サクシード』(2021)、『ジョセフ・アンド・アメージング・テクニカラー・ドリームコート』(2022)、『黄昏』(2022)、オリジナルミュージカル『りんご』(2022)、『ルーザーヴィル』(2023)
2023年初めてアシスタントプロデューサーとして『ロジャース/ハート』を担当する。

[取材日: 2023年11月8日 取材・文: 上村由紀子]

株式会社キョードーファクトリー

子ども向け、ファミリー向け作品をいくつも上演する株式会社キョードーファクトリーは、今年もまた数々の舞台とともに全国の劇場を巡った。『きかんしゃトーマスファミリーミュージカル』は2023年で10年目を迎えるなど、毎年上演するシリーズだからこそ見える現在地と、舞台製作における数々の工夫がある。プロデュースを手掛ける竹澤寿之取締役に、舞台芸術の未来への展望を聞いた。



- 対象公演**
- はらぺこあおむしショー**
2023年5月13日 栃木県小山市 小山市立文化センター大ホール／2023年5月14日 山形県南陽市 シェルターなんようホール
2023年6月3日 三重県津市 三重県文化会館大ホール／2023年6月4日 岐阜県岐阜市 岐阜市民会館
2023年7月22日 埼玉県所沢市 所沢市民文化センター ミューズ マーキーホール
2023年9月3日 秋田県秋田市 秋田県児童会館「みらいあ」・子ども劇場(けやきシアター)
 - ウルトラ6兄弟 THE LIVE**
2023年7月1日 宮城県仙台市 トークネットホール仙台／2023年7月2日 新潟県新潟市 新潟県民会館
2023年7月15日 熊本県熊本市 熊本城ホール／2023年7月16日 広島市呉市 呉信用金庫ホール
2023年7月17日 山口県山口市 KDDI維新ホール／2023年9月30日 埼玉県所沢市 所沢市民文化センター ミューズ マーキーホール
 - きかんしゃトーマス ファミリーミュージカル 新ソドー島のたからもの ニア編**
2023年11月3日 三重県伊勢市 シンフォニアテクノロジー響ホール伊勢
 - きかんしゃトーマスクリスマスコンサート ソドー島のメリークリスマス 2023**
2023年11月25日 群馬県太田市 太田市新田文化会館／2023年11月26日 茨城県常陸太田市 常陸太田パルティホール

コロナ禍を経て差した光、舞台芸術の新たな在り方

—5類になるにあたって、現場ではどのような変化を感じていますか？

今年は『きかんしゃトーマスファミリーミュージカル 新ソドーのたからもの』、『ウルトラ6兄弟 THE LIVE』、『はらぺこあおむしショー』と3つのファミリー向け作品で全国を回りました。各地で3本が同時に上演している日もあり、住む地域や年齢の異なる多くの子もたちに演劇を届けられた実感があります。キャパの大きな福岡市民会館でトーマスとウルトラマンがそれぞれ2回公演で2週にわたり満員御礼となった時は嬉しかったですね。大人向け公演も動員が増え始め、この数年見ることの叶わなかった「劇場がお客でいっぱいになる光景」を再び見られるようになったこと。その瞬間は非常に感極まるものがありましたし、今年を象徴する印象的な出来事であったと思います。一方で業界全体としては中止を余儀なくされる公演もありますので、気を抜かず上演

に臨んでいきたいと思っています。「コロナ」という共通の試練を乗り越えるべく、危機管理や感染対策の情報を共有することも増えました。苦しい時も嬉しい時もともに分かち合うこと。そういった横の繋がりが生まれたことは貴重なことだと思います。

—オンライン配信をはじめデジタル技術によって舞台の在り方や届け方にも変化がありました。そういった技術の導入についてはどのように感じていますか？

遠方にお住まいの方や劇場に足を運べない方にとっても映像配信は重要な役割を果たしていますし、生の舞台と配信が公演の一つの流れとして定着しているとも感じます。昨年の公演では、演出面においても音声管制システムをはじめ、様々な技術を実験的に取り入れました。当時はコール&レスポンスができなかったため、スマホとの連携で客席からのリアクションを可能にしたり、専用ペンライトと照明を同期してお客様に照明スタッフの一員を担ってもらった公演もありました。他にも「バックステージツアーをバーチャルでやって

みよう」という話が出たり、弊社の公演に限らず新たなアイデアが続々生まれています。コロナ禍は大きな試練でもありましたが、これまでレギュラーではなかった技術や演出を用いて、“舞台と観客を繋ぐための試み”に新たに挑戦できたことは意義深い経験だったと感じています。一方で、たとえ技術が進化しようとも、舞台はやはり生身の人間が生み出すエネルギーと臨場感に最大の魅力がありますので、デジタルの不可侵領域である強みも改めて痛感しています。その良さを守ることもまた私たちの重要な使命だと思っています。

未来の舞台人のために 今の自分ができること

—舞台芸術と社会の関わりについて、仕事のなかで意識していることは？

弊社指定管理のシアター1010では、毎年8月に地元・足立区の高校をはじめ関東地区から10校程が出演する『高校演劇サマーフェスティバル』が開催されています。10代で劇場の舞台に立つという実践的な経験が後の進路においても役立つかもしれない。そんな祈りと期待を抱きながら今年は観劇しました。演劇や劇場を通じて、次世代を担う子どもたちのきっかけを作りたいと思いますし、ファミリー向け公演の上演を続けることも同じところに繋がっていると感じています。

—舞台に親しんだ幼少期の経験をきっかけに舞台芸術業界を目指す人もいます。これからこの業界を目指す人への思いを聞かせてください。

今年7月に弊社主催で平田オリザさん作の『幕が上がる』を上演したことをきっかけに豊岡演劇祭に赴き、平田さんが学長を務める芸術文化観光専門職大学も案内していただきました。“日本初の公立の演劇大学”と聞いてはいたのですが、その施

設の充実には感銘を受けました。劇場、稽古場、大道具室、衣裳部屋などまさに演劇に必要なもの全てが揃っている環境で、学生たちはそれぞれサークル(劇団)を作っていて……。「全国からこの場に学びに来ている“未来の舞台人”がいるのだ」と思うと、胸が熱くなりました。設立から3年、来年には初めての卒業生が社会へ出るわけですから、その際には弊社も何らかの形で力になりたい、と強く思いました。ライブである舞台芸術ではどの業種においても現場での生の経験を重ねることが何より重要。弊社は様々な種類の公演を行いながら劇場の運営もしているため、この道を志す人々に現場でのきっかけや学びを手渡せる先人でありたいと改めて思っています。

街や市民を巻き込んで、演劇をより身近に

—今後の舞台芸術業界全体にはどんな期待や展望をお持ちですか？

一言で言うと、街や地域を巻き込むことでしょうか。その一つとして、今年は『珈琲いかがでしょう』という舞台で足立区内の喫茶店やカフェとタイアップをさせていただきました。足立区は個人経営の喫茶店やカフェがとても多く、「せっかくなら観劇前後に美味しいコーヒーを飲んでもらいたい」という思いから出演者の方にお店を紹介していただき、お店でも舞台のお知らせを出していただくといった相互作用を試みました。公演期間中は劇場でも毎日焙煎仕立ての豆を挽いて、コーヒーの香りを演出して……(笑)。市民や区民の方に作品を届けることは劇場の重要な使命の一つですが、そこからもう一歩進んで、「劇場のある街と一緒に作る作品ができたら」と日々考えています。弊社は大阪の箕面や熊本や山形の南陽にも指定管理の劇場があるので、今後も街を絡めた作品を広く作っていきたいです。

プロダクション事業部 取締役 竹澤寿之
TOSHIYUKI TAKEZAWA

バンダイミュージカルオフィス時代に『セーラームーンミュージカル』『BOYS...BE』『蜘蛛女のキス』などをプロデュース。その後幾つかのエンタメ企業を経て、株式会社キョードーファクトリーへ入社。『きかんしゃトーマスミュージカル』『かいけつゾロリ』『はらぺこあおむし』『ウルトラ6兄弟 THE LIVE』等のファミリー作品から『ぼくらの七日間戦争』『瞬間の風になれ』『くちびるに歌を』『珈琲いかがでしょう』『幕が上がる』などを企画制作・プロデュース。また JA 中野市『えのたん』、チケットぴあ『びっける&くまっぴー』、豊島区『そめふくちゃん』等のキャラクター制作やイベントも手掛ける。

[取材日:2023年10月23日 取材・文:丘田ミイ子]

株 式 会 社 ア ミ ュ ー ズ

株式会社アミューズは"新創業期"と位置づけ2021年に本社を山梨県へと移転。

音楽や映像などのコンテンツ創造に加えエンターテインメント性の高いオリジナル作品から海外及びオリジナルミュージカル、ファミリー向け舞台などさまざまな公演の制作もおこなう。

入社後初めて演劇に関わったというプロデューサーの多田里奈氏に舞台制作に携わる思いなどを伺った。



撮影: 森好弘

対象公演 ミュージカル『FACTORY GIRLS ~私が描く物語~』
2023年6月5日~13日 東京都千代田区 東京国際フォーラム ホールC

2類から5類移行で感じた変化

——ミュージカル『FACTORY GIRLS ~私が描く物語~』(再演)は、コロナが5類に移行してすぐ後の公演でした。

まさに稽古中、コロナの扱いが2類から5類に切り替わったのですが、特にマスクに対する考え方が変化したと思います。スタッフは基本、全員マスク着用を継続することにしましたが、感染対策と共に、作品のクオリティ向上という観点から、出演者にはご自身の判断でマスクの着用形態を選んでもらう形をとりました。

——稽古場での反応はいかがでしたか。

演出の板垣(恭一)さんもマスクに関しては出演者の意思を尊重します、とおっしゃってください、カンパニー内に変なハレーションが起きることもなく、フレキシブルな対応ができていたと感じます。たとえば、激しいダンスの振付や歌稽古の時はマスクを外し、登場しない場面の際はマスク着用で待機、といったこともありました。

——今作は女性のエンパワーメントが大きなテーマでしたね。

19世紀半ばのアメリカで工場労働者の女性たちが武力では

なくペンの力で権利を勝ち取っていく物語ということもあり、初演時から多くの反響がありました。お客様のアンケートやSNSなどからも、「この作品に大きなパワーを貰った」とのご感想を多数いただき、「作品が宿すメッセージそのものに感動した」とのお声に、日米合作で創ったオリジナル作品をコロナ禍で再演した意味をあらためて噛み締めた次第です。

——多田さんご自身、社会と舞台芸術との関わりについてお考えになることは多いですか？

私が制作者として関わる舞台作品にはウーマンパワーやフェミニズムがテーマになっているものもあります。アミューズの舞台製作部としては、そういったメッセージを大切に上演作品を選択している面もありますが、個人的には、自分が深く共感、共鳴でき、多くの人にお届けしたいと思った物語が社会問題をも内包していたという感覚です。作品が放つメッセージを演劇という表現を借りてお客様にお伝えできればと思っています。

手探りだったオンライン配信

——コロナ禍で舞台作品のオンライン配信も増えました。

コロナ禍以前から、たとえば、弊社が手掛ける「地球ゴージャス」の作品などにテレビの収録が入ったり、DVD化のために撮影機材を入れたりということはありましたが、編集なし、リアルタイムでの舞台生配信はなかなかの手探り状態でした(笑)。それこそほぼゼロからのスタートで、他の主催企業さんがどういふふう風にやっていたらいいのか、いろいろなサイトを拝見してリサーチも重ねました。

——そういう時に舞台芸術界の横の繋がりが役に立つことはありましたか？

オンライン配信に関してだけでなく、コロナ禍での興行は稽古場運営や劇場でのお客様への対応など何もかもわからないことばかりでしたから、舞台芸術に関わる会社同士がさまざまな情報を共有できたことはとてもありがたかったです。

——今後、舞台芸術業界が取り組むべきとお考えのことがあればぜひ。

チケットの価格設定は悩ましい問題です。近年、様々な費用の高騰で、結果チケット代が上がっている現実があり、とはいえ、本当にこの状況が続くのはもちろん良いことではないと思いますので、非常に悩みます。そういった中で、せめてものチケット高額転売への対応と対策は、公式のリセールシステムの充実を含め、本当にご覧になりたいお客様に公平にチケットが行き渡るようにするにはどうしたら良いのか、具体的な方法を探っていかなければならないと思っています。

社内の人事異動で演劇の世界に

——この世界に入られたきっかけを教えてください。

アミューズには中途入社だったのですが、それまで音楽関係の仕事をしてきたこともあり、音楽分野のマネジメントにいくの

だろうと思っていたら、俳優マネジメントのセクションに配属されてデスク業務を担うようになりました。その中で「地球ゴージャス」の作品に関わったことが演劇の仕事をする最初のきっかけです。そこからまた社内の異動などを経て、2011年頃から本格的に舞台制作の現場に入るようになりました。

——以前からずっと演劇やミュージカルをお好きだった？

それがまったく(笑)。たとえば、幼い頃から劇場に通って〇〇を観て人生が変わったという原体験も私にはありません。ですが、どうして今も舞台芸術に関わっているのかとあらためて考えたら、やはり最初に経験した「地球ゴージャス」の現場の熱量がずっと心に残っていることと、ミュージカル『キンキーブーツ』初演(2016年)に準備の段階から携われたことはとても大きいですね。

——演劇やミュージカルにあまり興味をお持ちでなかった多田さんが、さまざまな舞台作品を世に送り出していることに希望を見出す人も多いと感じます。

私の実感ですが、観劇回数がさほど多くなかったり、演劇の知識があまりなかったとしても、何らかの情熱と元気があれば舞台制作の仕事はできると思います。舞台の幕を開けるといことは準備期間も含めすべてがチームプレイなので、無駄な役割はひとつもありません。たとえば、黒いジャージ姿で小道具を並べて稽古場を整えてくれる人や、明るい笑顔と屈託のない居方で場の雰囲気アップしてくれるスタッフがいるからこそカンパニー全員で初日に向かって走っていけるわけです。もちろん、演劇が大好きで知識が豊富なスタッフに教えられ、助けられることも多いです。さまざまな経験値や視点を持った人たちがそれぞれの得意分野を持ち寄り、同じ情熱で作品を創っていけるのがこの仕事の醍醐味だと感じています。



舞台製作部 シニアスーパーバイザー 多田里奈
RINA TADA

1999年アミューズ入社。音楽&役者マネージメントセクションや秘書業務を経て、2011年に舞台制作へ転身。制作統括やプロデューサーを担う。近年の主な作品に、『キンキーブーツ』(2016~)、地球ゴージャス作品(2012~2021)、『REON JACK』シリーズ(2017~)、『マリー・キュリー』(2023)、『FACTORY GIRLS ~私が描く物語~』(2019・2023)、『ヴァグラント』(2023)、『ミア・ファミリア』(2023)など。

[取材日: 2023年11月6日 取材・文: 上村由紀子]

INTERVIEW

松竹株式会社

松竹株式会社は日本の代表的な伝統芸能である歌舞伎公演の製作、興行をはじめ、映画や演劇、ミュージカル、劇団新派公演や松竹新喜劇など多彩なエンターテインメントをさまざまな年代に向けて提供。

東京の歌舞伎座と新橋演舞場、大阪の大阪松竹座、京都の南座と4つの劇場を有しそれぞれ運営も手掛ける。

今回、関西における演劇部門の指揮を執る市村昌也氏にお話を伺った。



『夜曲～ノクターン～』

坂東玉三郎特別公演 ©松竹

対象公演
『夜曲～ノクターン～』
2023年6月6日～22日 大阪市中央区 大阪松竹座
坂東玉三郎特別公演
2023年8月3日～27日 京都市東山区 南座

13年間の営業職を経て制作へ

——強く記憶に残っている舞台作品について教えてください。
私は13年間営業職に就いた後に制作の現場へ入りました。制作として最初に担当した舞台が桂春団治を主人公に置いた作品で、まだ右も左もわからない中、藤山直美さんや沢田研二さんが一から芝居を作り上げていく様子を間近で見て日々感動したのを覚えています。千穉楽で劇場全体が熱気に包まれ、役者さんたちが涙を流されたお姿は今でも忘れることができません。

——業界内で尊敬する先輩はいらっしゃいますか？
制作として何もわからず現場に入った時に、スーパー舞台監督として役者さんへの配慮の仕方や稽古場でのことなどすべてを教えてくださいました浅香哲哉さんです。今も演出家として活躍なさっている先輩で、一時期は仕事でもプライベートでも多くの時間を一緒に過ごさせていただきました。

舞台芸術は不要不急ではない

——『夜曲～ノクターン～』はコロナが5類に移行してからの公演でした。現場でお感じになったことなどあればぜひ。
私はどちらかというと“表方(おもてかた)”として劇場でお客様をお迎えする立場ですので、その視点でお話いたします。まず、劇場内のお客様と接する従業員たちは、現在でも基本的にはマスク着用で仕事をしております。また、東京の歌舞伎座が客席内での飲食を解禁したことを受け、大阪松竹座、南座ともに幕間の客席でのお食事なども再開しました。ただ、ご飲食の際、大きな声での会話は控えていただくようお願いもしています。
『夜曲～ノクターン～』は若いお客様が大変多い舞台でしたが、マスクの着用率はかなり高かったと記憶しています。終演後、お帰りになるお客様が作品や出演者について高い熱量で語っているお姿を拝見し、非常に明るい気持ちになりました。

——舞台芸術と社会の関わりについてお仕事のなかで意識していることはありますか？
演劇やミュージカルといった舞台芸術は、衣食住のように人が生きていく上で絶対的に必要なものではないかもしれませんが、

ですが、人は劇場にいる時間、日常を忘れ夢の世界に浸ることができます。コロナ禍で舞台芸術全体が不要不急といわれたりもしましたが、私個人としては決して不要ではない、社会にとって必要なものであるという気持ちでお客様をお迎えしています。

AI技術と舞台芸術の融合

——コロナ禍のオンライン配信でどんな影響があったか教えてください。
劇場の客席数は限られていますが、配信はその点を気にせずより多くの方に舞台芸術に触れていただくメリットがあると思います。以前は舞台作品を映像化する際、著作権の問題等でクリアしなければならないハードルも多々ありましたが、コロナ禍でその点が少し緩やかになり、オンラインでの配信を行いやすくなったとの実感もあります。個人的には一旦広まった舞台作品のオンライン配信が先細りになることはなく、今後も続いていくと考えています。お客様からは、たとえば東京と大阪の往復といった長距離の移動をすることなく、安心して自宅で好きな舞台作品を鑑賞できるというお声もいただきました。

——もともとオンライン配信のノウハウをお持ちだったのでしょうか？
いえ、そのあたりはコロナ禍になって新たに取り組み始めたという状況でした。諸般の権利関係を含んだ法的なことをどうクリアすれば良いのか、また費用はどの程度かかるのかといったところから勉強しましたし、役者さんへの出演料や演出家さん、脚本家さんを含めたスタッフへのお仕事料がどういう形になるのか、各所への確認作業もあらためておこなった次第です。舞台映像の撮影に関しては、松竹は映画館で歌舞伎の映像をご覧いただく「シネマ歌舞伎」を実施していますので、そのノウハウが活かせると思っていましたが、映画館のスク

リーンとご自宅のパソコン画面といった視聴環境の違いから、オンライン配信はより専門的な撮影技術が必要なのだと、さまざまな試行錯誤がありました。

——AIなどデジタル技術の進歩が舞台芸術にもたらす展望についてどうお考えでしょう。
デジタル技術の進歩は舞台芸術において大きな可能性をもたらしてくれると考えています。たとえば役者さんが立つバーチャル空間にデジタル処理をおこなうことで装置や背景を瞬時に映し出すこともできますし、現在開発中のAI技術では白いTシャツのみ着用の役者さんにさまざまな衣装を着せることも可能になり、さらに役者さんの手や足の動きに連動し、衣装の布にシワが寄る様子まで表現することもできると聞いています。まだ改善の余地はあると思いますが、将来的には、画面で見ると同じレベルにまで到達すると思っています。この技術の汎用性が高まれば、歌舞伎のような舞台芸術もより安価な価格でオンライン配信ができますし、海外の方にも多くご覧いただけるのではないのでしょうか。

——市村さんのご実感として、舞台芸術業界での仕事において特にどんなことが大切だと思われませんか？
この業界、門を叩いてくださる方は多いのですが、カレンダー通りの業務とはいかないこともあり、定着率が厳しいという悩みもあります。ただ、優秀な女性が“裏方”“表方”ともに増えていることは大変心強いです。舞台芸術の世界、おもにスタッフワークでは、自分が何をしたいのか明確な目標を持ち、つねにお客様へのフィードバックを意識することが大切だと感じます。そして、希望を持ってこの世界に入ってきてくださった人たちが長く働きやすい環境になるよう、私たち迎える側もこれまでの意識を変えていくことが必要だと強く実感しております。



関西演劇部門担当 兼 関西演劇室室長 兼
大阪松竹座総支配人 兼 西日本統括副担当 執行役員 市村昌也
MASAYA ICHIMURA

1988年4月松竹株式会社入社、中座営業係に配属。以後13年間、中座をはじめ南座・大阪松竹座の販売営業を担当する。2001年10月演劇製作室に配属。主に藤山直美さんが出演する舞台製作を担当する。2015年4月大阪松竹座支配人に就任。2019年1月関西演劇室室長に就任。南座・大阪松竹座及び関西製作等の取り纏めを行う。2020年6月執行役員関西演劇部門担当兼関西演劇室室長に就任。2022年4月執行役員関西演劇部門担当兼関西演劇室室長兼大阪松竹座総支配人に就任。現在に至る。

[取材日:2023年10月27日 取材・文:上村由紀子]

シス・カンパニー

年4〜5本ペースで良質な演劇公演を行なうシス・カンパニー。

日本の劇作家による既存作や新作のほか、英米の現代劇作家による明確な問題意識を持った翻訳作品などを上演している。舞台制作と、舞台や映像で活躍する俳優やクリエイターのマネージメント業を2軸に、観客の厚い信頼を得る同社。

その代表取締役である北村明子氏に、演劇制作に携わるその人生観を伺った。



撮影：宮川舞子

対象公演 『帰ってきたマイ・ブラザー』
2023年6月8日〜11日 新潟県新潟市 リューとびあ 新潟市民芸術文化会館・劇場

高校時代に観た舞台を企画

——人生を変えた演劇はありますか？

あえて言うなら、太地喜和子さんです。高校を出てお芝居をしたかったのですが両親から反対されてもやもやしていた時に、文学座の『美しきものの伝説』を観たんです。後ろの方の通路側の席に座っていたら、客席の階段の後ろから、太地さんがパッと傘を差してスッと横を通ったんです。その時に文学座独特のお化粧の匂いがして……そのまま階段をバァッと上って舞台上に出ていくのを見て、「はあ、やっぱりお芝居をやりよう」と思いました。それで大学を辞めて文学座に入ったんです。

もうひとつ、今のお仕事に繋がる原点として、高校生の時に祖父母の仕事のお付きでニューヨークで『ヴァージニア・ウルフなんかこわくない？』という舞台を観ました。それまで大きな劇場で観ていたの、ほんとに小さな空間でお芝居をしているのを初めて観て、圧倒されてしまいました。衝撃だったんです。その後、プロデューサーになってから「あの芝居をやりたい」と思い2006年に企画して上演しました。舞台

は客席の真ん中にして。

——俳優としてのスタートでしたが、プロデューサーの道へ進まれたんですね。

この業界の、いろんな才能の方たちとお仕事してみたいんですよ。自分でプロデュースしてやれるようになってやっと「この仕事でよかったんだな、私」と思えるようになりました。そこに至るまでは、野田秀樹さんをはじめ一緒にお仕事させてもらった方々との経験から培わせていただいたものが大きいですね。

コロナ禍に限らずできることを

——5月に新型コロナウイルスの扱いが5類になった当時の様子はいかがでしたか？

お客様から「隣の席の人がマスクをしないんです」と苦言をいただいたり、中央の客席でマスク無しで咳き込む方がいて注意することもできないことが何度かありました。そのため、なかには返金を希望される方もいましたね。しかも、役者はマス

クを外さなければならず、陽性になったら休むしかない。そんな状況でもやれることをやるしかなかった。当時は政府に対して「なぜ今、5類に？」「なにかあったら責任はどうするの？」という気持ちにはなりました。今はそういった問題は少なくなりましたが、稽古場では役者さんに毎日抗原検査をさせていただいています。

——『帰ってきたマイ・ブラザー』は5類になる直前に上演がスタートし、ツアー公演では体調不良者の代役を演出家がつとめることが何度かありました。

その発想は2022年に『ショウ・マスト・ゴー・オン』で代役をすべて演出の三谷幸喜さんにやってもらったことからです。演出家が一番早く台詞を覚えられるだろうからと。『帰ってきたマイ・ブラザー』は水谷豊さんの23年ぶりの舞台で、お客様の期待が大きく、水谷さんが降板しないかぎりは続けたかった。中止になってしまった回もありましたが、なんとか演出家(小林頭作さん)の代役という形で上演が続けられたことはありがたいことでした。

——シス・カンパニーさんは長らく黒字経営でしたが、コロナの影響は厳しかったのではないのでしょうか？

もしコロナ禍当初の状況が10年続いていたら無理だったでしょうね。それだけでなくストレープレイを観る人は減っていると感じます。時代の変化は仕方のないことなので、もしお手上げの時が来たら、自分にできることを手を変え品を変え考えていくしかない。経営手腕だけでなくアイデアも大事です。例えば、ずっと同じ作風だと好きな人は通ってくれますが、幅広い人に継続的に観ていただくには毎回毛色の違う芝居をしてお客様の予想を裏切るという方法もあります。私たちはお客様に観ていただいて生活できているので、喜んでいただくためにどうやって興味を持続け

ていただくかは常に考えています。

好きなことだから自分の責任で

——配信のほかAIやNFTなどデジタル分野が発展してきました。今回の公演ではInstagramなどSNSを活用されていましたね。

この10年でテクノロジーも経済も大きく変わりましたね。これからどうなるかなんてわからない。SNSにしても好きな人もそうでない人もいますから、カンパニーによって「このメンバーでできることは？」と考えるしかないです。目の前のことに柔軟に対応していくしかない。もう、対応の鬼ですよ。例えば、出演者が降板しなければならなくなった時に代役を立てるのかなど、自分のとるべき対応はなにか。それに正当性はあるのか。その判断を瞬時にしなければいけない。来た球をどんどん打ち返すのは疲れるけれど、ピンチは天の愛だと思った方が人生楽しめますから。ただ、無理はしていないんですよ。私のできるギリギリの範囲で対応しているので、続けていられるんです。

——これからの時代に舞台芸術に関わる方への思いを聞かせてください。

舞台芸術への関わり方や方法論って人それぞれ。山登りと一緒に登る道はいっぱいある。それを人の後ろにつかずに自分で探す意志があれば、周りが力強く思っ一緒にやってくれることもあります。自分で物事をジャッジしたり、イチから演目を選んで公演を立ち上げていくことと同時に、興行の責任を取ることに難しさと楽しさを面白がれるプロデューサーが増えると嬉しいですね。そうしてそれぞれができること、やりたいことをめげずに実行していくことが演劇界が活性化される足掛かりになるかもしれない。努力も運も必要だけれど、好きなことを仕事にできることは何よりも幸せだと思っています。



代表取締役 北村明子
AKIKO KITAMURA

1947年京都市生まれ。女優として活躍後、85年に「劇団夢の遊眠社」内に俳優マネージメント部門を設立。89年、劇団マネージメント部門を「シス・カンパニー」として法人独立させ、劇団の公演制作も担当。俳優マネージメントと舞台制作の両輪での活躍が始まる。92年の劇団解散後は、野田秀樹の演劇活動基盤となる『NODA・MAP』を野田秀樹と共に立ち上げ、94年から2008年1月まで、プロデューサーとして全作品の制作を担当。また、俳優マネージメントと並行して、98年よりシス・カンパニー独自の舞台制作を開始。現在に至るまで年間平均4〜5本の舞台作品をプロデュースしている。

[取材日:2023年11月30日 取材・文:河野桃子]

株 式 会 社 御 園 座

明治29年創業の御園座は、5年間に渡る立て替え工事を経て2018年に新装開場。

約1300の客席、大規模なせり、花道、オーケストラピットを有し、歌舞伎やミュージカル、歌手の座長芝居、落語など多彩な演目の上演で名古屋を中心とした中京圏の舞台芸術をけん引する存在となっている。経営のトップでありながら現場主義を貫く御園座・宮崎敏明代表取締役社長にお話を伺った。



御園座六月公演



梅沢富美男劇団



『最高のオパハン 中島ハルコ』 写真提供:東宝演劇部

対象公演

御園座六月公演 松平健 辰巳ゆうと 桂米園治

2023年6月21日～26日 愛知県名古屋市中区 御園座

舞台『最高のオパハン 中島ハルコ』

2023年9月13日～20日 愛知県名古屋市中区 御園座

梅沢富美男劇団

2023年11月4日～13日 愛知県名古屋市中区 御園座

今も胸に残る業界の先輩の言葉

——舞台芸術の現場で心に残る出来事を教えてください。

私は営業職から御園座での仕事をスタートさせました。御園座の二本の大きな柱が(舞台)制作と営業です。以前はどちらかという制作の意見がより強く社内で反映される雰囲気があり、営業職だった自分もその空気を無意識に受け容れているところがありました。ですがある時、伊藤さんという外部の制作会社の方が「営業がチケットの販売促進をしてくれるからこそ舞台は成り立つ。制作だけが偉いわけではない」と社員の前でお話をしてくださり、目からうろこが落ちました。現在、さまざまな立場で舞台芸術に携わるなかで、伊藤さんのその言葉は胸の中に残り続けています。

——宮崎さんは代表取締役社長として経営のトップに立ちながら、現在も営業のお仕事をなさっているとうかがっています。営業としても現時点で約80社の顧客を担当しております。営

業関連のコミュニケーションの中で、お客様から「こういう作品を上演してほしい」と直接うかがい、そういったお声を自社での舞台制作にダイレクトに反映させられるのは大きなメリットであると感じます。

客席の足元換気装置が活躍

——5月にコロナの扱いが2類から5類に切り替わりました。現場での変化などいかがでしたか。

まず、PCRなどの検査回数が減り、それに伴い現場での負担も軽くなったと思います。また、3年に渡るコロナ禍で、なんとか公演を続ける対策のひとつとして最初に挙げたいのは、数々の役を覚え、休演したキャストさんに替わってその役を演じられるswing制度がどの公演にも見られるようになったことです。

マスクに関しては、2類、5類にかかわらず、劇場案内係や売店スタッフなどの表方(おもてかた)は着用を継続していますし、

ご来場のお客様にも着用を推奨させていただいております。

——幕間などの劇場内客席における飲食関係にはどう対応なさったのでしょうか。

実はコロナの扱いが2類だった頃から、劇場内客席での飲食をストップしておりません。といいますのも、御園座は全座席一つひとつの足元に換気装置を設置しており、空気を循環させることが可能だからです。お客様が幕間の客席内で召し上がるお弁当の匂いが上演中まで残り、舞台上に集中していただけないのでは……との思いから5年前に導入したシステムですが、これがコロナ禍での客席内の換気に一役買ってくれました。

——今回の対象公演3作品はいずれもコロナ5類移行後の上演でしたが、ご覧になった方たちからどんな反応がありましたか？3作品とも明るく華やかな内容で、さらに名古屋にゆかりのある出演者がいらしたり、東海テレビで放送されたドラマをもとにした舞台がラインナップされていたりと、お客様には親しみを持ってご覧いただけたと思います。団体及び年配のお客様もたくさんご来場くださり「元気をもらった」「明るい気持ちになれた」とのお声も多数頂戴しました。特に年配のお客様はコロナ禍で外出を控えていた方も多かったため、松平健さんや大地真央さん、梅沢富美男さんといった各座長からパワーを受け取っていただけたのではないのでしょうか。

横の繋がりをさまざまに活用

——舞台芸術と社会との関わりについてどうお考えでしょう。御園座は会社として一度倒れたことがあるのですが、その際には大変多くの方や企業、自治体などからご支援をいただきました。当時受けたご恩をなにかの形でお返しできないかと、名古屋や近隣の複数のホールが閉場の危機を迎える今、それらの施設をなんとか残すことができないものか、会を立ち上げ方を練ったり自治体に働きかける活動をしています。



代表取締役社長 宮崎敏明
TOSHIAKI MIYAZAKI

1971年愛知県出身。1993年国士舘大学法学部卒業。同年御園座に入社。2006年営業部営業一課長、2009年取締役営業統括部長、2010年取締役総務人事部長、2013年当社取締役兼営業本部長、2015年常務取締役兼営業本部長。2018年より現職。

この活動を通じ、エンターテインメントが社会や地域に対してどんな貢献ができるのか、具体的な方法を考え実行する機会も増えました。

——舞台芸術業界が横の繋がりをネットワークを持つことについての利点など意識なさることはありますか。

これまで舞台芸術業界内での横の繋がりについてあまり強く意識することはなかったのですが、緊急事態舞台芸術ネットワークが立ち上がったことをきっかけに、コロナ関連以外にも地方の劇場と密に連絡を取り合うようになりました。特に線状降水帯や台風などの自然災害時や公共交通機関の計画運休の際など、当日の公演実施の有無を他の地域の劇場と確認し合えることは大変心強いです。また、自社の広告戦略の方法などをシェアさせていただくこともあります。具体的には劇場に企業名が入った提灯を掲示する“提灯広告”なのですが、他の劇場さんも取り入れてくださったようで、チケットやグッズ販売とは異なる形で利益を生み出す方法を業界内で共有できるのも横の繋がりが生まれているからこそだと思います。

——舞台芸術業界の今後における取り組みなどありましたら教えてください。

御園座は、なるべく多くの方に劇場に足を運んでいただきたい、実際に生の舞台を体験してほしいという強い思いから、座席のカテゴリーやチケット料金を細かく分ける取り組みを試験的に実施しております。たとえばコロナ禍に歌舞伎や超歌舞伎の公演で1,000円と2,000円の席種を設けたところ、当該チケットは両公演とも即日完売になりました。映画より安いチケット代で生の舞台を観たお客様が演劇に興味を持ち、別の作品にまた足を運んでくださるようになれば素晴らしいことだと思います。舞台芸術は限られた一部の人だけのものでなく、誰にでも開かれているというのが私の信念です。

[取材日:2023年11月21日 取材・文:上村由紀子]

株 式 会 社 梅 田 芸 術 劇 場

大阪市北区に本社を置く梅田芸術劇場はメインホールとシアター・ドラマシティの2つの劇場を運営。

海外ミュージカルや翻訳劇、宝塚歌劇団卒業生(以下宝塚OG)を中心とした舞台、コンサートなどさまざまなジャンルの自主制作公演に加え、宝塚歌劇団出身者のマネジメント等も手掛ける。

また、近年では英国の劇場と舞台の共同制作なども積極的に実施。今回は公演プロデューサーの草地研吾氏に話を伺った。



撮影:岸 隆子(Studio Elenish)

対象公演 ミュージカル『SUNNY』
2023年6月26日～7月5日 東京都豊島区 東京建物Brillia HALL

学生時代に観た薪能に衝撃

—今のお仕事について教えていただけますか。

もとは違う業界で仕事をしていたのですが、2004年の梅田芸術劇場設立とともに入社し、現在はおもに宝塚OGが中心となり出演する舞台の製作をしています。

—草地さんにとって忘れられない舞台作品って何でしょう？

大学時代に観た薪能の『船弁慶』です。巨大な照明を天に向け、しずくの音をBGMとしてスピーカーから流す演出に感動しました。また、能楽の特徴である“序破急”を体感し、舞台上の熱量が終盤に向かって最高潮になっていく様子に胸打たれたことを覚えています。さらに、この時の出演者は地元の皆さんで、著名な演者に頼らなくとも作品内容と演出の力で人の心を動かせるのだと実感できたことが今の仕事に就く原動力ともなりました。

—舞台芸術の世界でご自身にとって印象的な出会いなどあればぜひ。

梅芸入社当時、愛知万博のショー制作に携わる機会があり、そこから何度かご一緒させて頂いた俳優の鳳蘭さんです。2曲続けて歌唱する際に、一回転するだけですべての世界観をガラッと

変えてしまう表現力の凄まじさを間近で拝見し胸が震えました。今でもその体験が宝塚OG公演を企画するモチベーションのひとつになっています。

客席の声援で5類移行を実感

—ミュージカル『SUNNY』はコロナが2類から5類に移行してからの公演でした。

『SUNNY』はコロナの5類移行後、初めて梅芸が上演した作品です。稽古の進行でいえば、まず、それまで定期的実施していたPCR検査はなくなりましたが、手洗いと消毒を含め、激しい振付の稽古時以外はキャストにもマスクを着用してもらうといった対策は続けました。長く続くインフルエンザの流行も心配ですので、手洗い、消毒、マスクの3点はこれからも続けていく必要があると感じています。

この作品は80年代のJ-POPが散りばめられていて、中でもラストの『ダンシング・ヒーロー』は大変盛り上がるナンバーです。コロナが5類になったことで客席でも声を出せるようになり、お客様の声援が舞台に届き、それを受けた俳優たちのパワーが増大する様子を客席の一番後ろで観ている「ああ、やっとこの光景を見られるようになったんやなあ」と何とも言えない感慨がありました。

—舞台芸術と社会の関わりについてお仕事の中でどんな点を意識なさっていますか？

需要と供給のバランスです。たとえばスーパーなど小売りの世界でもそうですが、商品を供給する側はお客様が何を欲しているのか必死で考えてビジネスに挑んでいます。舞台芸術の世界でもお客様の需要をさらに吟味し、2年先、3年先の作品の企画・立案をしていく必要があると考えます。また、観劇やライブ鑑賞は習慣でもありますから、制作側からどのようなテーマの作品をご案内すれば舞台芸術未体験の方にも劇場に来ていただけるのか、アイデアを出し実行していくことが業界全体の課題であると捉えています。

—同業他社・他団体との協働で何かアイデアなどありましたら教えてください。

これまで観劇に強い興味をお持ちでなかった方に向けて、複数の主催団体を巻き込んだ“劇場に行ってみよう”的なイベントの実施です。劇場周辺に有名シェフが監修したメニューを出すキッチンカーを呼んだり、劇場内で演出家や振付家のトークを聴いていただいたりすることもそうですし、劇場を使って館内で謎解きイベントのようなことを楽しんでいただければ、そのイベントと連動させた作品のPRやチケットの販売等も可能になるのでは、と思っています。

舞台以外の経験を大切に

—コロナ禍を機に舞台作品の配信数が増えました。今後の展望をどうお考えでしょう。

どんな年代でもどこにお住まいでもご自宅で作品をご覧いただけるのはとても良いことだと思います。その前提がありつつ、コロナが5類になり、劇場にお客様がお戻りになる流れの中で、配信作品の中にはビジネスとして収支のバランスが取りにくいものも出てきました。舞台作品の配信にはかなりのコストもかかりますので、今後は配信する作品の選定がシビアになっていくと思

ます。ただ、配信というのはノウハウの積み重ねでもありますので、ここで一気に縮小するとせっかく蓄積してきたノウハウも消えてしまいますし、委託している業者さん側の事情もあります。このあたりのバランスが主催者側にとってはジレンマです。ライブ配信は入院中や自宅療養で外出できない時などは貴重な観劇手法ですし、たった1日だけのコンサートなど公演回数が少ない作品では多くの方の視聴も可能になり非常に効果的です。一方で「生の舞台」には私のようにたった1回観ただけで人生に影響を与える感動力があります。ですので「生の舞台」を観るために自ら出向くことは人生をより豊かにする糧だと信じています。また、観劇は単なる外出ではなく、お洒落して出かける楽しみ、食事や会話なども含めた非日常感を味わえる恰好のイベントですから、もっと日本に根付いてほしいと心から願っています。観劇文化の広がりや作品制作の質と多様性は正比例するはずですが、

—舞台芸術業界での横の繋がり・ネットワークを持つことについて何か思いはありますか？

この業界の勤務時間は固定された時間枠ではなく流動的で、どうしても労働環境は厳しめで離職率は低くありません。コロナ禍でできた同業他社との横のネットワークをさらに拡充させ、現状を改善していくことは業界にとってのより良き未来に繋がることだと考えています。

—舞台芸術業界で働くことを目指す人へのアドバイスなどありましたらぜひ。

これは年齢に限りませんが、舞台以外の世界をたくさん見て経験してほしいと思います。読書や映画鑑賞、スポーツ、一人旅……何でも良いのですが、演劇やミュージカルとは異なる世界を経験し、それでも舞台芸術の世界が好きだ、この業界で働きたいと思ってくださったらぜひ門を叩いていただきたいです。演劇やミュージカルが好きという気持ちは大切ですが、より多くの経験をしてきた人からさまざまな発想が生まれる世界であると自身の経験から実感しています。



企画営業部部长 草地研吾
KENGO KUSACHI

阪急グループの催事企画会社にて三重県「世界祝祭博覧会まつり博」パビリオン運営、佐賀県「世界・焔の博覧会」常設レビューチームの企画制作運営などに携わる。その後2005年発足の梅田芸術劇場へ移籍。同年開催の愛知県「愛・地球博」にて宝塚OGレビュー『虹と夢と愛と』を企画制作運営、以降プロデューサーとして現在に至る。主な制作作品『DREAM FOREVER』『ティーチャーズ』『DANCE LEGEND Vol.1 BAD GIRLS meets BAD BOYS』『Vol.2 Argentango』『セレブレーション100! 宝塚』『PUKUL』など。

[取材日:2023年10月23日 取材・文:上村由紀子]

株 式 会 社 新 歌 舞 伎 座

大阪歌舞伎座の新築柿落としが行われたのは1932年。1966年に株式会社として設立し、歌舞伎、演劇、ミュージカル、時代劇、歌謡ショー、歌手などを中止に据えた座長公演など数多くの興行を実施。2010年に難波から天王寺区に移転し、大阪の賑わいを盛り上げている文化拠点だ。幅広い舞台公演を担う本社には様々な制作者が集う。

異業種また営業職からの転職というキャリアを持つプロデューサーの碓井匡和氏に舞台制作の仕事について伺った。



『隠し岩の三悪人』

梅沢富美男劇団 梅沢富美男・水森かおり 特別公演

対象公演
『隠し岩の三悪人』
2023年8月24日～27日 大阪市天王寺区 新歌舞伎座
梅沢富美男劇団 梅沢富美男・水森かおり 特別公演
2023年11月17日～30日 大阪市天王寺区 新歌舞伎座

社内のメンバーから多くを学ぶ

——舞台の仕事をする上で転職となった出会いはありますか？
明確に転職となった出会いはないかもしれませんが、私としてはいくつかのターニングポイントがありました。私はもともと異業種で営業として働いていたのですが、転職を考えていた時にたまたま新歌舞伎座の営業職の募集を見つけました。それまで観劇体験は多い方ではなく、演劇とは縁遠い人生だったものの、どこか面白そうだなと心が動いて、そのまま入社をしたんですね。そこで16年ほど営業畑の仕事をして、そろそろ別のフィールドに挑戦したいなと思っている頃に、制作の仕事に異動する機会に恵まれました。趣味で音楽バンドをやっている、ゼロからものを生み出す面白さを知っていたこともあり、仕事でももの作りに関わりたかったのです。以来、10年ほど制作の現場に関わっています。
私が入社するまでは、営業経験のある演劇制作者はこれまで弊社にはほとんどいませんでした。作り手側の意見だけで作っていくと、どうしても自己満足になってしまう部分が出てくる

と思うのですが、実際に営業をしていた立場からの意見や見方を制作段階で伝えることで円滑に進むことがあります。私自身、これまでの営業経験は決して無駄ではなかったと感じています。

——業界内に尊敬する先輩はいますか？
先輩後輩関係なく、弊社の制作メンバーそれぞれに尊敬の念を抱いています。というのも、弊社の制作メンバーはとても個性が豊かで、性格も得意分野もバラバラですが「面白い演劇を作る」という点には貪欲で、汗水流して働いているんですね。各々の仕事に対する取り組み方から学ぶことは多いです。

感染予防策が習慣化している

——対象公演についての観客の反応はいかがでしたか？実施したコロナ感染予防策も合わせて教えてください。
『梅沢富美男劇団 梅沢富美男・水森かおり 特別公演』は3部構成で、芝居も歌謡も舞踊も楽しめる公演でしたから、お客様にもかなり喜んでいただけたと思っています。

コロナの感染予防策については、5類に移行してから弊社は基本的にマスクの着用や検温の実施などを個人の判断に委ねてきました。一時期のような張り詰めた緊張感はなく、いろいろと緩和されてきたと思います。ただ、出演者やスタッフはこれまでの感染予防策が習慣づいている上、「公演を中止にしたくない」という思いが強く、自主的にマスクを着用したり、こまめに手指消毒をしたりしてくださっていましたね。5類に移行したからと言ってコロナが完全になくなったわけではないですし、お客様も引き続きマスクをされている方が多かった印象があります。

——舞台芸術と社会の関わりについて、どんなふうを考えていらっしゃるでしょう。

気軽に映像作品を見ることができるサブスクリプションサービスなど娯楽のコンテンツが多様化している中で、追い討ちをかけるようにコロナ禍というパンデミックが起き、劇場に足を運ぶ人が少なくなっていました。また、近年のチケット代の高騰もあって、観劇に回すお金が減っているのかもしれませんが。そうした状況の中で、我々に何ができるか。それはやはり「生の舞台で観たい」としてもらえるような作品を作り続けることに他ならないと思って日々取り組んでいます。

「好き」を見つけてほしい

——オンライン配信のほかAIやNFTなど、デジタル技術の進歩が目覚ましい時代ですが、それらは舞台芸術にどんな影響をもたらすとお考えですか？

弊社としてはオンライン配信に力をあまり入れてきませんでした。その理由は、やはり演劇を生で観てほしいと思うからです。配信をすることで、今まで劇場に足を運んだことがないお客様が「今度は生で舞台を観てみたい」と思ってくださって、

新たな客層を広げる可能性は確かにありますが、配信公演そのものが生の舞台の価値を上回ることは考えづらいと思います。そもそも作り手側としても生の舞台にこそ価値ややりがいを見出しているわけですから、配信公演のみで満足感を得られるとも思えません。

そのほかのデジタル技術については、活かせるものがあれば活かしていきたいという思いはあるものの、技術の進歩は目覚しく、我々が全てを追いきれない速度で進歩していますよね。もしかしたら将来的にAIが脚本を書いた演劇などが誕生するのかもしれませんが、それはそれで面白い展開になるのかもしれませんが、私は人でしかできないことが絶対にあると信じています。人が作るからこそ演劇は面白いので、デジタル技術とは程よいバランスで付き合っていこうと思っています。

——今後の目標をぜひ聞かせてください。

娯楽コンテンツの多様化やコロナ禍などによって、劇場に足を運ぶ人が少なくなっている今、業界としては踏ん張り時だと思っています。このまま先細りの一途をたどってはいけません。例えば、弊社はこれまで年配のお客様向けの作品が多かったのですが、最近は若年層向けの作品にも力を入れており、若い人でも年配の方でも幅広い年代が楽しめる劇場づくりを目指しています。社内外で情報交換をしたり協力したりしながら、業界を盛り上げていくことが目下の目標ですね。

——最後に、これから舞台芸術業界を担っていく方への思いをお聞かせください。

これから舞台芸術業界を担う方に対しては、ありきたりかもしれませんが、ぜひ「好き」を見つけてほしいと思います。嫌なことを嫌々やっても良いものは生まれません。皆さんそれぞれが「好き」を大切にしてくれたら、もっとこの業界は面白くなるし、盛り上がっていく気がしています。



興行部 制作課 課長
プロデューサー
碓井匡和 MASAKAZU USUI

1974年大阪府岬町生まれ。1997年近畿大学工学部建築学科卒業。1998年12月株式会社新歌舞伎座入社。入社後16年営業を経て、制作に異動。2014年5月『坂本冬美特別公演』以降、前川清、藤山直美、舟木一夫、梅沢富美男、天童よしみ、島津亜矢、水森かおり、三山ひろしら、多くの座長公演を手掛ける。

[取材日:2023年12月12日 取材・文:五月女菜穂]

株 式 会 社 東 急 文 化 村

株式会社東急文化村は渋谷に拠点を置く3つの文化施設、Bunkamura、東急シアターオーブ、セルリアンタワー能楽堂を運営。1989年開館のBunkamuraはコンサート、演劇、映画、展覧会など様々なカルチャーを世に送り出し、2027年度中まで体館中(オーチャードホール除く)の現在も多彩な企画を手掛ける。舞台芸術事業部にて演劇を担当する石井おり絵氏に演劇制作への思いなどを伺った。



撮影:細野晋司

対象公演 COCOON PRODUCTION 2023
『ガラパコスパコス～進化してんのかしてないのか～』
2023年9月10日～24日 東京都世田谷区 世田谷パブリックシアター

公共劇場勤務時代に得た視点

——舞台の仕事に就こうと思ったきっかけを教えてください。
子どものころからお楽しみ会などでお芝居を作るのが好きで、高校時代は高校演劇の世界にどっぷり浸かっていました。その当時から何となく演劇の仕事をしたと思うようになり、日本大学芸術学部を卒業後、研究室勤務やいくつかの舞台関連の職場を経て今に至った次第です。

——演劇と社会との関わりについてどんなふうに意識してきましたか？
大学時代には演劇を社会でどう生かすかといった授業もあり勉強もしましたが、私自身が演劇の王道はエンタメだと考えていたこともあり、当時は舞台芸術と社会の関わりについてそこまで深く意識したことはなかったように思います。その後、彩の国さいたま芸術劇場で舞台制作の仕事に就いた時に、公共劇場の制作という立場上、どうすれば劇場を基点に地域の活性化ができるのか、地域の皆さんと一緒に何をすれば地元に戻元ができるのかということ突き詰めて考えるようになりました。特に芸術監督をなさっていた蜷川幸雄さんが立ち上げた「さいたまゴールド・シアター」との出会いは自

分が演劇と社会とのかかわりを考えるうえでとても大きな出来事だったと思います。

——対象公演の『ガラパコスパコス～進化してんのかしてないのか～』はコロナの扱いが2類から5類に移行して4か月後の上演でした。
5類移行に伴い、それまで定期的実施していたPCR検査などの回数も減らし、稽古中の出演者のマスク着用は任意としました。スタッフは稽古場に入る際はマスク着用を推奨、消毒や換気などの対策は継続しておこない、体調不良を感じた人はそれぞれの判断で、マスクを着用したり休養したり病院で検査をしたりという形をとりながら稽古を進めていきました。

同世代の舞台制作者と話したい

——舞台芸術業界での横の繋がり・ネットワークを持つことについてお考えなどあればぜひ。
私は緊急事態舞台芸術ネットワークの会合などに出席する機会はまだないのですが、業界の錚々たる方たちがアベンジャーズのように一堂に会し、さまざまな問題を共有しながらそれらを解決しようと話し合う今の状況は奇跡的だと感じます。これ

までの演劇界にはたとえば公共と民間、大手と中規模、小劇場など、薄い壁のようなものが存在する印象もありましたから。そういう枠が取り払われて、規模や事業形態にかかわらず、業界全体でさまざまなことをシェアしていくのは未来に向けてとても良いことだと思います。

——石井さんご自身は同業他社・他団体とどんなことをやってみたいと思いますか？

事業にすぐ結びつく話ではないのですが、自分と同世代の制作者たちが、今、どんなことを思って舞台制作の現場にいるのかそれぞれの話を聞いてみたいです。言ってみれば、我々はちょうど中間管理職の年代なので(笑)。

未来への記録としての舞台映像

——コロナ禍で演劇やミュージカルのオンライン配信が増えました。今後の展望などあればお聞かせください。

東急文化村では演劇に限らず音楽、映画、美術、関連イベントなど、さまざまなコンテンツを「Bunkamura ストリーミング」で配信していますし、コロナ禍をきっかけに文化芸術作品をデジタル配信することに対して業界全体にポジティブな変化が起きているとの実感もあります。ですので、今後も配信をすることにより、良い効果が期待できる作品については積極的にシステムを活用していければと考えています。ただ、演劇やミュージカルなどの舞台作品は著作権や内容の問題で配信が難しいものもあり、特に劇中で使用される楽曲の権利関係のハードルの高さは制作側としても悩みどころのひとつです。また、実際に配信し、すぐお客様に観ていただくものとは別の考えとして、舞台作品を高クオリティの映像で記録し、未来へのアーカイブとして残すことの重要性を社内で話し合う機会が増えました。これはコロナ禍でのひとつの変化だととらえています。

個人的には、2020年7月に初めてシアターコクーンからのライブ配信を実施した『プレイタイム』は、出演者に加え、ふだん見ることができない舞台裏や機構など劇場そのものを主役に置いて、コロナ禍に眠っている劇場が再び動き出していく様子を描くことで、「劇場は生きている」ということを多くの方に知ってもらい意味でも非常に良い試みだったと考えています。

——コロナ禍を経て他に大きく変わったと実感なさっていることなどありますか？

2020年からの約3年間で、お客様も我々も劇場や観劇に対する意識が一旦リセットされたといっているレベルで変化した気がします。劇場に足を運んでくださる方の数はコロナ禍前に比べてやはり減少している実感もありますし、どうやったら以前のように「ちょっとおもしろそうだから観てみようかな」と多くの方が気軽に観劇に気持ちに向けてくださるのか、宣伝等を含め現場では試行錯誤の日々が続いています。なにより先ずは、リアルで観劇していただきたいですから。

——演劇制作の仕事をするうえで何が一番大切だとお考えでしょう。

とにかく、演劇を好きであるとの思いがもっとも大切ではないでしょうか。体力的にも精神的にもなかなか大変な世界ですし、世の中には他にも様々な職業が山ほどありますので(笑)。でも、自分が携わった舞台作品が世に出た時に、それを観て何かを受け取ってくださる方がいるのはとても嬉しいですし、制作としてひとつの作品が作られる過程に最初から関わっていけるのは大きな喜びです。私自身、この仕事を辞めたいと思ったことは何度もあるのですが(笑)、今も続けているのはやはり好きだからだと思います。だからこそ、若い世代の人たちが舞台制作を職業として前向きに継続していけるよう、自分が今やれることを考えていきたいです。



企画制作部 第二企画制作室
マネジャー 演劇担当
石井おり絵 ORIE ISHII
東京都出身。日本大学芸術学部卒業後、研究室に勤務。その後、映像・舞台関連会社、2009年より彩の国さいたま芸術劇場で演劇の制作を担当。主に「さいたまネクスト・シアター」の立ち上げ・公演、「さいたまゴールド・シアター」公演に携わる。2017年に株式会社東急文化村入社。舞台芸術事業部に所属し、演劇の企画制作業務に従事する。

[取材日:2023年11月9日 取材・文:上村由紀子]

株式会社ネルケプランニング

1994年設立の株式会社ネルケプランニングは様々な舞台の制作などを手掛けてきたが、なかでも2.5次元ミュージカルのリーディングカンパニーとして数多くの漫画、アニメ、ゲームを舞台化し、演劇界において2.5次元ミュージカル作品を一大ムーブメントに押し上げた。2016年に野上祥子氏が代表取締役社長に就任し、さらなる前進を続けている。その野上氏に企業として創作にかける思いを伺った。



神戸セーラーボーイズ 定期公演 vol.1 『ロミオとジュリアス』『Water me! ~我らが水を求めて~』 ©kobesb



ライブ・スペクタクル「NARUTO-ナルト-」~忍の生きる道~
©岸本斉史 スコット/集英社
©ライブ・スペクタクル「NARUTO-ナルト-」製作委員会2023

ライブ・スペクタクル「NARUTO-ナルト-」~忍の生きる道~
2023年10月8日~11日 神奈川県横浜市中区 KAAT 神奈川芸術劇場〈ホール〉
対象公演 2023年10月18日~22日 兵庫県神戸市中央区 AiiA 2.5 Theater Kobe
神戸セーラーボーイズ 定期公演 vol.1『ロミオとジュリアス』『Water me! ~我らが水を求めて~』
2023年11月17日~26日 兵庫県神戸市中央区 AiiA 2.5 Theater Kobe

いつも心に原作リスペクトを

—いつから演劇に興味をお持ちだったんですか？
小6の時の学芸会で演じる楽しさに目覚めて、それから高校までずっと演劇部。最初は女優志望でした。中でも劇団カムカムミニキーナが大好きで、大学に入ったタイミングで門を叩いたのですが、当時、役者はもういっぱい、「制作だったらいいよ」と声を掛けていただきました。それが、私のエンタメ人生の始まりでした。

—2023年5月よりコロナが5類感染症に移行しました。コロナによって演劇界は動員に大きな打撃を被りましたが、回復の兆しは感じますか？
徐々に戻ってきてはいますが、完璧に戻ってきたとは言えないと思います。ライブエンタメを楽しむ高揚感がコロナによ

てぶつんと消えてしまって、それまでひとつの演目を数回は観ていたのが、今は1回でいいかなというように、以前より劇場に足を運ぶ回数が減っているような気がします。その影響は強く感じています。

—そんな現状に対し、どのように向き合っていこうと考えていますか？
粛々と良い作品を丁寧につくる。これに尽きると思います。それを改めて実感させてくれたのが、2023年にファイナルを迎えたライブ・スペクタクル「NARUTO-ナルト-」(以下、舞台「NARUTO」)でした。漫画を原作とした2.5次元ミュージカル作品は数多くありますが、原作の1巻から最終巻まで完結させるのはすごく難しいことです。舞台「NARUTO」がそれを実現できたのは、脚本・演出の児玉明子さんの力はもちろん、製作委員会としてアニメ版を担当しているテレビ東

京さんやびえろさんも参加してくださったことが大きいと思います。脚本開発の段階からアニメチームがミーティングに参加し、一緒になって道筋を考えてくださった。原作が多様なメディアミックスを展開している以上、いろんな立場の意見を取り入れることが大事。それらを掛け合わせることで、演劇は真の総合芸術になり得ます。舞台「NARUTO」はその好例です。私たちは、原作をお預かりする立場ですから、原作にリスペクトを払い、原作ファンと同じくらい原作を愛し、一つひとつ腑に落としながら作っていくことが大事なのだと再認識しましたね。

地方のクリエイターを支援する

—貴社では、2023年4月より「神戸セーラーボーイズ」という演劇ユニットも立ち上げました。
これまでネルケは東京を拠点に活動してきましたが、地方にも素晴らしい劇場、演者、スタッフがいます。そんな方々と一緒に仕事がしたいという思いがずっとありました。そこで、関西発信のエンターテインメントとして立ち上げたのが「神戸セーラーボーイズ」です。お客様の中にも東京まで遠征には行けないけれど、神戸なら足を運べる方もたくさんいらっしゃると思うんです。そんな方たちが楽しめる演劇を作りたいという思いを込めて、少しずつですが公演を重ねているところです。

—以前は「KYOTO SAMURAI BOYS」もプロデュースしていました。東京以外の演劇関係者の雇用創出や、演劇文化の醸成への高い関心が？
それはずっと考えています。私自身、関西演劇祭のスペシャルサポーターをやらせていただいて、関西小劇場の素晴らしさに泣くほど感動しました。関西だけでなく、北海道にも沖縄にもいい劇団はたくさんあります。地域を盛り上げるために活動しているクリエイターたちを支援したいという気持ちは強いですね。



代表取締役社長 野上祥子
SHOKO NOGAMI

株式会社ネルケプランニング代表取締役社長。1998年株式会社ネルケプランニングに入社。以降、同社制作のすべての舞台、およびTVアニメやイベントなど、多岐にわたるキャスティングを担い、幅広い作品制作に貢献。2016年7月に同社社長に就任。プロデューサーとして、2.5次元ミュージカルを中心に、様々なジャンルで作品を生み出している。現在はファミリー層に向けたWelcome Kids Projectを立ち上げ、新たなチャレンジを続けている。

—では、プロデューサー陣が小劇場に直接足を運ぶことも？
プロデューサーに限らず、どの社員にも小劇場を含めた様々な舞台作品を観てほしいと推奨はしています。やっぱり自分でお金を払って、客席に座って体感することは重要だし、それによって私たちが何を大切にしながら作品をつくっていけばいいのが見えてくる。とても学びが多いので、東京に限らず、あらゆる地方の舞台を応援していきたいです。

デジタルと演劇のシナジー

—コロナの影響によってオンライン配信も広まりました。
オンライン配信のデメリットとして、直接劇場に足を運ぶ人が減ったという側面はあると思います。ただ、この点について私は選択肢が増えたと捉えています。家で気楽に観たいときもあれば、推しを生で見たいときもある。自分の気分に合わせて楽しみ方が選べて、しかも介護や育児で自由に外出できない方にとっては、家にいながら演劇に触れることができる。デメリットもあるけれど、最終的には演劇界にとってもお客様にとってもメリットなのではないかと考えています。

—AIやNFTといったデジタル技術への取り組みはいかがでしょう？
私たちネルケはフィジカル重視の熱量勝負の集まり(笑)。デジタルは最も弱い分野です。それでも、演劇の裾野を広げるためには、デジタルの力は欠かせない。そこで、2023年6月よりサイバーエージェントグループに参画しました。ライブコンテンツとデジタルのシナジーについて教を乞いながら探求していきたいと考えています。私なんていまだにTikTokなどのSNSの楽しみ方に戸惑うアナログ人間。でも、娘はやっぱり夢中なんですね。そこに対して、「自分にはわからない」という態度をとってはいけません。楽しんでいる人がいる限り、何かしら価値がある。その価値を拾い上げ、新しい演劇の可能性に繋げていければと思っています。

[取材日:2023年11月30日 取材・文:横川良明]

株式会社ホリプロ

株式会社ホリプロは、マネージメントのほか音楽、映画、テレビ番組などの企画・制作、文化施設経営など幅広くエンターテインメント事業を手掛けている。そのなかで舞台公演においては、故・蜷川幸雄氏の演出舞台の海外公演を多く実施してきた。海外大型ミュージカルの上演にも力を入れ、対象公演であるミュージカル『スリル・ミー』は2011年の日本初演から何度も再演され続けている人気公演だ。担当する富永美帆氏にお話を伺った。



『スリル・ミー』 撮影：田中亜紀

対象公演
ミュージカル『スリル・ミー』
2023年10月21日～22日 群馬県高崎市 高崎芸術劇場スタジオシアター
『ねじまき鳥クロニクル』
2023年12月1日～3日 大阪市北区 梅田芸術劇場シアター・ドラマシティ
2023年12月16日～17日 愛知県刈谷市 刈谷市総合文化センター アイリス 大ホール

紆余曲折を経て舞台制作の道へ

——富永さんの演劇人生に影響を与えた舞台は何ですか？
2017年からホリプロで舞台制作の仕事をしていますが、ここに来るまで紆余曲折がありました。最初のきっかけはドラマ『それが答えだ！』（1997年）。藤原竜也さんの演技が印象的で、彼のことを調べてみると、蜷川幸雄さん演出の舞台『身毒丸』に抜擢されたことを知り、舞台芸術に興味を持ちました。当時は中学生で観劇に行くお金もなかったのですが、大学生になって自分で稼いだお金を観劇に使えるようになり、藤原さんと市村正親さんの『ライフ・イン・ザ・シアター』（2006年）で観劇デビュー。以来、観劇にのめり込んでいきます。
一方で、教師になるべく大学で勉強をしていたものの、自分には向いていないと気づき、就職活動の過程で「舞台に携わる仕事をしたい」と方向転換しました。しかし就活は思うようにはいかず、タレントのマネージャーとしてキャリアをスタートさせました。4年ほど続けて、たまたま銀河劇場の募集があったので、会社を辞めて応募したのですが、残念ながらその時は決まらず。仕方なく医療系の仕事を2年弱続けている間に、今度は、先の

銀河劇場からオファーが舞い込んできて、ようやく舞台制作の仕事に就くことができました。そこで2年ほど働き、ホリプロが銀河劇場を手放すタイミングで進路を選ばせてもらったので、舞台制作を続ける事ができるホリプロを選び、今に至ります。

——舞台の仕事をするうえで転機となった出会いは？
観劇を始めてから蜷川幸雄さん演出の舞台は欠かさず観てきました。いつか一緒にいたいと思ってきましたが、蜷川さんが2016年に亡くなり、その夢は叶いませんでした。ただ、蜷川さんの遺志を引き継いだ吉田鋼太郎さんが芸術監督を務める「彩の国シェイクスピア・シリーズ2nd」に携わることが決まり、不思議なご縁を感じています。

遠征やリピートのお客様も

——対象公演について、観客の反応や実施した感染予防対策などを教えてください。
『スリル・ミー』はキャストが2人だけのミュージカルで、今回は3ペアが作品に挑みました。今では作品ファンのお客様がたく

さんいらっしゃるのですが、社内からは「チケットが売れて当たり前」というプレッシャーがありました。チケットの売れ行きは大変好調でした。SNSを見ているとポジティブな投稿も多かったですし、同じペアをリピート観劇したり、違うペアを見比べたりと何回も劇場に足を運んでくださるお客様も見受けられました。対象となる群馬公演は大千穂楽でしたので、東京などから駆けつけたファンもいるほどの盛況ぶりでした。
新型コロナウイルスの感染法上の位置付けが5類に移行してからは、弊社としてはマスクの着用を任意としています。ただ、稽古場では靴の履き替え、消毒液の設置、手洗いうがいの推奨、毎日の検温、ケータリングの簡素化といった施策を続けてきました。世の中の緊張が緩和されたとはいえ、公演中止のリスクがある以上、できる限りのことはしておきたいと考えていました。なお、チケットがなかなか入手できない公演だったので「公演を絶対に止めたくない」と思ってくださるお客様も多かったのか、マスクを着用されているお客様が他の公演よりも多かったと感じましたね。

——舞台芸術と社会の関わりについて思うことはありますか？
観劇体験がお客様にとっての人生の糧になり、人生を変えるほどの感動を与えたい。これは舞台を作る時にいつも意識していることです。「社会」というと大きな話になってしましますが、目の前の一人ひとりのことに思いを寄せるようにしています。

公演配信は今後増加するのでは

——横の繋がりを持つことについて期待することはありますか？
舞台の制作としては絶対的な正解がありませんし、各社それぞれの方針やカラーがあると思うのですが、時々「他社はこうしているよ」とキャストやスタッフから聞く情報は参考になります。私達が悩んでいることはきっと他社さんも悩んでいることですから、気軽な情報交換や悩みの共有ができるといいですね。

日本では子どもの時から演劇に触れる機会が少なく、自分で興味を持たないと観劇に訪れないですよね。どうしたら多くの人が演劇に興味を持ってくれるのか、劇場に足を運んでくれるのか。ホリプロでは観劇のスタンプラリーを実施したり、観劇数に応じた特典をつけたりしたこともあったのですが、例えばそういったお客様を育てる施策や企画が、会社の垣根を越えてできたらと個人的に思っています。

——オンライン配信やAI、NFTなど、デジタル技術の進歩が目覚ましい昨今。舞台芸術にもたらす展望についてはどう思われますか？

私自身、舞台は生で観たい人間なので、オンライン配信については懐疑的だったのですが「劇場では観られなかったけど、配信があるなら観たい」という方や「劇場でも観て、配信でも観たい」という方が一定数いるんですね。一つひとつの場面や表情を細かく観ることができるのでより作品に没入できるという声もいただきますし、収益の面でも大きな支えになるので、配信は今後も増えていくでしょう。
デジタル技術の発展が目覚ましいので、それぞれの技術の活かし方まで勉強できていないのですが、例えば、チケットの販売でAIが活かせるいいなと思います。弊社のチケットセンターはやはり忙しそうですし、最終的には人の目を通すかもしれませんが、効率的な作業のためにAIを活かす未来があるのかもしれないですね。

——これから舞台芸術業界を担っていく方への思いを聞かせてください。

どんなことでも強い思いを持つことが大事です。強い思いがあれば、自然と風向きが変わってくるし、いつか願いは叶はず。私も随分遠回りをしましたが、やはり強い思いがあったから、この仕事に就けたのだと思います。



公演事業本部 ファクトリー部 富永美帆
MIHO TOMINAGA

埼玉県出身。青山学院大学文学部英米文学科を卒業後、株式会社ワタナベエンターテインメントに入社しタレントのマネージメント業務を担当。2014年の株式会社銀河劇場への転職を機に舞台制作の仕事に就き、2017年より株式会社ホリプロに在籍。これまでの担当作品は、『スリル・ミー』『市村座』『スクルージ〜クリスマス・キャロル〜』『ピーター・パン』など。2024年5月公演、彩の国シェイクスピア・シリーズ 2nd Vol.1『ハムレット』を制作中。

[取材日：2023年11月1日 取材・文：五月女菜穂]

株式会社サンライズプロモーション大阪

キョードー関西グループは、1969年以降関西を中心に様々なエンターテインメントの主催・企画・制作・宣伝・運営を手掛けてきた。また近年、森ノ宮ビロティホールの指定管理や東大阪市文化創造館の運営にも携わっている。その中で、サンライズプロモーション大阪は、主に演劇、ミュージカル、古典芸能等を取り扱う。池長彩也氏は入社後、多岐にわたるジャンルの舞台に携わってきた。その視点から、舞台芸術業界のこれからについて伺った。



撮影：飯田徹

対象公演 十三代目 市川團十郎白猿襲名披露巡業
2023年10月21日 奈良県奈良市 なら100年会館

仕事を通じて演劇に魅せられて

——記憶に残る舞台作品はありますか？

私は音楽の仕事に携わりたく入社したのですが、2年目の時に偶然にも舞台の部署に配属になりました。正直、配属まで演劇とは縁遠い生活でしたが、三谷幸喜さん(作・演出)の『国民の学校』や蜷川幸雄さん(演出、作：清水邦夫)の『血の婚礼』等、入社後観劇させて頂き、圧倒的な熱量と多様な心情や価値観が描かれる世界を魅力的に感じるようになりました。特に印象に残っている作品はトム・ストッパードさん(作、演出：栗山民也)の『アルカディア』。ユーモアを交えながら、美しく知的な世界を魅せられて、本当に面白かったです。ロンドン公演に同行させて頂いた『プルートゥ PLUTO』(演出・振付：シディ・ラルビ・シェルカウイ)も印象的です。日本の漫画作品の強さも相まって、日本の演劇が世界で通用するのを体感できました。

——業界の中で尊敬する人はいますか？

私たちは演劇の地方公演を主催として関わらせて頂くことが多く、他社の演劇プロデューサーの皆様と長期間一緒に過ごすことが多いです。そのため、社内の人間以上に、各製作会社

の皆様から演劇界のことだけに留まらず、たくさんのことを教えていただいたなと思います。特に2023年に亡くなった弊社グループ元代表の橋本福治が「お手本にしてください」と、私に対してよくお名前を挙げていたのが、シス・カンパニーの北村明子さん。プロデューサーとしての手腕だけでなく、常に新しいことに目を向け、取り入れる姿勢や行動力、そしてその人柄も魅力でいっぱいです。

5類に移行し、団体販売が復調

——対象公演について、観客の反応や実施した感染予防対策などを教えてください。

十三代目市川團十郎白猿文の襲名披露巡業ということで、地方巡業では珍しい「口上」が行われました。人間国宝の中村梅玉さんが「團十郎さんが歌舞伎界をどんどん盛り上げていってくれるのでは」などと激励されていました。また『毛抜』では、二枚目のイメージが強い團十郎さんが愛らしく愛嬌のあるキャラクターを演じられたので、普段の公演以上にお客様からのリアクションがありました。なかには初めて舞踊公演に足を運んだ方もいらっしゃったかと思いますが、お客様にとっては

新たな文化に触れる貴重な機会になったのではないのでしょうか。新型コロナウイルスの感染対策については、感染者が出たら公演が中止の可能性もあるというリスクや緊張感は持ちつつですが、マスクの着用も任意としました。旅行会社などがまとまった枚数のチケットを買ってくださる「団体販売」がコロナ禍で激減していましたが、2023年5月に感染法の分類が5類へ移行したこと、そして襲名披露公演であることから、団体販売の問合せが復調。また、年配のお客様のご来場もコロナ禍以前のように戻ってきた印象があります。

——舞台芸術と社会の関わりについて思うことを教えてください。

このコロナ禍を振り返ると、社会と舞台芸術の関係性を考えさせられる期間で、舞台芸術は社会の中では“弱い”立場なのだと感じました。緊急事態舞台芸術ネットワークやアートキャラバンといった制度を通じて補助金をいただいたものの、海外のようなパンデミックの最中でも芸術家を守ろうとした手厚い補償制度と比べると、日本の制度は手薄です。5類に移行してからは、公演中止は主催者だけが金銭的な負担をする状況にあり、エンターテインメントの未来を考えてくださるのであればまだまだ支援が必要だと思いました。

デジタル化で際立つ演劇の価値

——横の繋がりを持つことについて期待することはありますか？

演劇界が横の繋がりを持つことについては大きな意義を感じています。社を超えてお話する機会をいただくことがあるのですが、例えば、演劇の情報がまとまったプラットフォームがないことや、演劇を観たことがないお客様に口コミが届きにくい状況などと、各社皆さんが感じている課題は似ています。それらを共有することで次なる改善策も見えてきますし、連携を強化して対策を打つことで、新たなファンの獲得や

業界全体の飛躍に繋がっていきますから。個人的に思い描く未来は、子どもたちが学校で演劇を学んだり、触れたりする機会がもっと増えること。幼い頃から演劇に触れることで、大人になって「観劇をしてみよう」という動機にもなりますし、未来の観客のパイを広げることにもなると思うので、ぜひ横の繋がりを生かして実現できたらと思います。

——オンライン配信やAI、NFTなど、デジタル技術の進歩が目覚ましい昨今。舞台芸術にもたらす展望についてはどうお考えですか？

最近は映像配信サービスが盛り上がるなど、安価で手軽に楽しめるエンタメが増えてきました。だからこそ、生の迫力や覇気、特別感が感じられる舞台に足を運んでもらえるよう、我々もより一層の動きかけが求められていると思います。一方で、舞台作品の配信も一般化してきました。遠方にお住まいでなかなか劇場にいけない方や人気公演でチケットが手に入らなかった方などが配信を心待ちにされていますし、特に2.5次元の舞台で多いと思うのですが、「何度も推しを観たい」というファンのニーズにも応えています。

AIなどのデジタル技術が進歩すればするほど、単純な作業は効率化されていくというメリットがあるし、NFTを活用したチケットの転売防止策も広まったらいいですね。また、逆説的ではありますが、生だからこそ演劇の面白さや良さに気づかされるし、演劇という特殊な技術を持った方々が集まるアナログな世界の価値が高まるのではないかと期待しています。

——これから舞台芸術業界を担っていく方への思いを聞かせてください。

これから業界を担う人に伝えたいことは、歌でもダンスでもデジタル技術でも何でも「やりたい」という強い気持ちがあれば、その思いを活かせる場面や場所がこの業界には必ずあります。課題はありますが、決して未来は暗くない。そう思っています。



ディレクター 池長彩也子
SAYAKO IKENAGA

兵庫県出身。2011年キョードー関西グループ入社。大型公演の団体販売業務を行う部署にて勤務後、2012年現所属サンライズプロモーション大阪に異動。主に関西一円で行われる演劇・ミュージカル・古典芸能の公演の実施に携わる。

株 式 会 社 キ ュ ー ブ

俳優やミュージシャン等のマネジメントのほか、舞台や音楽、映像等の制作も行う株式会社キューブ。
 演劇事業では企画から公演、ツアーまですべてを手掛け、ジャンルも小劇場からミュージカルまで多種多様だ。
 さらに2011年には東京・渋谷に初の運営劇場「CBGKシブゲキ!!」をオープンした。
 取締役副社長の高橋典子氏に、同社に所属するアーティストとの出会いやコロナ禍への思いなどを伺った。



撮影：桜井隆幸

対象公演 ケムリ研究室 no.3『眠くなっちゃった』
 2023年10月26日～29日 兵庫県西宮市 兵庫県立芸術文化センター 阪急 中ホール

才能に出会えたことが転機

——高橋さんの演劇人生に影響を与えた舞台は何ですか？
 記憶にある中で私が最初に観た舞台は、松本幸四郎さんと越路吹雪さん主演のミュージカル『王様と私』でした。父の東京出張の際に家族揃って帝国劇場で観たのですが、煌びやかな世界と子どもにも分かるストーリーに衝撃を受けましたね。後日談として、弊社に所属する春風ひとみの楽屋に、少女時代の彼女が越路さんに抱き上げられている舞台写真を飾ってあったんです。なんと彼女はその舞台で王女役として舞台上に立っていたそうで、またそれが初舞台だったというのです。何かの縁を感じますし、やはり私にとっては特別な舞台だったなと思います。

——舞台の仕事をする上で転機となった出会いはありますか？
 たくさんの方との素敵な出会いがあり、影響を受けました。一つ挙げるとすれば、ケラリーノ・サンドロヴィッチとの出会いです。私の若い頃の活動の場は主に関西だったのですが、それでも当時からKERAの舞台は注目していました。東京での初め

てのプロデューサーとしての仕事は、PARCO 劇場さんとの共同製作の『こどもの一生』だったのですが、当時の私の第一目標は、小劇場で作りあげられた、粗けずりだけれども力があるホン(脚本)を、商業演劇にリメイクしていくことでした。その後、KERAの『SLAPSTICKS』という作品を選んで、2003年にPARCO 劇場で本人の演出でリメイク上演しました。KERAは役者に台詞を語らせながら、稽古のプロセスの中で脚本を書き進めていくという稀有な劇作家、演出家です。その作り上げていく過程が、とてもドラマティックでスリリング(笑)、また作り上げる舞台の想像を上回る仕上がりに毎回驚かされています。彼の才能に出会えたことが私の転機だったと思います。

温かく迎えられるも緊張は続く

——対象公演について、観客の反応や実施した感染予防対策などを教えてください。
 観客の反応はすこぶるよかったです。もともとケラリーノ・サンドロヴィッチは、どういう劇場で劇空間を作るかということに非常に大切にしている劇作家で、関西地区ではしばしばこの

兵庫県立芸術文化センター阪急中ホールを選びます。なので、長年KERAの作品をご覧になっている関西地区のお客様にとっては馴染みのある場所で、劇場スタッフもお客様も大変温かく迎えてくださいました。
 新型コロナウイルスの分類が5類に移行しましたが、我々の心情としてはコロナ禍は明けていませんし、引き続き緊張感を持って製作進行していました。現在でも楽屋の面会は行っておりませんし、キャストやスタッフ同士の食事は我慢しています。とにかく全ステージつつがなく公演できることを、全員で願っています。

ネットワーク設立は評価すべき

——横の繋がりやネットワークを持つことについてどのようにお考えでしょう。同業他社・他団体とどんな協働や、可能性がありうと思いますか？
 コロナ禍はつらいことばかりでしたが、ひとつだけ良かったことは、「緊急事態舞台芸術ネットワーク」という演劇界に横の繋がりが生まれたことですね。2020年2月26日の政府による宣言を受け、NODA・MAPさんや松竹さんや東宝さんなど、演劇関係者数十名が一同に集まり、会社の垣根なく、対応を話し合ったり情報を交換したりした日のことは今でも鮮明に覚えています。コロナ禍を経て今では250団体ほどが加盟する法人組織になりました。継続して開催されている会議やセミナー等は本当に勉強できる場となりました。また、それまで演劇には団体組織がなかったために、例えば政府機関が演劇に関する問い合わせをしたいと思っても、誰に聞いたらいいかわからないという状況だったのですが、その窓口ができたことは大変に評価すべきことだと思います。
 現在はもっと広く議論がなされています。具体的には、日本の演劇を海外に展開するためにはどうしたらいいか？演劇に携わる人の労働状況を改善するには？といった多種多様な

問題が話し合われており、ネットワーク全体が良い方向に進んでいるという実感があります。

——コロナ禍で増えたオンライン配信についてはどう捉えていますか？配信のほかAIやNFTなど、デジタル技術の進歩が舞台芸術にもたらす展望もあわせて教えてください。

オンライン配信は、劇場に足を運んだことのない人にも演劇を知る入り口になったと思います。それ自体が多くの費用が掛かることですが、可能ならやるべきだとは思っています。しかしながらやはり生の演劇作品の魅力を超えるものではないとも思っています。オンラインでのみ演劇を楽しむ観客が、劇場で演劇を楽しむ観客よりも満足するという未来はどうも考えづらいです。LEDライトやムービングライト、プロジェクションマッピングといった技術が出てきた時に、その目新しさに度肝を抜かれたものです。多くの舞台に導入されると、今はもう技術自体にはそんなに新鮮味はないですが、同じように演劇とAIが絡んでくる世界はまだ私にはアイデアもなく想像できません。ただ、世の中でバーチャルがもてはやされるほど、生の役者を劇場で観るという行為はぜいたくで掛け替えのないものになっていくのだろうと思います。

——これから舞台芸術業界を担っていく方への思いを聞かせてください。

私は文学も音楽もダンスも好きで、「好き」を一つに絞り込めない人間でした。その「好き」が全部できるという理由で、この業界に入ってきたのだと思います。もしかしたらいいことばかりではないかもしれませんが、演劇は根気よく作っていく芸術でもあります。少し辛抱してみると、見えてくるものもきっとあると思います。
 自身としては、どんどん新しい舞台芸術を体験して、その中で楽しみながら仕事を続けたいと思っています。



取締役副社長 高橋典子
 NORIKO TAKAHASHI

大阪府大阪市生まれ。大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎卒業。京都薬科大学入学後、「劇団そとばこまち」に入団～1986年まで。1981年京都薬科大学生物薬学科修了。1988年株式会社リコモーション設立、1991年同社東京事務所設立。1997年北牧裕幸と株式会社キューブ設立、同社代表取締役副社長に就任、現在に至る。

[取材日:2023年12月5日 取材・文:五月女菜穂]

株 式 会 社 ヴ ィ レ ッ チ

劇団☆新感線の各種公演企画・製作・運営をはじめ、演劇作品の映像化や作家、演出家、俳優マネジメントも手掛ける株式会社ヴィレッチ。エンターテインメント性が高くライブならではの迫力ある舞台作品の創出に力を注ぐとともに、演劇の魅力を映画館で体感できるゲキ×シネの上映にも積極的に取り組んでいる。つねに新たな驚きを仕掛ける同社代表取締役社長の柴原智子氏に海外の観客へのリーチなどについて伺った。



撮影：田中亜紀

対象公演 劇団☆新感線43周年興行・秋公演 いのうえ歌舞伎『天號星』
2023年11月23日 大阪市中央区 COOL JAPAN PARK OSAKA WWホール

衝撃的だった新感線の舞台映像

——柴原さんはもともと舞台制作者志望だったのでしょうか？
それがまったく(笑)。大学で服飾関係の勉強をしていた当時、友人宅で劇団☆新感線の『星の忍者』録画映像を観て「なんじゃこれはっ！」と衝撃を受けたことがこの世界に足を踏み入れる最初のきっかけです。
後日、舞台衣装デザイナーの緒方規矩子先生が大学主催の講演会に来てくださり、その流れで先生にオペラのゲネプロの現場に入れていただきました。そこで実際の衣裳やウィッグを見学し、緻密に製作された舞台衣裳に触れて、ステージアートの世界に強く惹かれ、こういう現場でものを創ってみたいと思うようになったんです。

——そこから舞台芸術の世界へ。
劇団☆新感線には当初、衣裳関連の仕事で関わっていましたが、その後、舞台制作者として全体を見るようになりました。緒方先生に最初に入れていただいたオペラの現場のバックヤードには舞台美術家の堀尾幸男さんもいらっしゃったのですが、

当時は時を経て仕事で一緒にできる日が来るなんて思ってもいませんでした。様々な出会いが今もいろいろな形で繋がっているご縁をありがたく思っています。

誰一人代わりはいないとの思い

——劇団☆新感線『天號星』、本事業の対象である大阪公演は全日程完走でしたが、東京公演の一部は残念ながら中止となりました。
劇団☆新感線の稽古は小返し(同じ場面を確認しながら繰り返し稽古すること)が多いのですが、『天號星』では劇場に入ってから稽古でも出演者につねにマスクを着用した状態で台詞を喋ったり動いたりしてもらい、当該場面の最後の1回のみマスクを外すスタイルで進行しました。開幕後もカンパニー以外の人との楽屋面会は禁止にしていたし、このあたりの対策はコロナの扱いが2類から5類に移行しても変えていません。ただ、東京公演については内部で体調不良者が出てしまい、7回休演せざるを得なかったことは楽しみにして下さっていたお客様に対して本当に申し訳なく感じています。中止との決

定を出してからは、その回のチケットをお持ちのお客様に迅速にお知らせすることがもっとも大切だと考え、SNSや公式ページなどで重ねてアナウンスいたしました。
コロナ禍以降、スウィングキャストを置くカンパニーも増えていますが、劇団☆新感線は現時点でそのシステムを取り入れていません。というのも、キャストの誰一人欠けても私たちの舞台は成立させられないし、その人の代わりはいないという思いで全員が作品を創っているからです。

——『天號星』は客席通路を使った演出も多く、観客に一体感が生まれていると感じました。
多くのお客様から好意的な感想をいただきました。コロナが完全に消えたわけではないけれど、2類から5類に扱いが変わったことで、劇場内の空気が和らいでいるとの実感もありましたし、この作品を思いきり楽しんでいいんだ、声を出して笑っていいんだというポジティブな雰囲気があったと思います。

舞台芸術とインバウンド

——舞台芸術と社会との関わりについてお仕事の中で意識していることなど教えてください。
今また海外からの観光客が増え、インバウンドを……といろいろなアイデアが語られる中、日本の舞台芸術を外国からのお客様にもっと体験してもらえるような取り組みがあれば面白いと思っています。それにはまず、海外の方が舞台のチケットを購入しやすいシステムが必要で、現在、国内のお客様を大切にしながら、海外からのお客様に向けてもどうリーチするのが効果的か、スタッフと模索しているところです。

——コロナ禍でオンライン配信も増えましたが、劇団☆新感線では以前から映画館で舞台の映像を上映する「ゲキ×シネ」

を実施しています。
オンライン配信については自社のシステムで実施するのではなく、今現在は既存のプラットフォームでご覧いただく形です。これはまさにコロナ禍でのひとつの試みでした。
ゲキ×シネは第一作目の『髑髏城の七人〜アカドクロ』(2004年)から20年続け、これまで映画館で26作品を上映してきました。今でこそ映像も音響も高品質なものをお届けできるようになりましたが、最初の頃は画質も粗く音響も不安定な箇所があったりして、スタッフ一同、試行錯誤しながら改善を繰り返してきた次第です。先ほどの話に戻りますが、海外のお客様に日本の舞台芸術を体感していただく方法のひとつとして、新感線のゲキ×シネはその入り口としてかなり優秀だと考えています。ただ、3時間を超える作品はなかなか海外での上映が難しかったりしますので、そのあたりの調整は必要になりますが、諦めず道を探ってまいります。実際に観ていただければ、この面白さは海外の方にもきっと伝わるはずですから。

——今後の舞台芸術業界への期待や目標などもぜひ。
コロナ禍に緊急事態舞台芸術ネットワークのような、様々なバックボーンを持つ団体が参加するネットワークが発足したことは非常に心強かったです。これまで個人間の繋がりや小さな枠組みの中でおこなわれていた情報の共有も、組織として全体でシェアできるようになりましたので。この3年間、舞台芸術は不要不急といわれたりもしましたが、古代に生まれた演劇が形を変えながら今も残っているのは、それが私たちの生活に必要な不可欠なものだからだと考えます。生身の人間の姿をライブとしてお客様にご覧いただく舞台芸術の世界にはそれこそ中止や休演など防ぎきれないリスクもありますので、公的な支援は不可欠です。今以上に業界が丸となりながら、国や行政にライブエンターテインメントの現場の声を届け、前に進んでいけたらと願っています。

代表取締役社長 柴原智子
TOMOKO SHIBAHARA

大阪府出身。1988年7月より劇団☆新感線に関わる。当初、舞台衣裳家を目指し、衣裳として劇団に参加するも、株式会社ヴィレッチでのアルバイト期間に劇団の制作業務に携わり、人気右肩上がりになっていく当時の劇団の状況から、1993年に社員として株式会社ヴィレッチに所属し、衣裳を断念し制作に専念することとなる。以後、劇団公演の制作はもとより、FCの運営、グラフィックの進行、マネジメントといった様々な業務を行い、プロデューサーとして劇団の運営を担っていくようになった。2013年に現職に就任し現在に至る。

[取材日: 2023年12月8日 取材・文: 上村由紀子]

株 式 会 社 こ ま つ 座

2024年で生誕90年を迎える故・井上ひさし氏。井上に関する作品のみを専門に上演する

制作集団「こまつ座」は、1983年の創立以降、年平均4〜6作品を上演し続けている。

演出に栗山民也氏、鶴山仁氏、丹野郁弓氏、東憲司氏など様々な演出家を迎え、演劇鑑賞団体の巡演として

全国各地で公演。演劇への変わりぬ実直な姿勢を貫くこまつ座を2009年より率いる井上麻矢氏に、その創作について伺った。



左より、千葉哲也、高橋和也



左より、霧矢大夢、石橋徹郎



左より、加納幸和、千葉哲也、高橋和也、西川大貴 撮影：宮川舞子

対象公演 『連鎖街のひとびと』
2023年12月10日 山形県山形市 東ソーアリーナ

物心つく頃から演劇がそばに

——演劇人生に影響を与えた舞台は何ですか？

劇作家の父・井上ひさしとプロデューサーの母・西館好子の中に生まれ、物心つく頃から稽古場に行ったり、車の中で稽古が終わるのを待っていたりしてきたので、身近に演劇というものがありました。井上(ひさし)作品だけの純粋培養だった私が、自分の意思でお芝居を見るようになったのは高校生ぐらいの時のこと。今のように消防法が厳しくなかったので、通路にもびっしりと観客がいて、劇場には熱気があふれていました。個別の作品というよりも、当時の熱気や勢いがとても印象深く残っていますね。

好きな作品は数多くあります。それこそ井上作品はどの作品も子供のように愛しいです。井上ひさし作品以外で強いて挙げるならば、蜷川幸雄先生が演出した『マクベス』でしょうか。セットや世界観に圧倒され、今でも私のベスト3に入る作品です。

——舞台の仕事をする上で転機となった出会いはありますか？

先輩方からは1冊の本になるぐらいたくさん叱咤激励を受

けてきましたが、特に思い出されるのは、父が残した未完の作品『木の上の軍隊』(2013年)を舞台化した時のこと。父の死後、お客様から『木の上の軍隊』が観たかった』というアンケートが多く寄せられ、その声に応えたいと舞台化を決意しました。ただ、こまつ座には「型」があり、それまでの私はいかに「型」を綺麗に埋めていくかということに注力してきたので、本当の意味で一から作る作品というのは『木の上の軍隊』が初めてだったのです。その時に演出家の栗山民也さんと鶴山仁さんに相談したところ、お二人とも「演劇にタブーはない。やりたいことをやればいい」というメッセージをそれぞれ違う言葉で届けてくださり、挑戦を後押ししてくださいました。その言葉は今も私の指針となっています。

再演にも価値を見い出して

——対象公演について、観客の反応を教えてください。

幼い頃から井上作品を観続けてきましたが、どんな作品も時を経て「こんな意味だったのか」と気づくことがあるんですね。今回の『連鎖街のひとびと』も21年ぶりの再演で、いろいろな

ことを発見する旅のようなところがありました。日本の演劇界は新作を作り出すことが称賛されがちですが、再演は再演で、ワインのように作品が熟成されて、味が全然変わってくるという魅力があるんですね。改めて再演にも価値を見い出していないといけないと感じました。

また、山形県の東ソーアリーナはもともとシベールアリーナという名称で、こまつ座もお世話になっていた劇場です。上演するのはややブランクがあったのですが、お客様の反応はとても良かったと思います。

——5月に5類になるにあたっての当時の思いをお聞かせください。

コロナ禍が始まった当初は、何を基準にしてどう対応したらいいのかがまったく分からない状態でしたが、そこから演劇人が演劇人のために緊急事態舞台芸術ネットワークを立ち上げましたよね。他の分野よりも初動が早かったと記憶していて、「どんな公演でも困難を克服して幕を開ける」という演劇人の底力を感じました。「不要不急」と言われながらも、国からの支援のほか、現場で困っていることのヒアリングや各団体の情報共有などを通じて、一緒に辛い状況を乗り越えていこうという思いや、いろいろなことが進歩するような感覚がありました。

しかし、5類になってからは、全体的に非常に曖昧で散漫な状況になっているように思います。政府の方々は「5類になったから今までと同じようにお客様が戻り、同じように公演ができる」と思っているかもしれませんが、この先5年間ぐらいこそきちんとした支援をしていただきたいと心から思います。コロナ禍以前に戻ることはないでしょうし、必ずしも戻る必要もないかもしれませんが、演劇を衰退させないためには、ここから先の活動が勝負になるだろうと気を引き締めています。



代表取締役社長 井上麻矢

MAYA INOUE

1967年、作家、劇作家の井上ひさしの三女として東京・柳橋に生まれる。千葉県市川市で育ち、御茶ノ水の文化学院高等部英語科に入学。在学中に渡仏し、パリで語学学校と陶器の絵付け学校に通う。帰国後、スポーツニッポン新聞東京本社勤務。二女の出産を機に退職し、母として様々な職を経験する。2009年11月よりこまつ座代表取締役社長に就任。12年紀伊國屋演劇賞、14年市川市民芸術文化奨励賞、20年第5回「澄和 Futurist 賞」、23年岡山市民劇場賞プロデューサー賞など、受賞多数。主な著書に「夜中の電話 一父・井上ひさし最後の言葉」小説「母と暮せば」など。

仕事を映像で残せる希望

——オンライン配信のほかAIやNFTなど、デジタル技術の進歩が舞台芸術にもたらす展望を教えてください。

こまつ座はトリプルキャストやダブルキャストの配役すらなく、唯一無二の俳優陣で「この人が倒れたら公演を止めるしかない」というとてもアナログな状況でお芝居を作っています。最新のデジタル技術を駆使した演劇を否定はしませんが、我々としては今は正直あまり関心がないです。私たちの仕事は本来とても儂いものだと思うのです。作っては壊し、作っては壊し、人々の記憶にしか残らない。繊細であると同時に力強いものを作っているという自負があります。だからこそ演劇は絶対に生で観てほしいという思いは強くあります。

一方で、『紙屋町さくらホテル』(2022年)を8K映像と立体音響で収録してもらったことを契機に、自分たちの仕事を残すことには興味が出てきました。50年後、100年後は、私も私の周りの人たちもみんないないと思いますが、自分たちの仕事が映像という形で未来に残せると思うと、それは私にとって癒しであり、希望でもあります。

——今後の目標と、これから舞台芸術業界を担っていく方への思いを聞かせてください。

こまつ座としては淡々と上質なお芝居を作り続けていきたいと思っています。快楽や刺激だけではなく、ものを深く考えたり、世の中で起きていることを少し違う見方をしたりする静かで強い作品を妥協することなく作っていきます。これから業界を担っていく方には、大変なこともありますけれど、ものを作る喜び、これ以上楽しい仕事は他にないと伝えたいですね。ぶつかることを怖がらないで。挑戦する人をいつでも歓迎しています。

[取材日:2023年12月12日 取材・文:五月女菜穂]

THEATER HOSPITALITY

特集企画

劇場のホスピタリティ

ポータルサイトでは「劇場のホスピタリティ」をテーマに特集記事を掲載。顧客満足度の高さと知られる劇団四季、オリジナリティのあるおもてなしが好評の博多座、関東圏の多くの劇場に場内スタッフを派遣するヴォートル、小劇場を中心に活動する劇団の中でも意欲的に鑑賞サポートに取り組むタカハ劇団に取材をし、それぞれの記事をまとめました。

顧客と徹底的に向き合い生まれるサービス

取材協力：劇団四季

劇団四季のすべてのサービスの源にあったのは「四季の会」のお客様の存在でした。常に顧客を第一優先とし、その声をよく聞き、咀嚼し、体内に取り入れているからこそ、自然とホスピタリティにも反映されている、そんなシステムが構築されていました。作品の上演はもちろん、専用劇場の運営からチケットの販売システムまで自社で展開する四季株式会社だからこそ可能なスピード感や柔軟さも顧客満足度の高さに直結していると感じました。



www.mirai-pjt.jp/n/2023interview01-1

「ここで観たい」と思われる劇場づくり

取材協力：博多座

福岡という場所にありながら、東京や大阪の演劇ファンも多く足を運ぶ博多座は、劇場全体で作品を大切にしようとする温かな取り組みが人気です。ではなぜそのようなアイデアが生まれたのか。そこには、今でも東京の劇場に「追いついていないと思っている」と明かす、地方劇場ならではの思いや悩みもありました。試行錯誤の末に辿り着いた、案内スタッフの中で受け継がれる考え方や、SNSでバズった「博多座検証シリーズ」の裏側もうかがいました。



www.mirai-pjt.jp/n/2023interview02-1

劇場案内スタッフを育てる仕組み

取材協力：ヴォートル

関東のさまざまな劇場で受付・案内スタッフとして働くプロ集団が、どのようにしてスタッフを育てているのか、なにか起きた時にどのような考え方で対応をしているのか、劇場に求められることなどをうかがいました。それまでコンサートホールが主な取引先だったヴォートルが演劇業界に進出するきっかけとなった東京芸術劇場での経験や、いくつもの劇場で真摯にお客様と向き合っているからこそ感じ取れる客席事情の変化なども興味深いお話です。



www.mirai-pjt.jp/n/2023interview03-1

小劇場で取り組む鑑賞サポート

取材協力：高羽彩(タカハ劇団)、半田桃子(momocan)

2024年4月の民間業者の合理的配慮の義務化を前に注目が高まるアクセシビリティ対応ですが、小劇場でここまでできるのかと思うほど鑑賞サポートサービスを充実させてきたのがタカハ劇団です。それは、劇団の積極的な姿勢に加え、主催と制作の「やってみよう」「やりましょう」で実現できる身軽さ、会話できる協力会社との出会い、そして助成金の存在も後押しになっています。この取り組みで生じたキャストへの影響のエピソードも印象的です。



www.mirai-pjt.jp/n/2023interview04-1

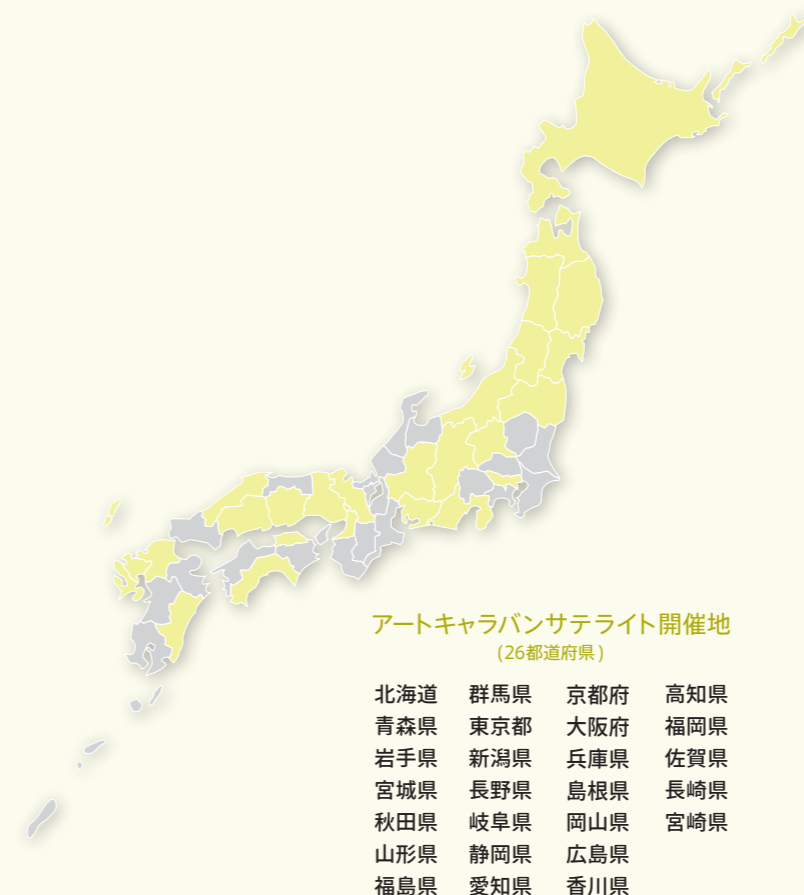
SATELLITE

地域連携事業 アートキャラバン・サテライト

緊急事態舞台芸術ネットワークの正会員が団体の強みを活かし、様々な地域で舞台芸術の魅力を広める活動を展開しました。未来にむけた創者と、業界活性化にむけて、全国各地で25の企画が実施されました。

◎実施団体 (企画開始日順)

- 公益財団法人山本能楽堂
- 株式会社リコモーション
- 王子小劇場(佐藤商事株式会社)
- 柿喰う客
- 江原河畔劇場
- 石井光三オフィス
- 合同会社 Level19
- ダンスハウス黄金4422
- 株式会社 INDEPENDENT
- 吉本興業株式会社
- 劇団かかし座
- 株式会社 アイオーン
- 株式会社 オフィス鹿
- ラボチ
- 劇団あおきりみかん
- CAT-A-TAC (MITATEYA 合同会社)
- オフィスプロジェクトM
- 劇団 山の手事情社
- 株式会社 precog
- 株式会社 ネリム
- 劇団 短距離男道ミサイル
- くちびるの会
- 青年団/有限会社アゴラ企画
- 一般社団法人アーツシード京都
- 劇団あはひ



アートキャラバンサテライト開催地
(26都道府県)

- | | | | |
|-----|-----|-----|-----|
| 北海道 | 群馬県 | 京都府 | 高知県 |
| 青森県 | 東京都 | 大阪府 | 福岡県 |
| 岩手県 | 新潟県 | 兵庫県 | 佐賀県 |
| 宮城県 | 長野県 | 島根県 | 長崎県 |
| 秋田県 | 岐阜県 | 岡山県 | 宮崎県 |
| 山形県 | 静岡県 | 広島県 | |
| 福島県 | 愛知県 | 香川県 | |

歴史ある能楽堂が大きく開く、能の扉

#体験 #シンポジウム #初心者OK #能楽 #実演あり

● 初心者向け「能楽体験講座」@宮古～お能を知ろう！楽しもう！～

約700年前に観阿弥・世阿弥親子によって大成された、日本を代表する伝統芸能「能楽」。

中尊寺の僧を中心に地元の人々が稽古を受け、謡や舞を伝承してきた歴史を持つ一方、現在は能楽に触れる機会が非常に少ないという岩手県にて、大阪で最も歴史が古く、革新的な活動をしている能楽堂「山本能楽堂」が能の体験講座を行った。

山本能楽堂の能楽体験講座は、今回の講師でもある能楽師シテ方 山本章弘が20年以上前から「能を知ってほしい」「初めてでも臆せず楽しんでほしい」と積極的に開催してきたもの。能の公演のセオリーや客席でのふるまい方、なぜ眠ってしまうのかという疑問にまで解説があり、難解な印象のある能だが、実はどこを紐解いてもおもしろく、その人の趣味嗜好に合わせて楽しめることを伝え続けている。

日程:2023年8月2日(水)、3日(木)

会場:イーストピアみやこ(宮古市役所)1階交流プラザ(岩手県宮古市)

講師:山本章宏(観世流能楽師)

● シビウ国際演劇祭30周年記念報告会
～ Faust in the Moonlight Night FAUST. A confession ～

ヨーロッパ三大演劇祭の一つである、ルーマニアの「シビウ国際演劇祭」。30周年を迎えた2023年には過去最大規模となり、81か国から5000人以上の出演者が招聘され、81の会場で825種類のイベントが行われた。山本能楽堂は能楽として初めて演劇祭から招聘を受け、2016年から8年連続で参加している。

山本能楽堂を会場に、コロナ禍下においても世界中の多様な舞台芸術の交流が行われていたシビウ国際演劇祭の歴史や概要、山本能楽堂により初演される新作能「ファウスト」についての報告会を開催。2007年よりシビウと深く関わりのある、演出家・俳優の串田和美氏をゲストに迎え、舞台芸術の未来を考える上でも役立つ、シビウの文化行政のあり方についても詳細な説明が行われた。

日程:2023年8月8日(火)

会場:山本能楽堂(大阪府大阪市)

登壇者:串田和美(演出家・俳優)・山本章弘(観世流能楽師)・安田登(下掛宝生流能楽師)・茂山千之丞(大蔵流能楽師)・藤本隆行(Kinsei R&Dディレクター・照明デザイナー)

<当日の様子>
<https://www.mirai-pjt.jp/n/81ede8893932>



団体からのメッセージ

サテライトに参加し、これまで関わってきた伝統芸能の世界だけではなく、舞台芸術界全体の皆様とのつながりを頂き、コロナ禍を乗り越えるための勇気と希望を頂き、感謝の気持ちで一杯です。



公益財団法人山本能楽堂(大阪府)

オフィス街に佇む異空間のような能楽堂(国登録有形文化財)。初心者向けの能楽公演や講座のみならず、文楽・上方舞・落語・講談・浪曲など奥深く豊かな上方文化全体の普及・啓発にも取り組む。さまざまなジャンルのハイライト部分を一挙に楽しめる「初心者のための上方伝統芸能ナイト」など、古典芸能の発信基地としてユニークな企画も多数。大阪で最も歴史が古く、最も革新的な能楽堂だ。ライブラリーには貴重な資料を所蔵。

研ぎ澄まされたテキストと共に
戯曲を学ぶ濃密な2日間

#ワークショップ #初心者OK #戯曲

● ACTLABO 夏休みワークショップ
ケラリーノ・サンドロヴィッチ作

『ペイジルトウンの女神』を使った戯曲ワークショップ

2023年の夏に大阪に開設されたばかりのスクール・コミュニティ「ACTLABO」で開催された、戯曲の書き方のコツを学べるワークショップ。「戯曲を書いてみたいけれど、まず何をしたらいいのかわからない」「戯曲を書いているがありがたひな会話しか書けず悩んでいる」など、未来の演劇界を担う高校生から25歳までを対象としている。舞台だけでなく映画やテレビの脚本も手がける劇作家・演出家の福谷圭祐(匿名劇壇主宰)が講師を務め、テキストにはケラリーノ・サンドロヴィッチ作で、2020年に緒川たまきとのユニット「ケムリ研究室」で上演された戯曲『ペイジルトウンの女神』を使用。演劇の楽しみ方のひとつでもある「戯曲を読む」からスタートし、1日目には短いワンシーン分の戯曲を書いてみるという課題が出され、2日目には課題をもとにしたディスカッション、福谷からのフィードバックも行われた。これから戯曲を書いてみたい受講者たちには、執筆に挑戦する最初の機会を、すでに書き始めている受講者には、魅力的な戯曲を書くコツを知るスキルアップの機会となった。

日程:2023年8月8日(火)、22日(火)

会場:ACTLABO OSAKA(大阪府大阪市)

講師:福谷圭祐(匿名劇壇主宰・リコモーション所属)

【参加者の声】

- ・普段過ごしていたら教えていただけないことを教えていただけて、面白かったです。来年文化祭で劇があるのでそこで活かしたいです。
- ・実際に皆さんが書いたものを読めたことが楽しかったです。勉強になりました。
- ・とても楽しかったです。技術的なことも学べて、勉強になりました。
- ・戯曲ははじめて書きましたが、映像作品のシナリオとも共通する部分、違う部分それぞれがあり、知見が深まりました。
- ・初めて戯曲を書きましたが難しかったです。映像脚本との違いを、肌感覚としても理解できたので良かったです。次回もこのような機会があれば、ぜひ参加したいです。

<当日の様子>

<https://www.mirai-pjt.jp/n/n0058bc33e0bd>



団体からのメッセージ

戯曲を書いてみたい若者に実践的なアドバイスとエールを送る機会をいただけたことに感謝しています。これからも地域を問わず芸術活動を支援するプロジェクトがあるとありがたいと思っています。



株式会社リコモーション(大阪府)

生瀬勝久、古田新太ら関西の劇団所属・出身の俳優やクリエイターが多く所属する大阪のプロダクション。東京に本社を持つプロダクション「キューブ」とも一部提携し、所属タレントのマネジメントに加え、舞台、イベント、映像制作なども手がける。2023年夏には大阪にスクールコミュニティ「ACTLABO」を開設。これまで培ってきたノウハウを生かし、プロ志向から趣味の領域まで幅広い層に向けて演技、ダンス、ボーカルのレッスンをを行う。

劇場を開放してつくる、つくり手たちの出会いの場

#ワークショップ #交流会 #初心者OK #演技 #戯曲 #演出 #舞台監督 #照明 #音響 #制作

● 「少し先の未来のための」王子マッキングウィーク2nd

東京都北区の民間劇場・王子小劇場が行う、全ての演劇の作り手を対象としたイベントウィーク。2023年3月に開催の第一弾で好評を得た「1日ワークショップDAY」や「リーディングワークショップ」に加え、人が集まるか不安でオーディションを開けないという団体に向けた「合同オーディション」、座組に一人のポジションである「主宰」や「プロデューサー」のためのイベントなど、コロナ禍の影響もあり、新しい人と繋がりがつらい今だからこそこの参加型企画が実施された。小劇場で活動している俳優や、団体主宰者、これから団体を作っていきたいと考えている脚本家・演出家・スタッフなど老若男女を問わず、のべ250名が参加。複数の企画に足を運ぶ参加者もあり、様々なセクションに触れながら、参加者同士や、参加者と王子小劇場が交流を深める機会となった。

日程:2023年9月11日(月)～18日(月・祝)

会場:王子小劇場(東京都北区)

① 交流会

年齢やセクションの制限を設けず、参加者たちの持っている演劇の情報を共有しあえる大交流会。

② 1日ワークショップDAY

都内劇場で活躍する若手演出家や、地方で活躍しているベテラン演出家5名が講師を務めた、俳優向けのワークショップ(講師:松森モヘー(中野坂上デーモンズ)、池田美樹(劇団きらら)、平塚直隆(オイスターズ)、中島梓織(いいんじ)、こんにち博士(南極ゴジラ))。

③ 若手プロデューサー・制作者・主宰向けWS「先輩プロデューサーに聞く！旗揚げ5年以内にやるべきこと」

惑星ピスタチオのプロデューサー・登記子を講師に迎え、参加者の若手演劇人によるディスカッションも行われた。

④ 舞台・音響・照明 仕込み体験！ワークショップ

王子小劇場の技術スタッフである黒太剛亮とイサカトモフミによる、実践的な舞台、音響、照明のワークショップ。

⑤ 演劇界カラオケのど自慢 No.1決定戦夏の陣 & 交流会

「演劇人を歌で繋げよう！」という趣旨のもと、演劇人が集い、カラオケで交流を深めた。

⑥ 1日で「かもめ」リーディングWS

1日で名作「かもめ」の配役決めから読解、発表まで行なうリーディングワークショップ(ファシリテーター:笠浦静花)。ワークショップ、発表会ともに見学者も募った。

⑦ 演出家から募集！やるぞ！合同オーディション！

公募で集まった演出家と俳優が出会う、マッチングのイベント。3名の演出家がお互いのオーディションの様子を見ながら、多角的に俳優の能力を図ることのできる機会となった。

⑧ 脚本家たちが持ってきた短編戯曲をずっと読み合わせる1日

30分程度の戯曲を読み合わせた後、ディスカッションを行ない、各々の技術向上や、普段一人で執筆をする脚本家同士の繋がりを深めた。

<当日の様子>

<https://mirai-pjt.jp/n/nae0051878c36>



団体からのメッセージ

事業へ参加したことによって、地方で活躍する演劇人を招くことが出来、その技術や知識、信念を都内の若手演劇人たちと共有することができた、貴重な機会となりました。



王子小劇場(佐藤商事株式会社)(東京都)

東京都北区にある客席数100席ほどの民間小劇場「王子小劇場」の運営会社。1998年の劇場開館以来、若手劇団への積極的な支援や登用で知られる日本小劇場の登竜門的存在。王子小劇場での上演作品から毎年各賞を選出する「佐藤佐吉賞」、隔年で開催する「佐藤佐吉演劇祭」などの独自企画からも若手支援への視座を強く感じさせる。2016年にはネーミングライツ制度を導入したことも話題を呼んだ(2021年末まで)。

劇場を開かれた場所にするための種を植えていく

#ワークショップ #座談会 #初心者OK #戯曲 #リーディング

● 演劇のつどい リーディングワークショップ&座談会

劇団柿喰う客による二部制の企画。第一部は『「桜の園」を読む！リーディングワークショップ』。2日後に同じ施設内で上演される『桜の園』(PARCO公演、演出はショーン・ホームズ)を中心に、演出家・劇作家である中屋敷法がファシリテーターを、俳優の永島敬三と原田理央がアシスタントを務め、参加者と共に戯曲を味わう。配役に沿って決められたセリフを読むのではなく、「全員で好きなセリフを読む」という、斬新なスタイルの本読みが行われた。集団で一つのセリフを読むことで緊張がほぐれ、心地の良いリズムで会話が進んでいくことが実感できる会となった。

第二部は、「いろんな演劇のかたちを考えてみる会」と題した座談会。自己紹介から始まった会は、学生や夫婦連れ、演劇未経験者など様々な立場の参加者と、スピーカーが経験談を自由に共有し、演劇への高い関心がある高知の土地柄なども伺える機会となった。

日程:2023年9月18日(月・祝)

会場:高知県立県民文化ホール 第11多目的室(高知県高知市)

プログラム:

●第一部 『桜の園』を読む！リーディングワークショップ
ファシリテーター:中屋敷法仁(演出家・劇作家/劇団「柿喰う客」代表)
ワークショップアシスタント:永島敬三、原田理央(俳優/柿喰う客)

●第二部 いろんな演劇のかたちを考えてみる会(座談会)

スピーカー:
中屋敷法仁(演出家・劇作家/劇団「柿喰う客」代表)、山田紗綾(制作)、吉良佳晃(俳優・演出家・劇作家/高知演劇ネットワーク演会)、中内こもる(俳優・劇作家・イベント企画/高知演劇ネットワーク演会)

<当日の様子>

<https://mirai-pjt.jp/n/n69f397f911ca>



団体からのメッセージ

俳優から観客まで広い方と交流する機会が持てたことはとても良い経験で、今後の活動につながるきっかけになると思いました。活動拠点以外での活動のきっかけとして、とてもありがたい企画でした。



柿喰う客(東京都)

代表を務める演出家・劇作家の中屋敷法仁が大学在学中に旗揚げ。演劇特有の虚構性を重視した躍動感あふれるパフォーマンスを特長とするオリジナル作品を上演し、近年はより身体的なアプローチを強めている。また古典作品の独自の改作や、他ジャンルのアーティストとのコラボレーションも多数。さらに「こどもと観る演劇プロジェクト」や「高校生のための演劇プロジェクト」、若手劇団員の入団などにも力を入れ、若い世代からの人気も高い。

演劇をつくる場だからこそ生まれるものを

#ワークショップ #体験 #障がい者向け #初心者OK #演技 #実演あり

● 江原河畔劇場へ行こう！プロジェクト ひょっこりシアター

2020年より新設された江原河畔劇場で行われる、障がいがある方を対象とした演劇ワークショップのプロジェクト。2022年に同劇場が兵庫の特別支援学校でワークショップを行ったことをきっかけに、「学校卒業後も演劇と関わる機会を作りたい」という声がある企画に繋がった。全10回のワークショップはいきなり稽古に入るのではなく、参加しやすいよう初めの2回は「お試し」と題し、劇場がどんな場所なのか実際に見て知ってもらう機会を設けている。豊岡市や地元の支援学校の職員もサポートメンバーとして見守るなか、参加者とスタッフは楽しくコミュニケーションを取りながら、演劇に親しみ、新しい仲間とも触れ合う機会となった。

日程・プログラム:

- 「演劇を体験してみよう！お試しワークショップ」 2023年10月7日(土)、14日(土)
●「演劇で遊んでみよう！演劇ワークショップ」 2023年10月21日(土)、11月4日(土)、18日(土)、25日(土)
●「演劇作品を使って上演しよう！演劇作品を作るワークショップ」 稽古:2023年12月2日(土)、9日(土)、16日(土) 発表会:2023年12月17日(日) 会場:江原河畔劇場(兵庫県豊岡市)

【参加者の声】

- ・楽しかった。
・途中何回か休んでしまったけど、最後まで参加できてよかった。
・舞台上でみんなが助けてくれる。だから肩の力を抜いて完璧にできなくてもいいんだ、普段もそんなに完璧を目指して頑張らなくてもいいんだと気づいた。

【サポートメンバーの声】

- ・自分の感じていることを表現することや、誰かに伝えることを、楽しみながら自然にできていた。
・対人面や自己表現に抵抗感がある方が、自然と自身の思いやりややりたいことを表現し、演劇を素直に楽しんでいる姿が見受けられた。
・普段、関わりがない人と演劇を通して、お互いを尊重し、創作活動ができていた。

<当日の様子>

https://mirai-pjt.jp/n/nffec0d3bc23e



団体からのメッセージ

江原河畔劇場では、地域の方々の要望に応えた企画を実施する事ができ、今後も持続可能な地盤を作る事ができました。サテライトに参加できた事の幸運と事務局の方々のご理解に心から感謝しています。



江原河畔劇場(兵庫県)

平田オリザが主宰する青年団が活動拠点を兵庫県豊岡市に移すにあたり、1930年代に建設された旧豊岡市商工会館をスタジオ併設の劇場に改築し、2020年にオープン。設立にあたって実施したクラウドファンディングでは5,000万円近い支援を集め話題を呼んだ。青年団公演のみならず、児童劇団の設立や、障がいがある方向けのワークショップ、そして豊岡演劇祭のメイン会場の一つと、まさにローカルとグローバルが交差する文化拠点となりつつある。

子供が劇場に親しみきっかけづくりを

#体験 #子ども向け #親子向け #学生向け #初心者OK #落語 #音楽 #実演あり

● 桂やまとのみんなで落語つくっちゃおう！ ● 冨木杏奈の「ものがたり 音楽があるともっと楽しい」

石井光三オフィスが長らくあたためていた、子供が劇場に行くきっかけをつくる2つの企画。子供や親子が劇場に親しむ経験を作り、10年後も劇場へ来てくれる未来へ繋げることを目指している。「桂やまとの落語つくっちゃおう！」は、小学生から高校生までを対象に、落語家・桂やまと一緒に落語を創作する参加型イベント。落語の基本的な解説やお馴染みの「蕎麦を食べる芸」のレクチャー、実演された噺の続きを子供たちが考え、桂による披露とともに鳴り物で参加する体験など、「自分が参加することで新たに作品が生まれるおもしろさ」も味わえる企画となった。「ものがたり 音楽があるともっと楽しい」は、保護者も楽しめるように0歳児から親子での参加が可能。音楽劇のような歌が入ることで、童話の朗読が豊かに広がることを体験し、家で実践するためのコツも伝授された。

桂やまとのみんなで落語つくっちゃおう！

日程・会場:

- 山形会場 2023年10月21日(土) 東ソーアリーナ&暹羅堂文庫山形館(山形県山形市)
●可見会場 2024年1月21日(日)

①小学生の部

②中・高校生の部(大人も参加可)

可見市文化創造センター ワークショップルーム和室(岐阜県可見市) 講師:桂やまと(落語家)

冨木杏奈の「ものがたり 音楽があるともっと楽しい」

日程:2024年1月14日(日)

会場:可見市文化創造センター 演劇練習室(岐阜県可見市)

講師:冨木杏奈(タンゴ歌手、女優)

<当日の様子>

https://mirai-pjt.jp/n/nce7e0d880cfb



団体からのメッセージ

一方的ではなく双方向で参加者と向き合う内容は劇場が身近に感じる入口になったと思います。本プロジェクトが一過性でなく個々の企画が広がる手立があると希望が持てます。



石井光三オフィス(東京都)

コント赤信号やかしまし娘などのマネージメントを手掛けた石井光三氏が設立した芸能プロダクション。1980年代までは多くのお笑い芸人を抱えていたが、その後は、俳優・タレントらのマネージメントに注力。演出家や作家なども所属するようになる。またコメディやシリアスな演劇から芸術祭の野外劇まで多彩なジャンルの舞台や、お笑いライブの制作も手掛けるなど、小規模ながら堅実で幅広い運営を行う。

学びたいものを学べる機会を届けに行く

#ワークショップ #初心者OK #経験者向け #演技

● サンフォード・マイズナー・テクニク1週間集中クラス2023

俳優と俳優の「関係」に焦点を絞る演技技術「サンフォード・マイズナー・テクニク」の基礎部分を、一週間集中的に学ぶことができるクラス。約20年にわたりこの技術を教えてきた、黒澤世莉が講師を務める。情報が伝わりにくい地域の文化芸術振興を推進し、「どこにいても学びたいものが学べる」環境づくりのため、会場として各地域の拠点となる小劇場が活用された。高いモチベーションの参加者へ、オンラインでは難しい演技の指導を直接届けることができ、講座で養ったテクニクが全国の俳優の「武器」として役立てられることが期待される。

日程・会場:

●静岡 2023年10月22日(日)~28日(土) 人宿町やどりぎ座(静岡県静岡市)

●新潟

2023年11月27日(月)~30日(木)入門クラス 2023年12月1日(金)~3日(日)経験者クラス 月潟稽古場(新潟県新潟市)

●福岡

2023年12月 4日(月)~10日(日) 湾岸劇場博多扇貝(福岡県福岡市)

講師:黒澤世莉(演出家、脚本家、アクティングコーチ)

【参加者の声】

- ・時間的にも体力的にもかなり気合いが要りましたが、短期間だからこそ復習しやすく理解が深まったように感じます。黒澤さんのアドバイスは非常に的確で分かりやすく、自分ではわからなかった感情や身体表現に気づく事ができ、とても良い学びになりました。
・長年演劇活動をしていましたが、初めての体験だらけで衝撃の7日間でした。継続的に受けられる当たり前の場であって欲しいと思いました。何も分からず手探りで演劇活動をしている、若い俳優達にスキルアップのため皆に受けて欲しいです。また福岡でも定期的にやって欲しいです。

【MIRAI Letterでのメッセージ】

一週間に渡るこのワークショップでは、マイズナーテクニクについて学び、実践を通じてテクニクの理解を深めることができました。役者として新たな知見を広げることができ、自分にとって、とても有意義な内容でした。是非、今後も、このプログラムを継続していただきたいと思います！よろしくお願いいたします！！

<当日の様子>

https://mirai-pjt.jp/n/n641b87df1fac



団体からのメッセージ

演技の基礎技術を学ぶ機会とあわせて、ハラスメントの起きにくい場についての知見の共有が出来ました。これからも継続して全国各地の演劇人を応援していきます。



合同会社 Level19(東京都)

「誰でも対等に全員の顔が見えて、発信、受信ができるように」を旗印に、業界環境の改善をふくめ演劇分野に様々なアプローチを示している。代表を務める演出家・黒澤世莉のマネジメントのほか、日本戯曲500本以上を無料公開する「戯曲デジタルアーカイブ」の作成、舞台芸術スタッフワークのEラーニングコンテンツ「舞台芸術スタッフの仕事」などの企画、日本フィンランド演劇プロジェクトや、公演を目的としない演劇サークル「明後日の方向」の公演プロデュースなどを実施。

「ダンスハウス黄金4422」を開かれた施設にするために

#ワークショップ #トークショー #初心者OK #ダンス #演技 #戯曲 #演出

● ダンスハウス黄金 4422 Autumn Winter Festival

コンテンポラリーダンスに特化した名古屋市のダンスプラットフォーム「ダンスハウス黄金4422」にて、約2か月にわたり開催されるイベント。川合ロンらダンサーによるダンスワークショップのほか、村上春樹の短編小説をテーマにしたワークショップ、イスラエルのダンスを語るトークショー、「マームとジブシー」主宰の藤田貴大トークショーなど、さまざまなジャンルのプログラムが実施されました。施設の代表を務める舞踏家・浅井信好の「この場が多種多様な人々が出会い行き交う「交差点」になれば」という想いから、どれも未経験者から参加OK。劇場の外でも、ダンスや演劇と出会い、触れ合える場所をつくるイベントです。

日程・プログラム:

●TALK PROJECT A 2023年11月3日(金・祝) 乗越たかお「イスラエルのコンテンポラリーダンス・トーク」

●TALK PROJECT B 2023年11月4日(土) 藤田貴大「藤田貴大トークショー」

●WS & SHOWING

2023年11月25日(土)、26日(日)、12月2日(土)、3日(日) 鳴海康平「小説から小作品をつくるクリエイション」

●WORK SHOP A 2023年12月9日(土) 島崎麻美「エッセシャルムーブメントクラス」

●WORK SHOP B 2023年12月22日(金) 皆川まゆむ「日常の中から「踊り」を見つけるワークショップ」

●WORK SHOP C 2024年1月12日(金) 藤村港平「音楽を聴くからだ」聴くことからダンスを考えるWS

●WORK SHOP D 2024年1月19日(金) 川合ロン「速度の変化で身体の質(クオリティ)を考える」

会場:黄金4422BLDG.(愛知県名古屋市)

<当日の様子>

https://mirai-pjt.jp/n/nf7734985f404



団体からのメッセージ

「ダンスと演劇」をテーマに一線で活躍する方のWSを無料で開催することで、気楽に参加し多角的に学ぶことができ、多くの方が舞台芸術の奥深さや素晴らしさを知り、今後の活動や生活に取り入れるきっかけになったと感じます。



ダンスハウス黄金4422(愛知県)

元縫製工場のビル1棟を、セルフリノベーションによって劇場、宿泊施設、スタジオ、ギャラリーなどを完備したコンテンポラリーダンスに特化したダンスハウスとして生まれ変わらせた施設。愛知県名古屋市に2017年にオープン。元・山海塾の舞踏手で「月灯りの移動劇場」代表の浅井信好が代表を務める。国内外のダンサー、振付家によるアーティストインレジデンスを実施するなど、舞踊の作り手たちの交流と創造の拠点となっている。

一人芝居フェスティバルを
23年開催してきたから伝えられること

#ワークショップ #経験者向け #一人芝居 #演技 #戯曲 #演出 #実演あり

23年に渡り、毎年全国で一人芝居フェスティバルを開催する「INDEPENDENT」が、初めて実施するワークショップ。「俳優にとって名刺代わりとなる一人芝居があることは、豊かな演劇活動の役に立つのではないか」という思いから、一人芝居創りのノウハウやポイントを2日間に凝縮して俳優に伝える。これまで『INDEPENDENT』で特に評価の高い作品を生み出したチームを講師に迎え、一人芝居を「知る」「観る」「やる」「創る」の4段階で実施されたワークショップでは、開催地域の演劇人だけでなく全国から演劇活動を行う俳優・脚本家・演出家が集まった。

● 最強の一人芝居フェスティバル"INDEPENDENT" プレゼンツ
『俳優の名刺代わりになる一人芝居の創り方』in 広島 2023

日程:2023年11月4日(土)、5日(日)
会場:山小屋シアター(広島県広島市)
講師:葉山太司(飛ぶ劇場)、大迫旭洋(不思議少年)、相内唯史(INDEPENDENT)

● 最強の一人芝居フェスティバル"INDEPENDENT" プレゼンツ
『俳優の名刺代わりになる一人芝居の創り方』in 松本 2023

日程:2023年12月9日(土)、10日(日)
会場:信濃ギャラリー(長野県松本市)
講師:米山真理(彗星マジック)、勝山修平(彗星マジック)、相内唯史(INDEPENDENT)

【参加者の声】

- ・参加するまで一人芝居は、上演コストが軽いという印象でしたが、ワークショップを受け、一人芝居は独立した独自の体系であり、通常の芝居とは違う魅力があるのだと学び、認識が変わりました。知るだけでなく、実践してみたくなる、本当に楽しい2日間でした。
- ・私と私以外の役者。持っている魅力が違うからそれぞれ違うけれど、一人芝居をしたことで、私と何が決定的に違うのか。それを座学で知って、実例を拝見し、ひとりでやってみて、グループで作品を作るという流れでやれたのは非常に貴重な体験でした。
- ・一人芝居のすごさ、大変さ、面白さを濃密に感じる2日間でした。インプット、アウトプットの両軸で学べたことが大変有難かったです。

<当日の様子>
<https://mirai-pjt.jp/n/n01e467c78f97>



団体からのメッセージ

演劇を創る団体はどうしても公演が中心となり、裾野を広げる為の事業にじっくりと時間や労力をかける事が難しい。今回、長年温めていた裾野を広げる企画を実現できて良かったです。



株式会社 INDEPENDENT(大阪府)

2001年から20年以上継続開催し、札幌から沖縄まで全国展開している最強の一人芝居フェスティバル「INDEPENDENT」の運営を主軸に、演劇公演の企画製作や、劇団運営のプロデュースを担う制作会社。代表でありプロデューサーの相内が携わる大阪インディペンデントシアターの劇場設計・運営ノウハウを基盤に、小劇場の立ち上げや設計コンサルタントとしても活動を展開。舞台監督や照明・音響のプランオペ、映像製作、広報デザインなど、舞台公演に関わる主要なテクニカルワークの全てを手がける事が可能で、プロデューサーからテクニカルワークまでシームレスに対応する総合演劇製作会社としてフットワーク軽く全国を股にかけて活動を展開している。

関西演劇祭と「日本の演劇」未来プロジェクトがつながる

#パネル展示 #観客 #つながり

● 関西演劇祭2023
つながる「日本の演劇」未来プロジェクト2023

フェスティバルディレクター・板尾創路氏の「関西から演劇界を盛り上げたい」「若手の新たなきっかけになるような演劇祭に」という思いから始動した関西演劇祭。5周年を迎えた2023年は“つなぐ”をテーマに、全国から多様な10団体が集い、45分の短編作品が上演された。「日本の演劇」未来プロジェクトも同じく舞台芸術業界を繋ぎ、活性化することを全国規模で目指していることから、関西演劇祭の会場に特設のパネルを設置。来場者や参加団体からは「日本の演劇の課題」や「演劇の未来への思い」など、生の声を綴った付箋360枚が集まった。付箋パネルの横には、アートキャラバン・サテライトの企画に参加する25団体の一覧も掲示し、全国各地で行われる企画をより多くの場所や人、そして未来へと“つなげる”役目を果たした。

日程:2023年11月11日(土)~19日(日)
会場:COOL JAPAN PARK OSAKA SSホール(大阪府大阪市)、
「関西演劇祭2023」無料配信など

【参加者よりパネルに集まった声(付箋より抜粋)】

- ・参入ハードルがもっと低くなりますように!!
- ・もっともっと素晴らしい役者さんに会いたいです。
- ・「演劇」が今よりメジャーなコンテンツになってほしい。
- ・初めて演劇を観に来ました!! 役者さんの表情が近くで見られてとてもよかったです!
- ・演劇でいろんな世界を知るのが楽しい! これからも沢山観劇したい!
- ・短編で気軽に楽しめるものを学校とかに出張して見られる機会があったら嬉しいな。
- ・関西からたくさんの方を世界に!!
- ・演劇は生で観るのが一番。その日、その公演を楽しめます。今回は若い力を本当に感じました。もっともっと広がってほしいです。
- ・色々な演出があって新しい発見ができたり、各劇団のこだわりを感じられるのがとっても楽しい!!
- ・他の芸術に比べ、演劇だけが授業で習わないのは残念だと感じています。感情表現の苦手な日本人こそ演劇を学ぶ機会があるといいと思うし、相手に伝える訓練にもなると思います。
- ・素敵な演劇祭だと思いました。小劇場演劇の門戸がより広く開かれればいいなと思います。
- ・子どもがいても観劇できるよう託児所のある劇場ができてほしい!! 預けさえできれば見られた作品がたくさんあって、悔しい思いをたくさんしたので…。
- ・今回、私は演劇部として勉強をしに来ました。役として視線や表情の変化、声の大小、動き方、すべてが本当にすごくて、見ていて感動しました。中学から始めた演劇で手探りの中、こういう機会が得られて本当に良かったです。

<当日の様子>
<https://mirai-pjt.jp/n/ne6ece02701c3>



団体からのメッセージ

サテライトに参加して、演劇をされておられる方や演劇ファンの方の生の声が聞けたことが良かったです。事務局の方がその声を未来の演劇につなげていただけることを願います。



吉本興業株式会社(大阪府)

創業から110年以上“笑い”を発信し続けつつ、あらゆるエンタメに関わる業界最大手の複合企業。その歴史が寄席からスタートしたことから、演者がライブで観客に向き合う劇場・舞台に価値を置く理念は特徴的だ。劇場運営や養成スクールなど、芸人の成長と活躍の場をつなげるコンテンツをトータルで手掛け「お笑いの総合商社」とも呼ばれる。常に新しい劇場をオープンし、2024年1月には東京ドームシティ内に新劇場「IMM THEATER」が開場。

手と光から生まれる世界をこれまで以上に届けたい

#ワークショップ #子ども向け #親子向け #初心者OK #手影絵 #実演あり

● 劇団かかし座『手影絵ワークショップ』

1952年創立の劇団かかし座は、日本で最初にできた現代影絵の専門劇団。学校公演を主としながら、海外の芸術祭にも招聘されるなど、コロナ禍前には年間700ステージもの公演を行ってきた。そんな児童青少年を対象とする劇団の活動を知ってもらうとともに、普段はなかなか行けない地域でも活動を行いたいという思いから、岡山県、広島県、佐賀県、宮崎県、長崎県の全6会場の手影絵のワークショップを開催。劇団員の実演に始まり、キツネやカニなど馴染みの手影絵のレクチャー、左右の手でそれぞれの形を作り、組み合わせさせて何ができあがるかを考える「パズルゲーム」、手影絵パフォーマンスの練習と発表など、大人から子どもまで親子でもたっぷり楽しめる2時間となった。

●岡山会場
日程:2023年11月11日(土)
会場:岡山芸術創造劇場ハレノワ 第4練習室(岡山県岡山市)

●尾道会場
日程:2023年11月12日(日)
会場:尾道市立中央図書館 視聴覚ホール(広島県尾道市)

●武雄会場
日程:2023年12月16日(土)
会場:ケーブルワン・スポーツパーク(武雄市民体育館) サブアリーナ(佐賀県武雄市)

●都城会場
日程:2023年12月17日(日)
会場:都城総合文化ホール 練習室1(宮崎県都城)

●諫早会場
日程:2023年12月23日(土)
会場:諫早市小野ふれあい会館 研修室3,4(長崎県諫早市)

●壱岐会場
日程:2023年12月24日(日)
会場:壱岐の島ホール 102会議室(長崎県壱岐市)

<当日の様子>
<https://mirai-pjt.jp/n/n56c16278de4f>



団体からのメッセージ

通常の劇団活動では訪れることのない地方の中小都市で実施できたことは、大きな収穫でした。参加者からも、「プロの技を体験でき大変楽しかった」「次は是非公演を観たい」という声を多く頂きました。



劇団かかし座(神奈川県)

1952年創立の現代影絵専門劇団。当初はNHK専属としてテレビで影絵劇の上演を手がけ、60年代末から舞台活動を本格始動。独自の手法と洗練された表現で、子供向けの鑑賞教室から、アーティストのミュージックビデオやコンサート出演、影絵を紹介する出版物など、活動は多岐にわたる。特に、数十種類の動物の姿をパフォーマーの素手と身体のみで次々と見せていく手影絵パフォーマンス『Hand Shadows ANIMARE』は評価が高く、世界各地で好評を博している。

日本のプロの俳優に、韓国のトップレベルのレッスンを届ける

#ワークショップ #交流会 #経験者向け #ミュージカル #演技

● 日韓交流ミュージカル・ワークショップ
「ヤン・ジュンモの“シアターボイス”」

演劇公演の企画・プロデュースを行い、演劇ユニット「unrato」の主催でもある「アイオーン」が、俳優向けのワークショップと交流会を開催。18歳以上の経験者を対象に、キャリアごとの3クラスを用意し、ミュージカルで声を出すときの「ポジション」を学ぶ。講師は、2015年に帝国劇場ほかで上演されたミュージカル『レ・ミゼラブル』でジャン・バルジャンを演じ、韓国では俳優のみならず大学教授として指導も行っている、俳優のヤン・ジュンモ。一人ひとり、時間をかけてじっくりとアドバイスをを行い、日本語と他言語との発声方法の違いからアプローチした体験談や、公演中の喉を守る「朗らかに明るく声を出す」の大切さなどを伝えた。日本より専門的に学べる学校が圧倒的に多く、指導方法も確立している韓国ミュージカル界のレッスン。これまで日本で学びを深めてきた俳優にとっても、新しいチャンスとなった。

日程・プログラム:
●ヤング・クラス(デビュー5年以内)
2023年11月12日(日)
●ベーシック・クラス(キャリア10年以内)
2023年11月12日(日)
●レクチャー(日韓俳優交流会)
2023年11月12日(日)
●アドバンス・クラス(キャリア10年以上)
2023年11月13日(月)
会場:東京都大田区

<当日の様子>
<https://mirai-pjt.jp/n/n70757b627378>



団体からのメッセージ

ミュージカル俳優が相互に情報交換をする機会が少ないこと、世界先端的なレッスン内容や情報を共有する必要性を実感しました。今後、まだまだ伸びる可能性を持つ俳優は数多く、開かれたレッスンの場と情報共有の仕組みを検討していきたいと思いました。



株式会社 アイオーン(東京都)

演劇公演の企画・プロデュース、演劇ユニット unrato(アン・ラト)の製作・運営を行う。unratoは演出家・大河内直子とプロデューサー・田窪桜子による演劇ユニットで、日本初演の翻訳作や日本の既存作など良質な戯曲を発掘し上演。大河内が演出を務める本公演のほか、様々な演出家を迎えたプロデュース公演を上演。商業演劇、ミュージカル、新劇、小劇場、2.5次元など多彩なフィールドから若手俳優・スタッフを積極的に起用し演劇界内のジャンルの壁をなくし、重厚なセリフ劇に出会う機会の創出にも寄与している。また、PARCO STAGE『ブライTON・ビーチ回顧録』『幽霊はここにいる』、東宝ミュージカル『ダーウィン・ヤング』など外部公演の企画・プロデュースも手がける。

地方出身の経験や体験をもとに生みだした企画

#ワークショップ #交流会 #初心者OK #経験者向け #演技

劇団鹿殺しのマネジメントを行う「オフィス鹿」による、札幌、大阪、福岡でのワークショップと交流ミーティング。関西出身の劇団である経験や、地方出身の劇団員の声から、3都市に赴き、各地の演劇活動を活性化させる企画として開催された。演出家の菜月チョビによる初心者向け「身体ワークショップ」は、基礎的なストレッチやシアターゲームなどシンプルなメニューを行いながら、徹底的に「呼吸」を意識することで、「身体」の作り方、在り方を学ぶ。脚本家・演出家の丸尾丸一郎による、上級者向けの「テキストワークショップ」では戯曲を使用し、チームごとの発表を通して、本番稽古さながらの演出がつけられていく実践的な内容。それぞれワークショップと合わせて交流ミーティングも行うことで、生の声で意見交換や情報交換も行われる機会となった。

● OFFICE SHIKA PRODUCE「地域活性 演劇プログラム」

3都市 俳優ワークショップ

●札幌会場 2023年11月19日(日)

①A組(初心者向け)

②B組(経験者向け)

会場:カタリナスタジオ(北海道札幌市)

講師:A組 菜月チョビ、B組 丸尾丸一郎

●大阪会場 2023年12月6日(水)

①昼の部(俳優入門編)

②夜の部(創作実践編)

会場:大阪市立芸術創造館(大阪府大阪市)

講師:丸尾丸一郎

●福岡会場 2023年12月18日(月)

①昼の組(体と呼吸、声のWS その1)

②夜の組(体と呼吸、声のWS その2)

会場:PAPIO ビールーム 福岡千代音楽・演劇練習場(福岡県福岡市)

講師:菜月チョビ

【MIRAI Letterでのメッセージ】

12月18日の福岡WSに参加しました。普段WSは連月行われる事が多かったのですが、単月単時間は非常に参加しやすかったです。講師が鹿殺しさんという事でいい勉強になりました。またこういう機会があれば参加したいと思います。ありがとうございました。

<当日の様子>

https://mirai-pjt.jp/n/n78e4bd63f08c



団体からのメッセージ

大規模事業とリンクさせる活動を目標にしていたのですが、既に動いている事業の中に組み込むことがとても難しい印象でした。3地域の演劇人と、ワークショップだけでなく悩んでいることをヒアリングする時間も持てたことはとても有意義でした。



株式会社オフィス鹿(東京都)

劇団鹿殺しを主にした公演・イベント・ライブ活動のプロモーションを行う。劇団の旗揚げは2000年に関西で。その後、東京へ拠点を移しての劇団員での共同生活や、週6日間約1000回以上の路上パフォーマンス、インパクトの強い音楽劇的イベント出演など活気と熱気に溢れた活動で熱狂を生み出す。結成10年目にして劇団制作部を法人化した株式会社オフィス鹿を設立し、プロデュース公演を手掛けたり、商業舞台への所属脚本家/演出家/俳優/振付家/制作のマネジメントも行っている。

札幌の演劇環境を共に育てていくために

#ワークショップ #シンポジウム #交流会 #舞台監督 #制作 #広報 #地域密着 #演劇史 #実演あり

札幌を拠点に演劇制作を行うカンパニー「ラボチ」が行う、札幌演劇を次の世代に繋ぐための3つの企画。コロナ禍が奪った「若者が演劇をつくる体験」をなんとか埋めていきたいという想いをベースに、札幌演劇の流れを知る、魅力を考える、創作の基礎を学ぶの3軸で行う。1つ目は、札幌の演劇史と題し、「劇場の20年」「札幌演劇シーズンのこれから」を振り返る『シンポジウム』。2つ目は、若い演劇人に道外の劇団の公演を観てもらい、演劇の地域性や札幌の演劇の特性を話し合う『U29観劇サポート+座談会』。3つ目は、役者や演出家、劇作家と比べてなかなか学べる機会が少ない、舞台技術と制作の『スタッフ向けワークショップ』。札幌の演劇環境を残し、整えることで、若い人たちへ手渡していくための手がかりとなった。

● 札幌演劇いまとこれから01~03

01 シンポジウム「札幌の演劇史」

<1>「劇場の20年」 2024年1月5日(金)

会場:演劇専用小劇場 BLOCH(北海道札幌市)

登壇者:鶴岡ゆりか(演劇専用小劇場 BLOCH)、小島達子(tatt Inc./北八劇場アーティストティックコーディネーター)

聞き手:佐久間泉真(d-SAP/弦巻楽団)

<2>「札幌演劇シーズンのこれから」 2024年1月16日(火)

会場:シアターZOO(北海道札幌市)

登壇者:斎藤歩(札幌演劇シーズンプログラムディレクター)、太田真介(NPO法人コンカリーニョ/札幌演劇シーズン事務局)

02 U29限定 演劇の地域性について考える観劇&交流会

●2023年11月21日(火)

オパンボン創造社『幸演会』 野村有志(作・演出)

コーディネーター:佐久間泉真(d-SAP/弦巻楽団)

●2023年11月25日(土)

劇団こぶく劇場「ロマンス」 永山智行(作・演出)

コーディネーター:三瓶竜大(劇団清水企画/ポケット企画)

会場:シアターZOO(北海道札幌市)

03 スタッフワークショップ

●2023年12月22日(金)

舞台技術編 講師:上田知(舞台監督)

●2023年12月23日(土)制作・広報編

講師:小島達子(tatt Inc./ELEVEN NINES)、小室明子(ラボチ)、竹内麻希子(CAPUSLE)

会場:シアターZOO(北海道札幌市)

<当日の様子>

https://mirai-pjt.jp/n/nd9b8cf7f9b35



団体からのメッセージ

地方都市である札幌にも脈々と続いてきた演劇人たちの営みがあります。次世代へ手渡すための活動をしなければと考えつつ、主に経済的な観点から難しいという現状がありました。今回、活動のスタートを切ることができたことは、この柔軟な枠組みのおかげであると大変感謝しております。



ラボチ(北海道)

札幌で演劇を産業化していくことを目的に、2014年に小室明子が立ち上げた演劇制作カンパニー。働く人たちにこそ演劇を楽しんでほしいという意味と、札幌演劇の発展のために身を粉にして働きますという意味を含め、ロシア語で「労働者」を意味する「ラボーチ」から命名した。演劇公演の企画制作に加え、全国から講師を招いてのワークショップ実施や、札幌の演劇シーンを盛り上げるイベント開催など活動は多岐にわたり、札幌演劇界に貢献している。

書いたものをプロが読む、その体験談がもたらす芸術世界への一歩

#ワークショップ #子ども向け #学生向け #初心者OK #戯曲 #実演あり

● こども戯曲ワークショップ「演劇の台本を書いてみよう」

名古屋を拠点に活動する「劇団あおきりみかん」による、小学1年生から高校3年生までを対象にした戯曲ワークショップ。講師は、劇団主宰で子供演劇の活動も多く行っている鹿目由紀が務めた。参加者は戯曲の成り立ち・あり方などについて説明を受けた後、アドバイスをもらいながら5分前後の戯曲を書き上げる。生まれた戯曲は、すべてその場でおおきりみかんの俳優たちが朗読し、さらに選ばれたいくつかの作品は、小劇場G/PITで上演される「リーディング発表会」にて、見学者の前でも俳優によって実演された。自分の作品がプロに読まれ、劇場で発表されるという体験は、芸術に携わる第一歩として未来を左右する大きな機会となっただろう。

日程・プログラム:

こども戯曲ワークショップ

●クラス1(小学1~3年生)

2023年11月23日(木・祝)

●クラス2(小学4年生~中学3年生)

2023年11月23日(木・祝)、25日(土)

●クラス3(高校1~3年生)

2023年11月23日(木・祝)、25日(土)

リーディング発表会 2023年12月22日(金)

会場:G/PIT(愛知県名古屋)

ワークショップ講師:鹿目由紀(劇団あおきりみかん)

リーディング発表会出演:劇団あおきりみかん

【参加者の声】

・はじめて自分の書いた台本が発表されてうれしかった。

・演劇部の台本を書く際の参考になった。

・台本ができるか不安だったけど、ちゃんと最後までかけてほっとした。

・タイトルを迷って最後に変更したが、良い効果になった。

<当日の様子>

https://mirai-pjt.jp/n/n7fee39dc52fe



団体からのメッセージ

今回のプロジェクトでは日本の演劇の未来につながる事業を実施することが出来た。子どもたちが楽しく、文化芸術に触れる機会の創出には大きな意義があると感じました。



劇団あおきりみかん(愛知県)

1998年に愛知・南山大学出身者を中心に結成。会話劇を軸に関係のズレの妙を描いた作品を多く上演。主宰で劇作・演出を担当する鹿目由紀は、劇作家協会新人戯曲賞を受賞し、劇団外の演劇公演の脚本・演出からテレビ、ラジオの脚本まで幅広く外部活動を手がけ、中京圏の演劇シーンを牽引する存在である。2023年9月に劇団公演を名古屋の小劇場では異例の1ヶ月ロングラン上演。

“誰のことも置いていかない”ダンスの遊び場

#ワークショップ #子ども向け #親子向け #障がい者向け #初心者OK #ダンス

● インクルーシブ&異業種コラボダンスワークショップツアー「CAT-A-TACのアソビパーク」

“誰もが気軽に参加できるダンス公演やワークショップ”をモットーに、これまで様々な試みを行ってきたダンスカンパニーCAT-A-TAC。「未就学だから行けない」「障がいがあるから楽しめない不安」「都市部が遠く、芸術体験に触れる機会がない」など、日頃、劇場やワークショップの場で窮屈な想いをされている方々に、何が起きてもウエルカムで自由な芸術体験ができる空間を提供したいと、3つの地域での企画を行った。当事者の声や、その道のプロとの対話によって組まれたプログラムは、ダンスをただ一方的に教えるのではなく、「現場で起きていること」をリアルに汲み取り、その場に合った試みとなっている。“誰のことも置いていかない”ダンスの遊び場での楽しい体験が、参加者の次への挑戦にも繋がっていくことが期待される。

●東京会場<発達障がい児親子向けワークショップ>

CAT-A-TAC(ダンス)×あかねの会(発達支援)

日程:2023年12月3日(日)

会場:豊玉第二小学校 体育館(東京都練馬区)

講師:藤田善宏(CAT-A-TAC主宰、コンドルズメンバー/振付家・演出家・ダンサー・グッズデザイナー)

アシスタント:酒井大輝(ダンサー、運動療育士)、渡邊未有(ダンサー)

●群馬会場<幼稚園児向け 異業種コラボワークショップ>

CAT-A-TAC(ダンス・音楽)×清心幼稚園(幼児教育)×郡司明子(美術教育)

日程:2024年1月13日(土)

①音楽×ダンス コラボワークショップ

②美術×ダンス コラボワークショップ

会場:日本トーターグリーンドーム前橋(群馬県前橋市)

講師:藤田善宏(CAT-A-TAC主宰、コンドルズメンバー/振付家・演出家・ダンサー・グッズデザイナー)

アシスタント:酒井大輝(ダンサー、運動療育士)、白石美徳(ミュージシャン、パーカッションリスト)、渡邊未有(ダンサー)

●島根会場<特別支援学校児童向け 異業種コラボワークショップ>

CAT-A-TAC(ダンス)×島根県立益田養護学校(特別支援学校)

日程:2024年1月30日(火)

会場:島根県立益田養護学校(島根県益田市)

講師:藤田善宏(CAT-A-TAC主宰、コンドルズメンバー/振付家・演出家・ダンサー・グッズデザイナー)

アシスタント:酒井大輝(ダンサー、運動療育士)

協力:福岡一(島根県芸術文化センター グラントウ)

<当日の様子>

https://mirai-pjt.jp/n/nf2dbf973077f



団体からのメッセージ

アーティストが現場の声とリアルに向き合い、地域の福祉施設や教育者と共に文化芸術を構築し、地域に残していく。時間と予算がかかる企画だが、今回の助成により大きな一歩を踏み出すことができた。感謝です。



CAT-A-TAC(東京都)

コンドルズのメンバーでもある藤田善宏主宰のダンスカンパニーCAT-A-TACの運営や、藤田やメンバーのマネジメント、公演&イベントプロデュースなどを担う。CAT-A-TACは幅広い世代が楽しめる身体表現を駆使した無声ダンス劇のほか、伝統芸能とのコラボレーションも手がけるなど、エンターテインメントとしてのダンス作品を上演。また子どもや障がいのある方向けのワークショップを全国各地で開催、地域イベントへの振付提供・出演など、ダンスの裾野を広げる活動にも力を入れている。

戯曲の読み方を知ることで広がる、演劇の楽しみ方

#ワークショップ #初心者OK #リーディング #戯曲

- 「戯曲」を読み解くワークショップ
三島由紀夫『鹿鳴館』を読む！

劇作家・演出家・俳優・プロデューサーの丸尾聡氏を中心とした演劇企画集団「オフィスプロジェクトM」が主催するワークショップ。三島由紀夫の戯曲『鹿鳴館』（1956年初演）を4日間かけて読み解く中で、基本的な戯曲の読み方を知り、演劇の楽しみ方を広げ、観劇のきっかけにしたいという想いから企画された。参加者の演劇経験は問わず、作り手から観客、部活動で演劇に携わる学生などにも参加を呼びかけ、幅広い年齢層が集まった。今とは時代背景や文化が異なる約70年前の古典戯曲を読み解き、新しい視点を得たり、ディスカッションをしたりといった楽しさを知ることができる今回の試み。海外に比べて新作戯曲が発表されるペースが早い日本の演劇界においては、これからの演劇の可能性を増やし、耕すことにも繋がる一歩となった。

日程：2023年12月7日(木)～10日(日)
会場：JMS アステールプラザ(広島県広島市)
講師：丸尾聡(オフィスプロジェクトM)、川口典成(トナルカ・パッカーン)、江花実里(架空畳)

【MIRAI Letterでのメッセージ】

・お陰様で今まで知らなかった素晴らしい戯曲に出会えたばかりでなく、戯曲の構造や作家側の視点にも触れることができ、何より、それを東京の講師の方々と広島島の演劇人たちと一緒に読み解くことができました。地方住みの私には滅多にない機会、しかも参加費が無料という事は、それだけ舞台芸術を大切に思っている人達が演劇の未来のために投資をして下さっているという事です。ですから私は、その思いを受け止め、色々壁はあれど負けずに、良い舞台を作る人を目指し続けたいと願います。本当に有難うございました。

・濃厚な四日間をありがとうございました。日本語の会話文なので読んでしまう、読み進めて読みとばしてしまう。難しいものですね。参加させていただいてよかったです。よい時間をいただきました。感謝しております。

<当日の様子>
<https://mirai-pjt.jp/n/n90e28de4d616>



団体からのメッセージ

演劇の一つの楽しみ方として、戯曲をいかに面白く読めるか提案する、それがさらに演劇そのものを楽しむことに繋がっていくのだということが、参加者の声や変化を見ながら実感することができました。



オフィスプロジェクトM(東京都)

劇作家・演出家・俳優・シナリオライターの丸尾聡を中心とした演劇企画集団。活動の始まりは1986年に旗揚げした「劇団プロジェクトM」。1993年からは「世の中と演劇するオフィスプロジェクトM」としてプロデュース公演を手がけるようになり、2017年から5年間の活動休止を経て、2022年に現在の演劇企画集団として活動を再開した。毎回「世の中」を相手にした3本の作品を上演する『世の中と演劇する The three plays』シリーズなどを企画。

小学校で行うワークショップ&小作品上演を、
こどももおとなも一緒に楽しもう

#ワークショップ #子ども向け #親子向け #初心者OK #演技 #実演あり

- はじめてのエンゲキ ～こどももおとなも一緒に楽しもう～

1984年旗揚げの「劇団 山の手事情社」が香川、岡山、島根で行った、小学生以上向け(未就学児は応相談)の「体験&観るワークショップ」。劇団が小学校で実施しているプログラムをベースに、前半60分は「左右非対称な動き」や「スローモーション歩行」など、俳優が普段から行う基礎練習を元にしたワークショップ、後半30分は小作品『走れメロス』の上演を観劇するという2ステップで構成された。体験と観劇をセットで行うことで、見本となる俳優の動きと、自分の身体の動きとを見比べたり、俳優の身体能力の高さに驚かされたり、集中力の高まった状態で作品が鑑賞される。照明や衣装もなく身体ひとつで行う演技は、磨き抜かれた技術が光り、子供から大人まで皆が夢中に。「自分もやってみよう」「もっと観てみたい」という演劇への興味を育て、劇場への入口を開く機会となった。

●香川会場
日程：2023年12月16日(土)
会場：IKODE 瓦町 多目的スタジオ(香川県高松市)

●岡山会場
日程：2023年12月17日(日)
会場：やかげ文化センター ホール(岡山県小田郡)

●益田会場
日程：2024年1月20日(土)
会場：島根県芸術文化センター グラントワ 多目的ギャラリー(島根県益田市)

●松江会場
日程：2024年1月21日(日)
会場：島根県民会館 多目的ホール(島根県松江市)

講師・出演：劇団 山の手事情社

<当日の様子>
<https://mirai-pjt.jp/n/n0b459d0a60b0>



団体からのメッセージ

参加者の笑顔で帰っていかれる姿が嬉しかったです。これまで「演劇」に出会っていないだけ。そんな方が日本各地にいるように思います。この企画に参加し、創客について改めて考える良い機会になりました。



劇団 山の手事情社(東京都)

1984年に早稲田大学演劇研究会を母体に旗揚げ。活動初期より台本に依拠せず、俳優のアイデアをもとにシーンを立ちあげて構成する手法を実践し、集団創作的な志向性を高めていた。その手法を体系化したものが「山の手メソッド」と呼ばれる独自の俳優養成法である。なかでも山の手事情社の代名詞的な演技メソッド《四畳半》は国外でも広く知られ、2000年代以降ルーマニア・シビウ国際演劇祭をはじめ、海外公演を精力的に行っている。

舞台芸術関係者の知見を持ち寄り、改めて学ぶバリアフリー

#シンポジウム #交流会 #劇場関係者向け #制作 #アクセシビリティ

- 【舞台関係者向け研修・交流会】
舞台芸術のバリアはどこにあるのか？
障害の社会モデルから考える合理的配慮

パフォーミングアーツの制作会社「プリコグ」が開催する、舞台芸術関係者向けの研修・交流会。2024年4月から民間事業者にも義務付けられる、民間事業者による障害のある方への「合理的配慮」に関して、舞台芸術関係者の経験や知見をもとに、「そもそも舞台芸術におけるバリアはどこにあるのか？」を考えていく。4年ほど前から障害のある方との芸術活動に力を入れてきたプリコグが、これまでの活動で得た知見や疑問を集めた内容は、舞台芸術の現場のリアルに即した学びを得ることができる。東京大学特任准教授の飯野由里子による講座では、「合理的配慮は、当事者との建設的な対話に基づいて、無理のない範囲で調整・提供されるものである」ということが共有され、「合理的配慮」や「バリアフリー」に対する心理的ハードルの緩和に繋がった。その後のトークセッションでは、役者/手話エンターテイナーの那須映里をゲストに迎え、劇場関係者に響く当事者のリアルな意見が共有された。舞台芸術のバリアフリー化に取り組もうとする業界関係者同士が集まったことで生まれたネットワークは、今後の課題解決にも役立つことが期待される。

日程：2023年12月21日(木)
会場：ロームシアター京都 会議室2(京都府京都市)
講師：飯野由里子(東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター特任准教授)
ゲスト登壇：那須映里(役者/手話エンターテイナー)
進行：兵藤菜衣(株式会社 precog バリアフリーコミュニケーション事業部) アクセシビリティ:手話通訳あり。会場最寄り駅からの送迎など。

【参加者の声】

- ・合理的配慮に対して、良い意味で心理的なハードルが下がった。できることから始めていきたい。
- ・社会的な義務というカタチ言葉以上に、みんなで一緒に舞台を楽しめるような環境をつくりたい、という気持ちが一番にあります。ディスカッションができる研修会を引き続き開催いただけたら幸いです。
- ・わかりやすい説明をお聴きし、動画を見せていただき、理解がすすみました。

<当日の様子>
<https://www.mirai-pjt.jp/n/2023report19>



団体からのメッセージ

近年当団体が取り組んできた合理的配慮やバリアフリーにおいて、同じ課題を感じている業界関係者と共に今後の舞台芸術におけるバリアフリーのあり方について考える場をつくることができました。様々な芸術団体が、知見やノウハウを業界内外に共有・発信できるような機会が続き、業界がより活性化していくことを期待しています。



株式会社 precog(東京都)

芸術祭、映画祭、演劇・ダンス公演、イベント、スクール事業など様々なアートプロジェクトの企画・運営を行う制作会社。国内外の様々なジャンルのクリエイターや専門家との協働や、業界を越えた人材の育成や中間支援事業にも尽力。近年はアートと福祉の取り組みにも力を入れ、バリアフリー型動画配信プラットフォーム「THEATRE for ALL」の運営や「厚生労働省 障害者芸術文化活動普及支援事業」全国連携事務局運営(令和3年より)など芸術の枠組みに留まらない活動に積極的に取り組み、新たな知見や視点を切り拓いている。

東京都北区で行う
演劇未経験者向けワークショップ

#ワークショップ #初心者OK #地域密着 #アクション #演技

- 北区演劇体験(演技コース・アクションコース)

舞台プロデュースやライバー(配信者)マネジメントを行う会社「ネリム」による、2つのワークショップ。演劇に触れる機会を増やし、将来の観客を増やすことに繋げたいという想いから、「地域のサッカー体験のように気軽に参加してほしい」と企画された。講師陣・会場をはじめ、すみずみまで北区にこだわる地域密着型の内容となっている。北区ミステリー文学大賞の舞台化を担当した演出家の深寅芥による「演技コース」で行うのは、演技のフリースタイル(=即興演劇)。ヒップホップのMCバトルの要素を取り入れ、演技において役者自身の経験とそれを意識する重要性が伝えられた。★☆北区 AKT STAGE の宮崎聡美と池田大輔による「アクションコース」では、殺陣の基本となる型や、5手の殺陣などをレクチャー。つかこうへい作品を上演する、★☆北区 AKT STAGE の殺陣を体験できる機会となった。それぞれ小学3年生以上を対象に、未経験者も参加できる本企画。参加者が客観的に自分を見つめたり、未来の演劇人が参考にしたりできるように、レッスンの動画はYouTubeにもアップされている。

●演技コース
日程：2023年12月23日(土)、24日(日)、
2024年1月6日(土)、7日(日)
講師：演技コース：深寅芥(演出家)

●アクションコース
日程：2023年12月23日(土)、24日(日)、
2024年1月6日(土)、7日(日)
講師：宮崎聡美・池田大輔(★☆北区 AKT STAGE)

会場：上十条ふれあい館 第一ホール(東京都北区)

<当日の様子>
<https://www.mirai-pjt.jp/n/2023report20>



団体からのメッセージ

改めて地元・地域に密着した演技WSの開催などの草の根活動が、今後の舞台芸術団体にとって必要な行動ではないかと改めて感じました。更に認知度を広げる為にも継続性が必要だと思います。サテライトに次回も参加させて頂ければと思います。



株式会社ネリム(東京都)

演出家の深寅芥が設立し、演劇公演を中心としたイベントのプロデュースや配信サイトでの配信者のマネジメントを行う。舞台公演は年2公演のペースで手掛け、2.5次元劇団「劇団ドリームクラブ」の運営、小説の舞台化、オリジナル作品の上演など幅広く企画。2020年にコロナ禍で立ち上げた「サヨナラワーク」ではオンライン演劇を行ない、第4回公演での初の劇場公演の際には映像表現も多用するなど、ジャンルを越境する試みにも力を入れている。

繋がりを取り戻すことが、いい作品づくりにもつながる

#ワークショップ #地域密着 #戯曲 #演出 #舞台監督 #舞台美術 #照明 #映像

● 東北六県武者修行 みちのく演劇キャラバン
～スタッフワーク入門の道～

東日本大震災直後2011年4月に「震災後の仙台、そして日本を励ましたい」と結成し、仙台を拠点に活動する「劇団 短距離男道ミサイル」。東京の演劇業界で活躍している東北各県出身のスタッフを講師に招き、東北6県で「里帰り」ワークショップを実施した。若手演劇人が東北6県を舞台にお芝居を上演するイベント「ミチゲキ」なども行われているように、東北は「県」ではなく「東北」という単位での繋がりが特徴的なエリア。コロナ禍を経て細くなってしまったその繋がりを、「いま改めて結びなおしたい」という想いから企画されている。地域に密着した創作活動や、東京・各県の枠組みを外した演劇活動についても語られ、舞台芸術作品を上演するにあたり不可欠なスタッフワーク同士の繋がりが強化された。

日程:2023年12月26日(火)～29日(金)、2024年1月4日(木)～8日(月・祝)

●【宮城県】舞台監督
会場:せんだい演劇工房10-BOX(宮城県仙台市)
ナビゲーター:福澤諭志(舞台監督)
ゲスト:武居卓、草光純太、細川貴司(シアターランボン)

●【福島県】映像
会場:いわきPIT(福島県いわき市) 講師:横山翼(映像)、加藤学(殺陣師)

●【青森県】演出
会場:八戸ポータルミュージアムはっち(青森県八戸市)
講師:中屋敷法仁(演出家)

●【山形県】脚本
会場:山形市生涯学習センター 遊学館(山形県山形市)
講師:須貝英(脚本家)

●【岩手県】照明
会場:いわてアートサポートセンター 風のスタジオ(岩手県肴町)
講師:工藤雅弘(照明家)、袴田長武(舞台美術家)

●【秋田県】舞台美術
会場:あきた芸術劇場ミルハス(秋田県秋田市) 講師:袴田長武(舞台美術家)

【MIRAI Letterでのメッセージ】

・いわき市で開催されたワークショップに参加しました。プロの人たちがどうやって殺陣と音を重ねあわせてるのか、その舞台裏を知れたこと、大変興味深かったです。地道な作業だな、自分だったら途中で飽きちゃう、など思いながら、殺陣の動きは指導される方々みな親切でていねいに教えてくれたので不安なくできました。「見る」と「実際に動く」とは当然ながら違うので、その違いを体験できたのも貴重でした。このような企画がありましたらまたぜひ参加したいです。

<当日の様子>
<https://www.mirai-pjt.jp/n/2023report24>



団体からのメッセージ

企画書、報告書等わかりやすく記入しやすい様式でしたので、このような形で今後も継続いただくと、地域で活動する劇団・団体にとって活用しがいのあるプロジェクトだと感じました。



劇団 短距離男道ミサイル(宮城県)

2011年4月、東日本大震災直後に仙台の若手男性俳優(当時)によって結成。東北の風土に磨かれた作品性に重きを置き、汗、熱気、笑い、勢い、切実さ、男達の裸体など生命力と瞬発力と爆発力の溢れる作風で地元のみならず全国で話題とファンを増やす。「CoRich 舞台芸術まつり! 2017春」「若手演出家コンクール2017」での受賞など作品が目目されるほか、アウトリーチ、学校や児童館への派遣、文化施設との連携、音楽ライブやお祭りへの出演など活動は多岐にわたる。

演劇の根幹が抜けたものは届かない。
そのうえで子ども向け演劇とは?

#ワークショップ #子ども向け演劇 #初心者OK #演技 #戯曲 #演出 #実演あり

● くちびるの会 ワークショップ
「子ども向け演劇を体験!」

劇作家・演出家・脚本家の山本タカが代表を務める創作拠点「くちびるの会」。2019年から上演を行っている児童向け演劇表現「紙おしばい」を通して、子ども向け演劇に関心のある参加者とともに、「大人向け演劇のアクトと子ども向け演劇のアクトはどこが繋がっているのか、どこを子ども向けにするべきなのか」を考えるワークショップを実施した。紙おしばいの台本を読み、グループごとに発表を行う中で、作劇のポイントや興味を引くための仕掛け、演出のテクニックをはじめ、子どもたちにアプローチする様々な方法が伝えられる。「リアル」な感情表現の大切さや、声のボリュームのコントロール、感情のジェットコースターを体験させる構成など、どれもくちびるの会のこれまでの上演実績があるからこそできる具体的なアドバイスばかり。既に子どもたちに関わっている参加者も多い中、学びの多い内容となった。いわゆる子どもだましではない作品作りのノウハウを共有することは、より多くの子ども向け演劇の担い手が生まれるとともに、将来の演劇人口の拡大や創客にまで繋がることが期待される。

日程:2023年12月27日(水)
会場:山吹ファクトリー(東京都新宿区)
ファシリテーター:山本タカ(くちびるの会 代表/脚本・演出)
アシスタント:北澤小枝子、橋花梨、永田涼香

【MIRAI Letterでのメッセージ】

・やってきたこと、やりたいこと、伝えたいこと、などなど、とても明確でわかりやすくとても参考になりました。公演をやる上で注意していること(子供に対して)などなど細かい部分まで話を聞いて良かったです。子供の頃に観て印象に残ったものなど今でもハッキリ覚えています。豊かな時間をたくさん作っていただけると、思いもふくらむいい機会でした。続けてほしいプロジェクトだと思います。

・今後、子ども向け演劇に関われたらと思えるいいきっかけを頂きました。色々な演劇があって、多くの人に届けることはむずかしいですが、少しでも触れる機会が身近になればいいなと思ってます。またこういったワークショップを支えていただけたらと思いました。

<当日の様子>
<http://www.mirai-pjt.jp/n/2023report21>



団体からのメッセージ

未来プロジェクトのバックアップのおかげで、入念な準備を整えWSをすることができ、団体として、レポーターにもできるWSプログラムができました。



くちびるの会(東京都)

劇作家・演出家の山本タカが2014年に創作拠点として結成。結成当初よりファンタジー色の強い作品を数多く上演。近年は、日常の生活を舞台に、現実を超えた仕掛けとしてファンタジーを駆使し、世界や人間を浮き彫りにする作品を創作している。日々の些細な葛藤や苦勞を、懸命に生き抜こうとする人々を、愛らしく描く作風が特徴。また、公共劇場などと連携し、主に未就学児～小学生を対象に、紙芝居と演劇を掛け合わせた「紙おしばい」というオリジナルの演劇作品の創作・上演を定期的に実施するなど、活動の幅を広げている。

未来に繋がる「地域活性」を

#ワークショップ #地域密着 #合宿 #演技 #戯曲 #実演あり

● 豊岡俳優キャンプ
● 豊岡劇作家キャンプ

かねてより若手育成に注力してきたこまばアゴラ劇場が新たに行うのは、平田オリザが主任講師を務める「俳優キャンプ」&「劇作家キャンプ」。コロナ禍では実現困難だった短期合宿型ワークショップで、実践的な技術取得を目指す場となった。単なる技術面の「人材育成」だけに留まらず、参加者が互いの状況や創作における意見を情報交換したり、豊岡演劇祭の盛り上がりも記憶に新しい現地で児童劇団を観劇したり、芸術文化観光専門職大学の施設見学、最終日には地元の観客を募った発表会も行うなど、人や地域との出会いと新たなネットワークも創出する。演劇の先進国である欧米では、本企画のような合宿スタイルでの集中的なワークショップも多いとのこと。数日間みっちり創作に励む体験は、各個人の学びとともに、ひいては日本の舞台芸術の未来にも繋がる貴重な機会となった。

豊岡俳優キャンプ
日程:2024年1月5日(金)～1月8日(月・祝)
会場:江原河畔劇場(兵庫県豊岡市)
講師:平田オリザ(劇作家・演出家・青年団主宰)

豊岡劇作家キャンプ
日程:2024年1月26日(金)～1月28日(日)
会場:江原河畔劇場(兵庫県豊岡市)
講師:平田オリザ(劇作家・演出家・青年団主宰)

<当日の様子>
<https://www.mirai-pjt.jp/n/2023report23>



団体からのメッセージ

全国から価値観の異なる者が集まり短期間で創作をする時間に意義を感じた。マスタークラス開講希望の声もあり、今後は、発展型クラスの開講や初心者向け創作WSへも注力したい。



青年団/有限会社アゴラ企画(東京都)

青年団は劇作家・演出家の平田オリザを中心に1982年に結成。平田が提唱した「現代口語演劇理論」を通じた創作・作品発表を行い、その理論は後の世代に今なお多大な影響を与えている。アゴラ企画が運営する「こまばアゴラ劇場」は平田が芸術総監督を務め、主催公演を中心としたラインナップ制度を敷き、観客向けの支援会員制度を整えるなど、貸館中心の日本の劇場システムとは一線を画す活動を続けてきたが、2024年5月末での閉館が発表された。

未来の演劇の可能性についてあらゆる視点からボーダレスに

#シンポジウム #地域密着 #演劇史 #アーカイブ

● シンポジウム
「京都から見た関西の舞台芸術の歴史と未来について」

THEATRE E9 KYOTOにて行われた、連続シンポジウム。2部に分けてテーマと登壇者を変え、アーツシード京都のこれまでの取り組みや、京都・関西に特化した小劇場演劇の歴史について触れる。京都・大阪を中心に幅広い年齢の演劇人や演劇ファンが参加した。第1部のテーマは「アーカイブプロジェクト」。今年5周年を迎える THEATRE E9 KYOTO が開館以来、京都市立芸術大学とともに積み重ねてきた記録映像や広報物などの貴重なデジタルアーカイブを元に、アーカイブすることへの疑問や、アーカイブの活用法・残し方、コストや労力面での課題など、ただ記録するだけではない一歩先に進んだ議論が行われた。第2部のテーマは「京都・関西の演劇史」。1980年代から2000年代までの関西の小劇場の歴史が語られ、コロナ禍で旗揚げ期にダメージを負った今の若い演劇人にもメッセージが送られた。シンポジウムを通して課題が可視化され、京都・関西の舞台芸術の将来に繋がる「土壌づくり」の機会となったはずである。

日程:2024年1月9日(火)
会場:THEATRE E9 KYOTO(京都府京都市)

登壇者:
●第1部「THEATRE E9 KYOTO アーカイブプロジェクトについて」
佐藤知久(京都市立芸術大学芸術資源研究センター専任研究員・教授)、
新里直之(京都芸術大学舞台芸術研究センター研究職員)、
福井裕孝(演出家・THEATRE E9 KYOTO アソシエイトアーティスト)、
駒場梨香(脚本家・演出家・世界平和書店代表)、
あごうさとし(THEATRE E9 KYOTO 芸術監督)
●第2部「京都・関西の演劇史について」
九鬼葉子(演劇評論家・大阪芸大短期大学部教授)、畑律江(毎日新聞客員編集委員)、
あごうさとし(THEATRE E9 KYOTO 芸術監督)、
蔭山陽太(THEATRE E9 KYOTO 支配人)

【参加者の声】

・関西小劇場史を見つめ直すと同時に、若い世代が集い今後の活動について議論を交わす素晴らしい機会でした。(キャメロン瀬藤謙友(扇町ミュージアムキューブ))
・元々資料などで知ってはいても実際に体験された方のお話を聞くことによりかなりクリアなる部分が多くあり、本当に有意義な時間であった。(川村智基(餓鬼の断食))
・第1部では、意味のあるアーカイブを行うにあたって、何をどのように記録して、誰が何のために継承するかという視点は重要だと感じた。その中で定点観測の重要性も感じた。第2部では、文化庁京都移転や、地方分散が叫ばれて久しい中、東京一極集中が加速している現状も感じた。そのなかで地域を動かすものは熱い思いを持った人たちと、「連帯」なのではとも感じた。(渡邊裕史(ソノノチ))
・私が動くウイングフィールドも2022年に開館30年を迎え、アーカイブや関西の演劇史について考える機会を得た。今後は劇場間や業界全体を通してのアーカイブについても考えてみたい。(泉宗良(うさぎの喘ぎ))

<当日の様子>
<https://www.mirai-pjt.jp/n/2023report22>



団体からのメッセージ

単独での実施が難しい企画が今プロジェクトにより実現できました。民間劇場が公演事業以外で助成を受けられる機会は限られており、今回の成果が今後に繋がることを願っております。



一般社団法人アーツシード京都(京都府)

京都市・東九条の小劇場「THEATRE E9 KYOTO」とスタジオ「studio seedbox」の運営母体。THEATRE E9 KYOTOは、2017年のアトリエ劇研の閉館など京都の小劇場が相次いで閉館する中、「100年続く小劇場」を合言葉に、クラウドファンディングで広範な支援を募り、2019年にオープン。あごうさとし芸術監督のもと、100席弱の小空間で、主催事業や公募による提携事業を組み合わせ、舞台芸術だけでなくジャンルを横断した作品など意欲的なラインナップを展開する。

次の100年の演劇を考えたい

#ワークショップ#トークショー#音楽#演出#制作#メディア#哲学

●劇団あはひによるワークショップとトークイベント
「劇の交差点」

メンバー全員1998年生まれのアーティストグループ「劇団あはひ」による、ワークショップとトークイベント。コロナ禍を経て演劇活動を行う学生が減っている現状を知り、「これから演劇を続けていかならばどういうやり方がいいのかを、一緒に考えていける機会にしたい」と企画した。根底に流れているテーマは「次の100年の演劇を考えたい」。現在ある日本の劇団のシステムと同じカタチでは続けていけない時期に入ったのではないかとこの思いから、演劇とは異なるジャンルをテーマに据える企画も、劇団のクリエイションメンバーから持ち寄られた。フランス哲学研究者の渡名喜庸哲を招き、哲学的な観点から「人々が集まることの意義」を考えるトークイベントや、映像ディレクターの須藤崇規を講師に演劇に「メディア」を取り入れる新しい方法を考えるワークショップなど、参加者が各講座で学んだことをそれぞれの団体に持ち帰り、若手演劇人から新しい表現が生まれてくることが期待される。

《広島》
●ワークショップ「からだで考えるために」
日程：2024年1月22日(月)
講師：松尾敬太郎(劇団あはひ・俳優)
会場：JMSアステールプラザ リハーサル室(広島県広島市)

《東京》
●ワークショップ「メディアで演劇」
日程：2024年1月24日(水)
講師：須藤崇規(映像ディレクター)

●トークイベント「哲学を演劇する」
日程：2024年1月25日(木)
ゲスト：渡名喜庸哲(立教大学文学部教授)
司会・キュレーション：小名洋脩(劇団あはひ・ドラマトゥルク)

●ワークショップ「規則から作る/規則を考える」
日程：2024年1月26日(金)
講師：川村隆太郎(音楽家)

●トークイベント「劇団の集団戦略」
日程：2024年1月27日(土)
ゲスト：坂本もも(合同会社範宙遊泳代表・範宙遊泳プロデューサー・ロコ制作)
司会：高本彩恵(劇団あはひ・制作)

●ワークショップ「「写す」から「表す」へ」
日程：2024年1月27日(土)
講師：大塚健太郎(劇団あはひ・主宰/劇作家・演出家)
会場：早稲田小劇場どらま館(東京都新宿区)

<当日の様子>
<https://www.mirai-pjt.jp/n/2023report25>



団体からのメッセージ

無料でのWSの実施は、主に10~20代(同世代)の参加者と講師クリエイター・団体が「教える/教わる」という関係性を超え、多様な角度からともに演劇を考える、試行錯誤することができた貴重な場になりました。



劇団あはひ(東京都)

能や小説など東西の古典をベースに現代的な題材や価値観を盛り込んだ作品を上演。脚本、俳優、美術、衣装など様々な要素が生と死のあわいを漂うように存在する作風で評価を得ていく。早稲田大学在学中の旗揚げ翌年に長編2作目で「CoRich舞台芸術まつり! 2019春」にて学生団体(当時)として初のグランプリを受賞。2020年に本多劇場に史上最年少で進出、2022年に東京芸術劇場主催の《芸劇eyes》に選出されるなど各方面から注目を浴びている。

ポータルサイト



広報事業として開設したポータルサイトでは、公演情報、アートキャラバン・サテライト企画紹介、事務局レポートや、特集記事など、計196件のコンテンツを公開。地域、内容、事業、年度のフィルター機能で検索性を高め、「日本の演劇」未来プロジェクトのこれまでの取り組みを網羅した情報サイトとしてご活用いただけます。

公演事業

事業フィルターにて公演事業を選択すると、アートキャラバン事業に参加した公演概要をご覧ください。年度フィルターもご活用いただけます。

事業 ▶ 公演事業 年度 ▶ 2023年度

アートキャラバン・サテライト

事業フィルターにて連携事業を選択すると、アートキャラバン・サテライト企画の情報をご覧ください。また、内容フィルターにてイベントを選択すると各企画の詳細が、レポートを選択すると企画実施の様子をお伝えした「日本の演劇」未来プロジェクト事務局員によるレポートをお読みいただけます。

各企画詳細

事業 ▶ 連携事業 内容 ▶ イベント

事務局レポート

事業 ▶ 連携事業 内容 ▶ レポート

広報事業

2022年度版、2023年度版「みらいジャーナル」をダウンロードできます。

事業 ▶ 広報事業 年度 ▶ 2022年度 2023年度

「日本の演劇」未来プロジェクト公式サイト

<https://www.mirai-pjt.jp/>



シン・つながりプロジェクト

文化芸術関係者の力を合わせ、コロナ禍からの文化芸術活動の再興を力強く実現することを目指し、次世代を担う横のつながり創出を目的として「シン・つながりプロジェクト」を発足しました。11社28名の若手制作者やプロデューサーが集まり、会社の枠を超えて現代の舞台芸術界における懸念点や問題について定期的に意見交換を開催。プロジェクトには「はたらく環境」「創客」「スキルアップ」「就労支援」の4つのプロジェクトチームが設立され、オンラインミーティングを実施する中で個人の課題や、業界全体の問題点などが洗い出され、今後も継続した活動を検討しています。

▼シン・つながりプロジェクト 参加社

阪急電鉄、シーエイティブロデューズ、東宝、サンライズプロモーション大阪、キョードーファクトリー、ホリプロ、ネルケプランニング、松竹、明治座、梅田芸術劇場、パルコ

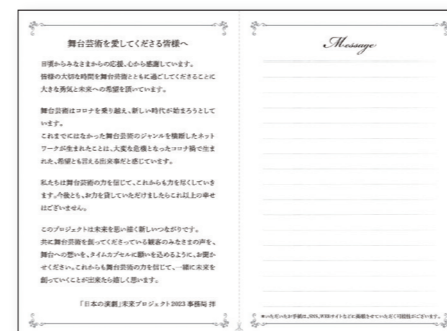
▼実施概要

全体共有会	2023年6月26日、7月19日、11月30日、2024年1月26日 近況報告、感染症対策、インボイス対応などを話し合った。
就労支援PT	2023年9月25日、10月19日、11月13日、2024年1月25日 新卒の方に向けた就労支援の場がどうあるべきか、フリーランスの方と現場とのマッチングサイト構想などを話し合った。
創客PT	2023年9月25日、10月19日、11月14日、2024年1月9日 業界全体での創客の方法について考え、他業界のマーケティングなどからも学ぶことはないかなどを話し合った。
はたらく環境PT	2023年10月23日、2024年1月9日 プロデューサーの働き方や、仕事のシェアの仕方などを話し合った。
スキルアップ促進PT	2023年10月23日、2024年1月9日 「見て学ぶ」という業界の風潮や、どのように研修をしていくのが良いかなどを話し合った。

MIRAI Letter Project

劇場に足を運んでくださるお客様や、アートキャラバン・サテライト企画にご参加いただいた方々とのコミュニケーションを図ることを目的とスタートした「MIRAI Letter Project」は、舞台芸術を愛して下さるみなさまへのラブレターです。対象の公演事業を行う劇場や、サテライト企画の会場にて設置いただきました。

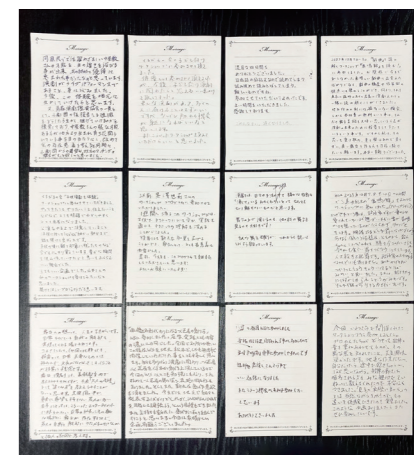
往復はがきの形式をとったのは、一方的なアンケートではなく、まず我々事務局が観客の皆さまに対して語りかけたいという思いから。そのメッセージに呼応するように、「MIRAI Letter」に乗せてさまざまな想いを頂戴しました。



MIRAI Letter



ロビーでの配架の様子



全国各地から想いを頂戴しました

年次シンポジウム2023

開催概要

日程 | 2023年12月4日(月) | 会場 | 紀伊國屋ホール ホワイエ | 開催方法 | オンライン配信による一般開催

第1部: 持続可能な創作環境を構築せよ
~「働き方改革関連法」を見据えて~

登壇者: 伊藤達哉 - ゴーチ・ブラザーズ -
(五十音順) 岡部真史 - 劇団四季 -
坂本もも - ロコ・範宙遊泳 -
田中希世子 - パルコ -
堀内真人 - KAAT 神奈川芸術劇場 -

〈第1部 登壇者〉



第2部: 業界を横断する共通基盤の構築は、
舞台芸術産業の強靱化を叶えるか?

登壇者: 上羅尚治 - ネルケプランニング -
(五十音順) 篠田麻鼓 - ホリプロ -
福井健策 - 骨董通り法律事務所 -
前野隆司 - 慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科 -
松田和彦 - 東宝 -

〈第2部 登壇者〉



働き方改革の課題と試み、 ハラスメント対策について

第一部では、新しい時代に求められる創作環境について意見を交わしました。創作環境や公演スケジュールに大きな影響がある「働き方改革関連法」(※2019年より順次施行)のほか、「フリーランス保護法」(※2023年)にも注目。舞台芸術業界慣習の問い直しや、稽古環境の見直しが求められている現状の取り組みをシェアし、職場や創作環境がどうなっていくのかを考えます。新法により、これまでのように残業をしないことが求められており、いずれも人員を増やして対応していることなど具体的な取り組みを各社から発表します。



「制作者」の増員については、パルコは増員したぶん人件費がかかるだけでなく今までと比べて個々の経験が積めないという人材育成の課題に対して、新たに制作推進班を作って対応しています。「技術スタッフ」は、対応している劇団四季やKAAT 神奈川芸術劇場ではさらに仕込み期間中に休日を設定。再演公演の多い劇団四季は『キャッツ』を例に挙げて初演と近年の公演を比較し、休みを増やしたぶん仕込みの日数が増えるなどどんな変化があったのかを具体的に示しました。またKAATの堀内氏は「リフレッシュすることでクオリティが上がった気がする」とコメントしました。一方、ロコ・範宙遊泳は登壇者のなかで唯一、制作者1~2名のみによる運営体制です。ミニマムがゆえに、団体外の横のつながりを大切に、時に協力しながら業務をおこなっています。またスタッフだけでなく、俳優の残業・就労状況の改善のためには、休日がメンテナンスだけに費やされないように連続2日で週休をとるようにしていることも紹介されました。

このように、それぞれの取り組みの根拠や、稽古日数の組み方などの現場対策の具体例、それらによる成果の報告をあげて情報交換をはかることで、互いの創作環境の背景が見えてきました。同時に、民間か公共か、自社劇場か貸館利用かなどの興行形態や座組によって、かかるコストに大きな差がでることも浮き彫り

になりました。

またハラスメントについて、坂本氏が「とにかく講習をやること」「規模に関わらず情報をシェアして参考にすること」と主張。その後、各社いずれも創作現場において現場のニーズに合ったハラスメント対策に取り組んでいることが共有されましたが、会場から「ハラスメント講習の対象はどこまで広げるのか?」「貸館利用の場合、劇場側がルールを設けたらどうか」と質問や提案があがったように、出演者や演出家以外の制作者などについての就労環境やハラスメントへの取り組みがこれからだという課題も見えました。

日本の舞台芸術の未来に向けて、 横のつながりによる取り組み

第二部では、現在ネットワークで取り組んでいる3つのPT(プロジェクトチーム)のリーダーが登壇しました。まずは司会の福井氏より、コロナ禍で政府交渉をしての所感、グローバルな視点での日本の状況、業界横断的なアップデートの必要性、政府支援策とその課題などがスライドとともに語られ、その後、各PTの取り組みを紹介します。

「保険制度PT」では、コロナ禍でどんな対策をしてきたかを松田氏より報告。公演が中止になった際の保険制度について保険会社への打診や、ネットワーク内でのセーフティネットの模索、政府への税制変更の働きかけなどがあげられ、既存の公演中止保険の拡大改善や、新発想の保険が必要なことを改めて共有しました。「チケットングPT」は、日本には複数のプレイガイドが個別に存在しており、共通の在庫やポータルサイトがないという状況があります。観客にとって理想の購入環境づくりへの取り組みや課題について、篠田氏が説明しました。現状、公演期間が近づいてのチケット購入や、体調不良などにより突然観劇できなくなった場合のサポートの無さ、海外からのチケット購入の難しさなどの問題があります。そこから観劇層の裾野を広げられるのか、インバウンド需要に対応できるのかなど、この先の課題感が共有され、現実的な課題改善の可能性として、「チケット販売会社が連携できるセントラルシステムを作れないか」と技術的な相談を進めているという報告がされました。

「イン・アウトバウンドPT」では上羅氏より、未来の人口減少に向けては観劇率のUPとマーケットの開拓が解決方法であるとして、若い頃からの観劇体験の創出やチケット代の優遇、海外客の取り込みについて提案がありました。とくに海外に向けて、海外からのインバウンド客へのアプローチと、国内の作品が海外へリーチしていくための施策について、インとアウトの両軸をうまく循環

させていくための展望やポイントがあげられました。しかし個人の努力では限界があり、字幕や宣伝にも難しさがあるため、現在、緊急事態舞台芸術ネットワーク内またはPT内にて各種勉強会が開催されており、また、補助金の政府交渉が行われていることを報告しました。

これらを受けて、ウェルビーイングを専門とする前野氏は「日本の縮図ですね」とコメント。「(演劇を)やる人を増やすのはひとつの手」「AIは日本文化と相性がいい」など、その知見からいくつかのヒントが示されました。

後半は登壇者によるクロストークを実施。主に海外層に向けたチケット購入のハードルについては、すでに一部で取り組まれているNFTチケットや電子チケットなど可能性が語られる一方で、英語対応スタッフの少なさや、転売の進化の懸念点もあがります。また、ウェルビーイングの視点から、観劇そのものだけでなくその前後も創出することの価値や、ダンスのように学校の授業に取り入れられるなどもっと生活と演劇が密接になることの重要性についても意見を交わしました。会場からは「そもそも字幕があるべきかどうか」と質問が投げかけられ、海外層だけでなく耳が聞こえづらい国内の観客に向けての字幕の導入についても経験談が共有され、いくつかの角度から問いを考える場となりました。



一部、二部を通して、公演形態による個別の違いごとの臨機応変な対応の必要性が示されつつ、このように情報や経験をシェアできるネットワークを活用し、良いところを互いに取り入れて行ける場の重要性を再認識するシンポジウムでした。最後に事務局長の伊藤より「業界を挙げて話していく入口にいる。これから10年と時間をかけていく」と、長期的な視野で取り組もうという前向きな言葉で締めくくり、合計3時間にわたるシンポジウムが終了しました。

| 公式サイト | <https://jpasn.net/sympo/2023/>



舞台芸術おしごとナビ2023



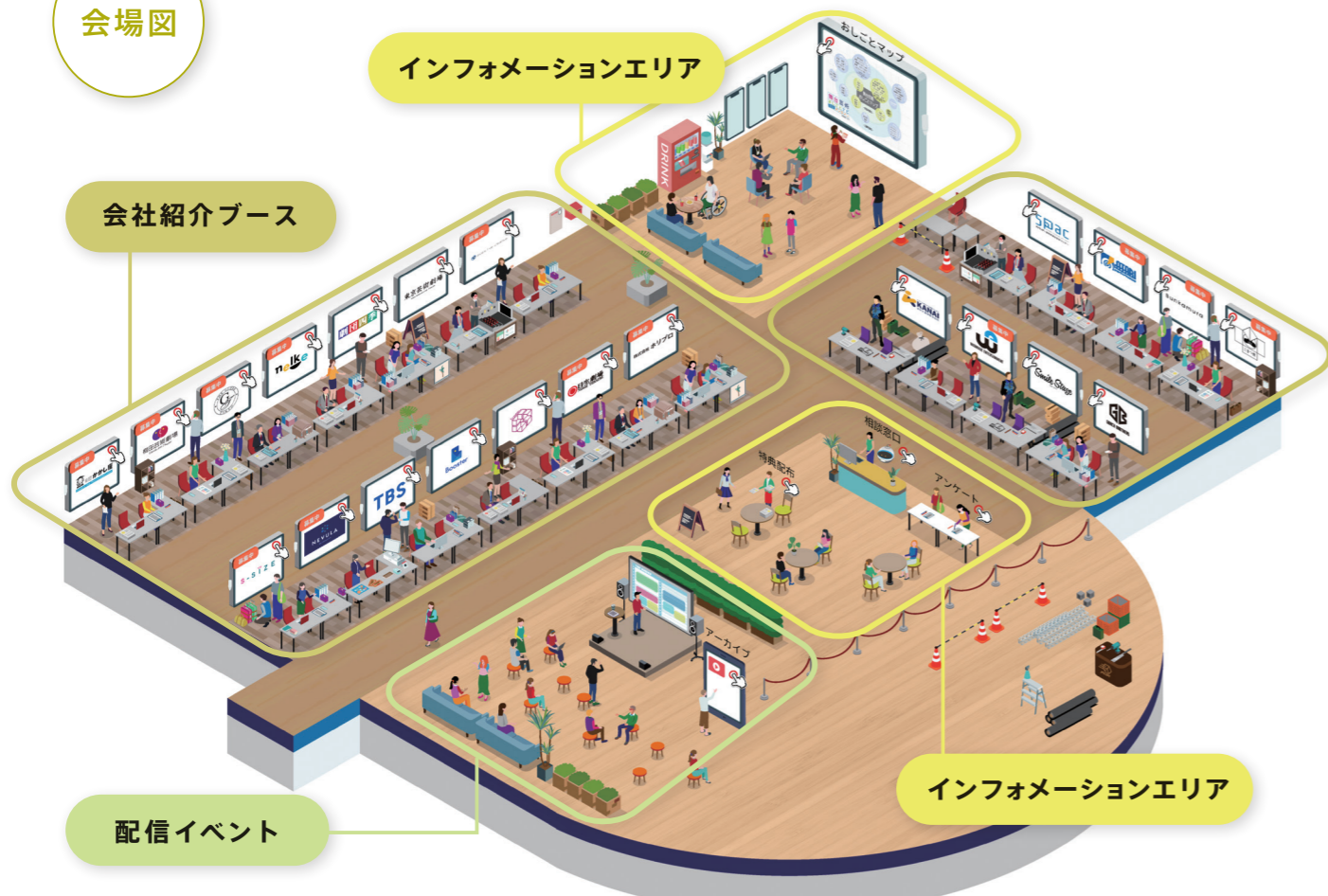
これまで舞台芸術業界はその特性上、職場ごとに求められるスキルや知識が異なり、求人の難易度が高くなる傾向にありました。また、取り扱う情報が繊細であるため、適切なマッチングが不可欠。

このプロジェクトは、将来、舞台芸術業界に就職したい、就職に興味を持っている学生、現在フリーランスで活動している方、別業種から舞台芸術業界を目指そうとされている方と、舞台芸術業界の多彩な職種との出会いの場を目的として、開催いたしました。

概要

期間：2023年12月16日(土)～2024年1月31日(水)
 会場：特設サイトにてオンライン開催
 来場者数：5623名
 配信イベント視聴者数：892名
 チャット訪問者数：604名

会場図



会社紹介ブース

各社の基本情報や福利厚生、働き方等の情報を掲載。企業情報を一覧性を持って見ることができました。

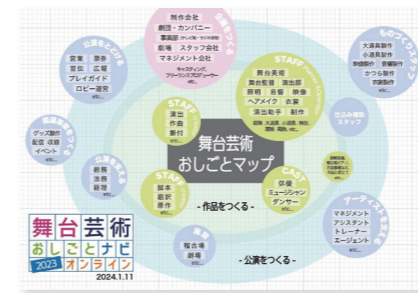
▼参加企業 ※五十音順

アタリ・パフォーマンス、梅田芸術劇場、エイベックス・ライヴ・クリエイティブ、S-SIZE、金井大道具、劇団かかし座、劇団四季、ゴーチ・ブラザーズ、こまつ座、SPAC - 静岡県舞台芸術センター、スマイルステージ、TBSテレビ、東京グローブ座、東京芸術劇場、日生劇場、Booster、boxes Inc.、Bunkamura、ネビュラエンタープライズ、ネルケプランニング、ホリプロ、ワタナベエンターテインメント

インフォメーションエリア

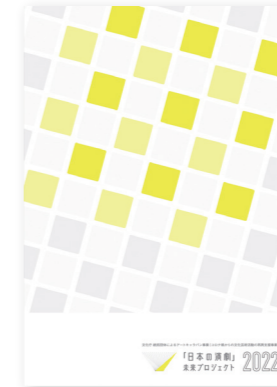
● 舞台芸術おしごとマップの掲載

舞台芸術業界の職種を一覧で見られるマップを作成し、公開いたしました。



● 『みらいジャーナル2022』のダウンロード

コロナ禍において、アートキャラバン事業に参加した企業のプロデューサーが何を考えていたのかが記された、2022年度版のみらいジャーナルを公開いたしました。



● お問い合わせチャット

事務局スタッフが舞台芸術おしごとナビについての質問や、舞台芸術業界で働くこと全般についての相談にお答えいたしました。

< 多く寄せられた声 >

- ・ 周りに舞台芸術業界を目指す友人、経験のある先輩など、相談できる人がおらず不安。
- ・ 知識や経験がないが、就職に向けてどんなことに取り組んだら良いか? など。



配信イベント

① 会社説明会:

オンラインでの会社説明会・質疑応答を実施。全国各地から多くの質問が届きました。

▼参加企業 ※登壇順

スマイルステージ、劇団四季、TBSテレビ、劇団かかし座、東京芸術劇場、金井大道具、ワタナベエンターテインメント、ホリプロ、S-SIZE

② セミナー:

『劇的空間をつくる～舞台美術・大道具のお仕事～』

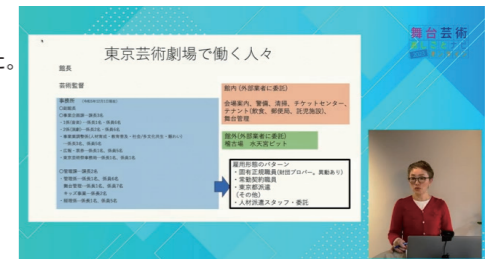
登壇者：金井大道具株式会社 代表取締役社長 金井 勇一郎

創業130年にわたる歴史と多岐に渡る経験を背景に、舞台美術家の視点から作品が本番に至るまでのプロセスを希少な資料も交えながらお話いただきました。

『おしごと座談会～制作・プロデューサー編～』

登壇者：白石朋子(東宝)、西村涉(梅田芸術劇場)、赤羽ひろみ(おしごとナビ事務局/ゴーチ・ブラザーズ)

制作会社、劇場など、はたらく環境が異なる次世代を担うプロデューサーの皆さんと、就職のきっかけや働き方、仕事のやりがいなどを座談会形式でお話いただきました。



参加者の声

- ・ 地方に住んでいるのでオンラインでの開催で助かりました。舞台業界に詳しい人が身の周りにいないため、情報を入手する場に出会えてよかったです。(20歳・福島県)
- ・ 普段あまり会社説明会などを開催していない企業も多く、全てのお話が興味深かったです。舞台制作全般に興味がありつつ、就活の仕方に迷いがありましたが、このような機会を設けていただき本当にありがとうございました。(21歳・神奈川県)
- ・ 既卒ですが、最近になって舞台芸術業界に興味を持ちはじめたところでしたので、隙間時間にふらっと閲覧できるインターネットでの長期間の開催はとてもありがたいと感じています。業界外に身を置いており、こうした分野の友人知人もおらず困っていたので、実際に動かれている方からお話を伺えるのはとても貴重な体験でした。(23歳・大阪府)
- ・ あってほしいのになかなか無い企画でありたいです。(22歳・愛知県)
- ・ 舞台芸術に関わる企業の情報が一元化されているところはなかなかないので(特に新卒だと適切な情報にアクセスすることすら難しいと思います)、今後もこういった催しが継続してほしいなと思います。(27歳・兵庫県)



舞台・ライブエンタテインメント産業に係る 業界横断定点調査・分析

舞台・ライブエンタテインメント産業がコロナ禍に直面し、危機的な状況を経験するなかで、我々は各種政府への要請・協議や業界としての課題・対応策等の検討を行ってきました。しかしながら、同時に、業界の従事者数、売上規模など産業としての基本的な構造を把握したり、ポテンシャルをアピールしたりするための基本的な情報ですら統計的観点から十分に整理できていないという課題も明らかになりました。また、コロナ禍など危機的な状況を迎えてから、急ごしらえでこの状況を調査するのではなく、平時から定点調査を行い、対外的にアピールしていくことも重要であると認識しました。

このような問題意識を踏まえ（一社）緊急事態舞台芸術ネットワークは、昨年度に引き続き（一社）日本音楽事業者協会、（一社）日本音楽制作者連盟、（一社）コンサートプロモーターズ協会、（一社）日本舞台技術スタッフ団体連合会と共同にて、2023年度「舞台・ライブエンタテインメント産業に係る業界横断定点調査」を実施致しました。

調査期間	2024年1月9日(火)～29日(月)
調査対象	JPASN正会員(218団体)
調査機関	一般社団法人芸術と創造
調査項目	

NO	質問	回答条件
1	あなたの会社・団体が加盟している業界団体として該当するものを全て選択してください。	全員
2	あなたの会社・団体の名称を記載してください。 ※会社形態(株式会社、有限会社、特定非営利活動法人等)の記載は不要です。 ※各業界団体(JAME、FMPJ、ACPC、JPASN)に加盟している会社・団体名を記載してください。	全員
3	あなたの会社・団体は法人化をしていますか。	全員
4	あなたの会社・団体の法人形態はどのようなものですか。	Q3で分岐
5	あなたの会社・団体の事業内容としてあてはまるものを全て選択してください。	全員
6	あなたの会社・団体の事業内容として最も中心となるものを選択してください。 ※判断が難しい場合は、最も売上高が大きな事業を選択してください。	Q5で分岐
7	あなたの会社・団体が行う事業の芸術分野としてあてはまるものを全て選択してください。	全員
8	あなたの会社・団体の本社のある都道府県を選択してください。	Q3で分岐
9	あなたの会社・団体の主たる事務所の都道府県を選択してください。	Q3で分岐
10	現在、あなたの会社・団体に従事している構成員数についてお答えください。 ※過去1年間において複数回以上のタイミングで報酬が支払われている方のみカウントしてください。 ※複数の役割を兼務している方がいる場合は、最も従事している時間が長い役割にてカウントしてください。 ※該当する役割の方がいない場合「0」と記入してください。 ※フルタイム・・・「雇用主と労働契約を結び、通所の規定労働時間にて従事している労働者」もしくは「年間でならした場合、おおよそ月に160時間以上、当該企業・団体の活動に従事している(職場外での稽古・研鑽・業務なども含む)労働者」 パートタイム・・・フルタイム以外の労働者のうち、過去1年間において複数回以上のタイミングで報酬が支払われている方	Q3で分岐
11	あなたの会社・団体の直近の会計年度の「売上高」はどのくらいですか。あてはまるものを選択してください。	Q3で分岐
12	あなたの会社・団体の直近の会計年度の「売上高」、「経常損益」を記入してください。 ※経常損失、債務超過の場合はマイナスの数字を記入してください。 ※どうしてもお答えいただくことが難しい場合は、該当箇所に「000」と記入して、次の設問にお進みください。	Q3で分岐
13	次の収入のうち、あなたの会社・団体の会計年度において発生したものを全て選択してください。	Q3で分岐
14	では、あなたの会社の直近の会計年度における次の収入の額を記載してください。 ※どうしてもお答えいただくことが難しい場合は、該当箇所に「000」と記入して、次の設問にお進みください。 ※費目間の額の重複がないようお答えください。 ※記載いただくものはおおよその額・推定の額で構いません。 ※「舞台・ライブエンタテインメント」に関連した収入のみを記載してください。どうしても、「舞台・ライブエンタテインメント」に関連した収入が切り分けられない場合には、その他の収入も含んだ全体の数字を記載してください。	Q13で分岐
15	あなたの会社・団体では、2020～2022年度に、次の補助金・助成金を受け取りましたか。 受け取ったことのあるものを全て選択してください。 ※ここでの年度とは行政の会計年度(4月～3月)をさします。	Q3で分岐

※調査結果は、2023年度「舞台・ライブエンタテインメント産業に係る業界横断定点調査・分析業務」報告書として、別途PDFで配布。

「日本の演劇」未来プロジェクト2021 実施概略

公益社団法人日本演劇興行協会との協働により、「大規模かつ質の高い文化芸術活動を核としたアートキャラバン事業」を実施。特に大規模事業者を資金面で支援した。

事業概要

事業期間	2021年7月1日～2022年1月31日
公演数	31作品/320ステージ
上演地域	全国20地域 宮城県、千葉県、埼玉県、東京都、神奈川県、福井県、愛知県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、福岡県
動員数	240,552名
公演団体(五十音順)	アミューズ、ヴィレッチ、梅田芸術劇場、エイベックス・エンタテインメント、キューブ、キョードーファクトリー、劇団四季、松竹、新歌舞伎座、宝塚歌劇、東急文化村、東宝、ネルケプランニング、博多座、バルコ、ホリプロ、御園座、明治座

事業内容

- ◎ 質の高い大規模な31作品を、全国各地で実施
- ◎ 作品の舞台映像を最新技術(8K+ドルビーアトモス)を活用して収録・アーカイブ
- ◎ 舞台芸術の映像化とアーカイブを「新しい演劇の生態系」として発信
- ◎ 各社公演の相互観劇を行うなど、関連事業を開始

主催:公益社団法人日本演劇興行協会、緊急事態舞台芸術ネットワーク

MIRAI PROJECT 2021

「日本の演劇」未来プロジェクト2022 実施概略

令和3年度補正予算文化芸術振興費補助金統括団体によるアートキャラバン事業(コロナ禍からの文化芸術活動の再興支援事業)に申請し、「日本の演劇」未来プロジェクト2022を実施。

2022年度は多様な舞台芸術関係者が集う「東京キャラバン the 2nd」をアートキャラバンの象徴と位置づけ、本部事業として実施。

さらには、シンポジウムを行い、コロナ後を見据えた舞台芸術界の再興の未来像を世界に向けて力強く発信。

事業概要

事業期間	2022年1月1日～2023年1月31日
公演数	30作品/261公演 ※一部公演中止に伴い、申請時より10公演減
上演地域	全国13地域 宮城県、栃木県、群馬県、東京都、神奈川県、静岡県、愛知県、京都府、大阪府、兵庫県、福岡県、沖縄県
動員数	206,348名
公演団体(五十音順)	アミューズ、ヴィレッチ、梅田芸術劇場、エイベックス・エンタテインメント、キューブ、キョードーファクトリー、劇団四季、松竹、新歌舞伎座、宝塚歌劇、東急文化村、東宝、ネルケプランニング、博多座、バルコ、ホリプロ、御園座、明治座

事業内容

- ◎ 日本を代表する団体の質の高い大規模公演を全国で実施
- ◎ ポストコロナを見据えた舞台芸術界の未来像を発信することを目的としたシンポジウムを実施
- ◎ 舞台芸術フェスティバルの国際発信を思索する結節点として「東京キャラバン the 2nd」と連携

主催:一般社団法人 緊急事態舞台芸術ネットワーク

MIRAI PROJECT 2022

JAPAN PERFORMING ARTS SOLIDARITY NETWORK

一般社団法人 緊急事態舞台芸術ネットワーク

社 名：一般社団法人緊急事態舞台芸術ネットワーク
(英文表記: Japan Performing Arts Solidarity Network | 略称: JPASN)

本社所在地：東京都港区北青山3-6-7 青山パラシオタワー11階

設 立 日：2021年9月16日

趣 意：新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の拡大をうけ、舞台芸術業界が危機的状況から脱却し、安全な状況で再開され再生していくために、互いに連携し協力し、情報を共有し合うことを目的とし、「舞台芸術に関わる団体、個人への支援」「舞台芸術に関わる情報の収集と共有、必要な提言」などを通じて国内の舞台芸術活動の振興を図るための組織として、「一般社団法人緊急事態舞台芸術ネットワーク」を設立する。

代議員

金井大道具
紀伊國屋ホール
キューブ
劇団四季
骨董通り法律事務所
ゴーチ・ブラザーズ
松竹
東急文化村
東宝
ネルケプランニング
NODA・MAP
バルコ
ホリプロ
ワタナベエンターテインメント

理事

池田篤郎(東宝)※
伊藤達哉(ゴーチ・ブラザーズ)
大島祐夫(アート・ステージライティング・グループ)
加藤真規(東急文化村)
金井勇一郎(金井大道具)
北牧裕幸(キューブ)
小見太佳子(アミューズ)
坂本もも(範疇遊泳、ロロ)
佐藤玄(バルコ)
徳永京子(演劇ジャーナリスト)
仲村和生(ナッポス・ユナイテッド)
野上祥子(ネルケプランニング)
野田秀樹(NODA・MAP)※
福井健策(骨董通り法律事務所)
船越直人(松竹)
細川展裕(スマートリバー)
堀義貴(ホリプロ)
前田利昌(紀伊國屋ホール)
松田誠(日本2.5次元ミュージカル協会)
宮城聡(静岡県舞台芸術センター(SPAC))
村田裕子(梅田芸術劇場)
山根成之(日本演劇興行協会)
吉田智誉樹(劇団四季)※
渡辺ミキ(ワタナベエンターテインメント)

※は代表理事

顧問

高萩宏(世田谷パブリックシアター)
渡辺弘(彩の国さいたま芸術劇場)

監事

三富樹子(デロイト トーマツ税理士法人)

部会構成

政策部会
開催部会

プロジェクトチーム構成

イン・アウトバウンドPT
国際フェスティバルPT
JLOX サポセンPT
チケットティングPT
ハラスメント対策PT
保険制度PT

(五十音順)

JAPANESE THEATER MIRAI PROJECT 2023

「日本の演劇」未来プロジェクト2023

事業運営委員 金井勇一郎 伊達なつめ 野田秀樹 福井健策 宮城聡

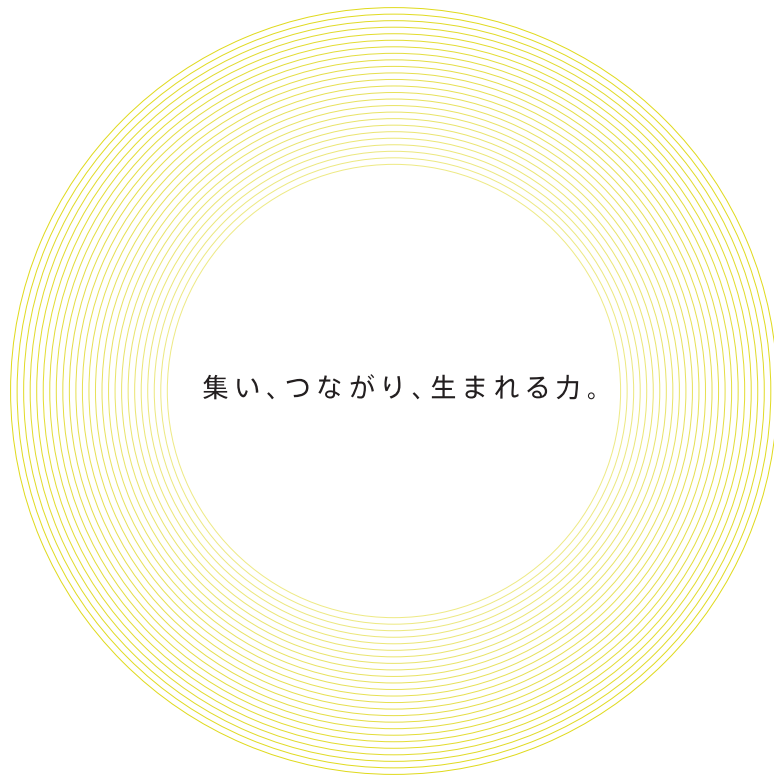
事務局 赤羽ひろみ 伊藤達哉 遠藤真有美 大森千裕 小倉千裕 片山知音
佐々木明音 佐々木一美 清水美里 鈴木拓 高橋舞 竹内桃子
中村友一 永滝陽子 成島秀和 長谷川きなり 福永光宏
日高和美 安田聖来 森國真帆

(五十音順)

みらいジャーナル2023 [冊子版]

編集 河野桃子 株式会社ネビュラエンタープライズ
編集協力 中川實穂
ライター 上村由紀子 五月女菜穂 丘田ミイ子 横川良明
アートディレクション 坂本和歌子(Three dots creative)
デザイン 七田尚美
発行 一般社団法人緊急事態舞台芸術ネットワーク
東京都港区北青山3-6-7 青山パラシオタワー11階
発行日 2024年1月31日

※無断転載禁止



集い、つながり、生まれる力。